



あの日のこと



pinokopapa

おじいちゃん？

あのおつきさま
おっきいね
キレイ



お月さまなど、ついぞ見なかった此の頃でしたが、
孫のお蔭でかぐや姫の話が信じられそうな気がしました。

月の呼び名なんて

満月 新月 三日月 半月 弓張り月 上弦の月 下弦の月 くらいしか

知りませんでした。後 十三夜 待宵月 二十三夜など、二十二とも二十四とも名称があるようです。私たち日本人は、月の表情一つにもこんなに素敵な名前を付ける、とても繊細な文化を育んできました。でも今の若い人たちは、こんなこと余り知りませんね。しかしそれは教えてくれる人も機会もなかったからだとおもいます。

秋は月を見てください。澄んだ夜空に月が浮かんでいます。

そしてまた薄月という言葉を知りました。

燃ゆる夏

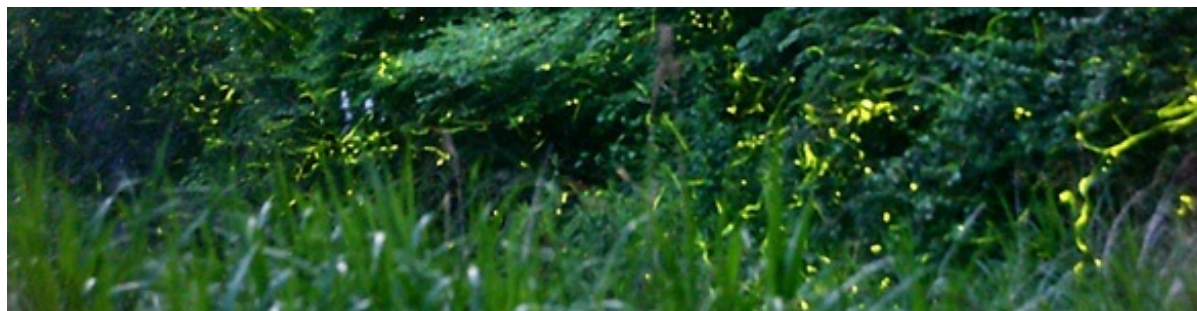
(もゆるなつ

淡き夢舞う

あわきゆめまう

闇蛍

やみほたる)



私の住む町は、朝6時に起床ラッパが響き渡ります。
田舎も田舎の、ど田舎ですが、昔から軍都でありました。
私の経歴等は非公開にしてありますが、下の写真を見れば、どこの町かは
わかってしまいますね。ただ、すぐにはピンとは来ないと思います。
それほどにも知名度のない田舎であることは間違いありません。

今聞こえてくる起床ラッパは自衛隊のラッパですが、
多分1.5km程も離れたこのJRの駅でも朝6時にははっきりと聞えます。
また軍都といってもそれ程大きな基地があるというわけではありません。

最近ラッパの吹き手が新米に変わったのか、聞いてる方がどうしよう
と思うほどの音に変わりました。



この駅は改修こそされていますが、本体はなにも変わっておりません。私も何十年前かに、ここから汽車に乗って旅立ちました。大学受験にも、帰郷にもこの駅から、そしてまた、この駅に、まだ国鉄と言ってた時代の駅に立ち帰りました。



そしてここで結婚し、ここから旅立つことはなくなりました。勿論旅行とかには行きましたが。

大学へ行った後、１０年余り離れていたせいでしょうか、私には訛りが殆どありませんでした。だからでしょうね、故郷に帰ってきているのに、知らない人に「出身は」と訊かれることもありました。

この駅は改修こそされていますが、本体はなにも変わっておりません。私も何十年前かに、ここから汽車に乗って旅立ちました。大学受験にも、帰郷にもこの駅から、そしてまた、この駅に、まだ国鉄と言ってた時代の駅に立ち帰りました。



そしてここで結婚し、ここから旅立つことはなくなりました。勿論旅行とかには行きましたが。

大学へ行った後、１０年余り離れていたせいでしょうか、私には訛りが殆どありませんでした。だからでしょうね、故郷に帰ってきているのに、知らない人に「出身は」と訊かれることもありました。

かわいい写真を撮りました。

善通寺で一番大きな神社の護国神社です。



下手な句を付けて申し訳ありませんが。

英霊を 祀る社も 七五三
(えいれいを まつるやしろも しちごさん)

ところで、護国神社の木立を抜けると、隣併せに乃木神社があります。乃木と言えば、日露戦争のときの乃木大将のことで、ある意味、今日の善通寺を形作ったひとです。しかしこの隣の中央小学校に通っていた私は、ここが神社だという意識はなく、子供たちの遊び場という感じで、森のほうでよく遊んでおりました。



そのころに比べ、参道はきれいになり、よく整備されています。そして、この乃木神社は護国神社とともに「讃岐宮」　ーさぬきのみや　ーともいわれてます。

とってもやさしい響きの名前でしょう？私は森閑とした静かなこの乃木神社の方が好きでした。

(追伸)実は私自身、このお宮にきたのは何十年振りかで、下の写真の石碑と門が移築されていた事など知りませんでした。



これが病院と思われたかもしれませんが、この写真は病院の建物を背にして撮っております。なぜそんなことをしたかという、昔の面影の残っているのはこれだけのよう思うからです。私は幼時大変体が弱く、よく熱を出したとかでこの病院に、診察に来ておりました。当時は木造の、陸軍病院そのままの建物であったと思います。



病院に入ると、履物を預けなければなりませんでした。ー ぼく 来たか ー 胡麻塩頭のおじいさんがよく来る私を覚えていてくれて、そう声を掛けてくれた事でした。私は母から渡された、確か二円・・・三円・・・をそのおじいさんに渡しておりました。どうなでしょう、おじいさんと言っても、今の私から見れば、今の私よりも若かったかもしれません。

ページのタイトル通りです。今はもうなくなったかのように言われておりますが

ご覧の通り、今でも現役です。私も時々投函します。



そしてこれも、若い人は「これなあに」と言いそうですね。裏通りの町角に、多分使われていることはないと思いますが、そのまま立っております。どこにあるとは言いません。上のポストは判るかとは思いますが、ちょっと面白いではありませんか。いわば絶滅危惧種ですかねえ。



この仙遊寺の名前からでしょうね、この辺りを仙遊町と言います。子供の頃、この写真の左側の空き地にブランコが出来ました。そんな遊具などとても珍しく、近隣の子供たちが皆集まってきて、いつも取り合いでした。そして私のような声の小さな子供は、何時退いてくれるか、もう交代してくれるかと揺れるブランコをジッと目で追っておりました。

その内、どうしてでしょう、子供達が集まらなくなってブランコも乗る人がいなくなりました。



そしてその時になって初めて思う存分ブランコに乗ったのですが・・・あの熱気はどこへ行ったのでしょうか、どんなに漕いでも揺らしても、独りでは楽しくなんぞありませんでした。それから私はここへは行かなくなっていました。

体の弱かった私は、病院が近いこともあってよくこの病院へ診察に来ておりました。当時は病院もまだ木造で、診察までの間座っているベンチも木造であったと思います。その頃の私は多分幼稚園かその前であったでしょう。親と一緒に待ってる間、まだ字も読めない私は、たぶん アサヒグラフ とか 毎日グラフ とかではなかったでしょうか、待合室にあった写真誌をじっと見ておりました。それも行く度行く度、よく似た内容の写真誌を飽かずに見ており、ひょっとしたらおんなじものを繰り返し見ていたのかもしれない。そして、それを見ていた周りの大人たちが ― ピカドン ― という言葉と、何人もの人が亡くなったとか、凄い威力だとか、そんな話をしておりました。そんなことが何回か繰り返されたのでしょうね、大人の話には口など挟んだことのない、気弱な子だった私が父に ― その時は何故か父と一緒に来ておりましたので ― 小さな声で 「僕これ見たことある・・・」 と言ってしまいました。



そんなことなどある筈もないことですが、子供心に、何度もこんな写真を見続け、大人の話を聞き、まるで刷り込まれるように思い込んでしまったかと、今だったら思います。写真もカラーだったかと思ったりしますが、それも大人になっての知識が、そう付け加えて思わせているのかもしれない。写真誌の名前も、大人の私なら知っていたりするのですから。

これは国立 善通寺病院の裏から撮った空のの写真です。なんか意味深なタイトルを付けましたが、私が幼い頃は飛行機が珍しかったものです。ですから爆音がすると

大急ぎで外へ出て、空を見上げたものでした。確かに別な飛行機も飛んでいたことと思います。多分プロペラ機だったのでしょーうね、旅客機も見た覚えがあります。遠く銀色に光っておりました。

しかしこの空を飛んでいた一番印象深いものは、双胴の ー つまり飛行機を2機横に並べて翼同士をくっ付けたような、そんな飛行機でありました。今ならそれが、双胴の悪魔と呼ばれていた P-38 ロッキード だと言えますが、それは大人になって付け加えた記憶です。この善通寺の空を未だP-38 戦闘機が飛んでおりました。そして子供には まるで スルメのくっ付いた尻みたいに見えておりました。時に3機の編隊で、この辺りの空をゆっくりと爆音を振りまいて。



そして、この空を、私は旅客機が随分と低空飛行で飛んでいる夢もみました。まるで粘土細工の、でこぼこした機体が、手の届くようなところをゆっくりと飛んでおります。私は手を振り、おおーい とかなんか叫びました。すると機体の丸窓から、金髪

の白人女性が手を振り返してくれました。飛行機が飛んでた、手を振り返してくれた。夢の話と自分でも分かっていながら、両親に一生懸命話しました。

ただの曇り空の写真ですね。仙遊寺の側から 農事試験所 の空を写したものです。農事試験所と言っても今はもっと大変な名前が付いているようですが、私たちの年代には 何とか研究機構とかは馴染めません。大体この辺りの地名にしても、親が呼んでた練兵場と言う地名で言いそうになるのですから。そして、この辺りは一面野原でありました。またこの試験場の表の通りは舗装もされず、車が通ると土ぼこりがいつも舞っておりました。その通り、善通寺駅から善通寺病院までは、一時期専用バスが行き来しておりましたんですよ。勿論何か重要な建物でもあったんでしょうか、黒塗りの自動車も止まっていたりもしました。それは今の消防署の辺りだったと思います。



それはさておき、私はこの空で生まれて初めて 虹 を見ました。虹を教えてくれたのは母でありました。夏の日、にわか雨が降り、そのあと陽が射して高く遠く、弧

を描いて 虹 が架かりました。なんて美しいものがあるんだろうと私は思いました。後に、童話を読めるようになって、虹の根っこには宝物が埋まっていると読んで、私は童話ながら本当だと思いました。そして童話のように、懸命に虹を追ったりしたこともあります。嘘だろうって？子供心にでも作り事とは解っていたんですけどね。

おじいさんとおばあさんがおりました

おばあさんは、ほんの小さな花畑で草取りをするのが仕事でした。つばの広い、黒の帽子を被って、小さな腰掛に座り、夏の朝早く、まだ涼しいうちに少しずつ草を採っていきます。最後のむねを採り終わると、もう最初のむねに草が生えており、また草を採り続けます。花畑の横には枯れた草がこんもりと山を作っておりました。

お早うございます と 声を掛けると、ちょっと振り返り、膝に手を添えて、小さく頭を下げ お早うございます と 挨拶してくれます。

或る日、夏の夕方、おじいさんがおばあさんに付き添われ、散歩をしておりました。

またある日の夕方、今度はおじいさんが一人で杖を突き、ゆっくりと、少しずつ歩いておりました。おばあさんは、つばの広い、黒い帽子を被って少しずつ草を採っておりました。

そして何日も何年かも経って、おじいさんを見なくなりました。でもおばあさんは草取りです。

ある日、おじいさんとおばあさんの家の鉄の門が大きく開かれ、若い人やら見たことのない人やらがあっちこちしておりました。

それからは、おじいさんもおばあさんも見なくなりました。 いえいえ、台所の灯は点いております。

一年ほどして、荒れ放題の花畑の草が少しずつ採られていくようになりました。でも昔のようには、花は咲いてはおりません。

今日も台所の灯は点いておりました。

こんな情景を書き連ねると、嘘だろうといわれそうですが、嘘じゃありません。ニュースにも　ウリボウ　の背中に猿の子供が乗って走るのが報道されていたぐらいですから。

健康のため、メタボ指導を受けたためと、よく歩いておりました。その日も　おだいっさん　（私たちは善通寺のことを通常こう呼んでおります）　の赤門に達しようとするところまで歩いてまいりました。もうそこが赤門というところまで来た時、なにか人が避けて通るところがあります。車も徐行し、遠く避けて通ります。そして、ミャアミャアと悲しそうな、確実に助けを求めていると解る子猫の声も、聞こえてきます。そして私も、人が避け、車が避けて通ることと、助けを求める子猫の声が、瞬時に結びつきました。車道に子猫が震えてうずくまり、大きくて目脂を付けた、痩せっぽちの犬がそのまわりを回っておりました。　エッ、誰も子猫を助けないの？　なら私が蹴飛ばす振るか石を投げつける振りをすれば、犬を追い払えるだろうと思ったのですが、大きな野良犬の目は周りを見渡し、人間に助けを求めておりました。この子を助けてあげて、誰か助けて、子猫を明らかに気遣い、車から、不埒なものから子猫を守り、さらに助けてくれる人を求めてグルグル回っておりました。　...　私も周りの人同様、目をよけ、顔を伏せて、その横を通り抜けました。

私の手帳には　　飢えた子を抱いたことがありますか　　富がこの子を飢えさせるのです　　という言葉が書き留められています。もの凄い言葉だと、この言葉を聴いたときには思いました。でも現実ではこの有様です。

去年の、秋も終わりの頃、急に冷たい強風が吹き、あんな暑かった夏はどこへ行ったのかと、不思議に思う程の季節の変化が訪れた頃のことです。冷たい風が吹き、銀杏の葉が歩道一面に舞い散っておりました。上から舞い落ち、地面を黄色い葉が走ります。空は灰色でした。車もあまり通りません。まだ秋でしょうか。冬のようにでした。

おばあさんが銀杏の葉を踏みながら行きます。手にトイレットペーパーを提げ、スーパーからも遠いのに、おんば車を押して帰って行きます。

私たちの子供がこの先の児童公園で遊んでいた頃は、あちらこちらで甲高い声が聞こえておりました。そして 時が 流れておりました。

今この町は 時が 止まっているみたいです。 時が 流れることを忘れてしまっているようです。どうしたんでしょう。

寒空を 手押し車が ことことと
(さむぞらを ておしぐるまが ことことと)

烈風に 怪鳥ふわりと 浮き 啼く
(れっぷうに かいちょうふわりと うき なく)

頬を打つ 雪玉犬の 背中に乗る
(ほほをうつ ゆきだま いぬの せなにのる)

単なる石の柱です。でも、とても大事にされているでしょう。写真が明るすぎて、字が見えにくいのですが実は「日支事変・・・」と書いてあります。さすが軍都の善通寺だとは思いませんか。この石碑がどこにあるかはあえて申しません。私は子供のときから、ここにあることは知っておりました。当然ですかね。

でも町の裏側のどこかに、昔から立っております。やはり郷土の歴史の一つだとは思っております。



そしてこの場所はこの辺りの集会場になっており、昔からお祭の獅子の練習が行われておりました。ところが私自身は、親が「よそ者」で、昔からこの善通寺に住んでおりませんでしたから、太鼓敲きとかには呼ばれることがありませんでした。かんだかい鉦に合わせ、大人のたたく平太鼓と共に、男の子が太鼓をたたきます。それに乗って獅子が舞います。善通寺の祭りはこの獅子が主役です。ものの本によりますと善通寺の獅子舞いは、なんと室町時代にはもう盛んに行われていたようで、現在では十二通り流し「つまり善通寺の獅子舞の舞い方を十二流としたとのことで、なかなか由緒あるものではあります。そしてその獅子舞には烏天狗が付いて歩いております。子供たちは「クソマーン」と口汚くからかいます。そして、全力で追いかけてくる烏天狗から、こちらも全力で逃げます。脚の遅い私も最初は恐る恐る、後には口一杯に友人達と共に罵り、からかい、必死に逃げ惑いました。獅子に付いて歩き、太鼓、敲かしてと頼んでみたりしましたが、無言で無視され、祭から無視された子供の抵抗のような気分であ

りました。

これはなんでしょう。知らない人は、墓石ではと言います。これが仲良く立っているのは甲山寺と言う八十八ヶ所の一つの寺の側を流れている弘田川の土手の上です。

下の写真の





左上にもこれが写っています。そして下の写真とか、次の写真とかを見れば、これが墓石とかではないことは直ぐ解ります。

このコンクリートのお堂には、注連縄が張られておりますから、これが神様だとは思いますが、他の地方とは違った形の「田の神さあー」 ー田んぼの神様ではないかと思いますがいかがでしょう。四国八十八ヶ所巡りとかにお出での際は、ちょっと捜してみてください。



この写真は甲山寺の寺内の一郭ではありますが、それを紹介したいわけではありません。このお寺の近く、どこだったのでしょうか　－　今はすっかり様子が変わり、また私も幼かったので全く解らなくなっておりますが、この甲山寺若しくはこの付近、甲山の下



に、四方を高い土手で四角く囲まれた場所がありました。その中へは土手の外側から架かったコンクリートの橋を渡って行くようになっておりました。私はこの場所が大好きで、遠くに行ってはいけないと母に言われておりましたが、時々大冒険のつもりでこっそりその橋に登りに行っておりました。春にはその土手を、上がっては滑っており上がっては滑っておりする子供の遊びに、ズボンを草の緑で染め、大目玉を食らったりもいたしました。

そして後に、その施設は陸軍の弾薬庫跡だと知りました。今は私の大好きだったコンクリートの橋は勿論、弾薬庫全体が跡形もなく無くなっております。私の一番懐かしい場所です。

今の自衛隊の弾薬庫は大麻山の中腹、農事試験場の　――　おっとそんな軍事機密を洩らすと大変なことになりそうですね。でも地図に描いてありますけどね。

色々なところの写真を撮りたくて頑張っているのですが、なかなか間に合わず、更新できずにおりました。がふっと手近」かなところに、とんでもないものを私は持っていることに気づきました。それが下の写真です。奉公袋と書いてありますね。それだけで分かる人はもう数少ないと思います。勿論復刻品などではありません。次のページを見て下さい。



収容品 として 軍隊手帳 勲章 云々 というのが読めると思います。そのほかに私は未だ軍で使っていた毛布も持っています。勿論私が直接手に入れたものではありません。父と母が、どうしてか持っていました。毛布はこの 奉公袋とほぼ同じ色で、被るとちくちく痛くて慣れることができませんでした。しかし母は器用な人で、その毛布を色々に裁断し、私のジャンパーまで作ってしまいました。町の洋服屋さんに ジッパー を一緒に買いに行った覚えがあります。その頃は チャック と言っていたと思いますが、高価な、珍しいものだったのです。小学生の制服のような、カーキ色のジャンパー (ジャンパー と私たちの世代は呼ぶようですが) を、それでも私は得意になって着ておりました。未だ誰もそんなものは持っていなかったのですから。



あまり政治的な発言は控えておきたいと思っておりますが、このページを別なところに置いて置き忘れ、そえになんか書いたままになっておりましたので、ついでのことと書き継いでおきます。

野間宏氏の 真空地帯 とか 大岡昇平氏の 俘虜記 などからしか分かりませんが、徴兵制を安易に口にする人は、その人自身がこの袋を持って、あの時の軍隊に一兵卒として行ってみればいいです。

幼稚園に通いだすと、私は赤門筋をいつも横切るように通園しました。町はにぎやかで、近隣からの買い物客があちこちの店を覗いたりしておりました。徳島の人たちが嫁入り道具を、ここに買いに来るとも聞きました。私は今でもこの町を歩くと、ここは

***屋さん、ここは ***さんと名前が分かります。呉服屋さんが三階建てだったか四階建てだったかのビルを建てたと評判になったこともありました。そこは今も頑張っており、つい、孫の七五三の着物を見かけ、買ったことがありました。

その頃は赤門筋の商店主と言え大変なもので、思えば、威張っていたのでしょうか。子供が一人で覗いたりしていると、買わんのやったら、向う行き と追われたこともありました。心無い仕草と今でも思いますし、思い出しても不愉快です。

そんな中、先に記しました、検番が無くなった跡地に、今のスーパーの先駆けである ママの店 が出来ました。出来た当時は大変な繁盛振りで、女の人の買い物客で子供など弾き出されそうな勢いでした。あそこの店より、ここの店よりあれが安いこれが安い、そして何より一箇所で要るものが全部買えると、母も喜んでいました。そして、そこで買える物の中で最も目新しいものと言え、合成洗剤 でありました。当時、野菜もこれで洗えば回虫の卵がいなくなって衛生的だという、今では考えられない宣伝がされていたと思います。

そんな勢いの ママの店 も左程日を措かず、消えて無くなるように店仕舞いしてしまいました。回りの店を圧迫するという圧力で潰れたと聞きました。ライオン館の跡地にも ライオンスーパー というのが出来た筈ですが、これも直ぐ無くなり、当時ブームだった ローラースケート場 になったとは、先に書きました。そして、それも直ぐ閉じられたとも。今流で言うなら、新しいビジネスモデルが って言うのでしょうか。そんな時代でした。

しかしそんな赤門筋にも、美風は残っておりました。私達幼稚園児が帰っておりますと、 ボク ボク とか ジョウチャン とか声を掛け、割烹着を着たり白いネクタイをしたりした人が、私達に紙の小袋に入れたものを手渡してくれます。また違ったときにはその外に鉛筆とノートも一緒にくれたこともありました。讃岐には、またはこの辺りでは嫁入りの際、近所の子供達に、そして商店街とかでは通り掛かった子供達に引き出物として おいり とか文房具を配ります。私も何回か貰ったことがありました。そんなことがあったことで後に色々な風習を知り、私も娘が結婚するとなった時、こちらからわざわざ車一杯の おいり を積んで引き出物の一つとしました。父としてとても嬉しいことでした。

善通寺の繁華街と言えばここしかありません。この通りの横道、路地に入るとうら寂しい、民家を改造したようなバーとかスナックが今でもあります。明るい時に見ると、まるであばら家としか思えないような建物で、ちょっとびっくりします。

ところが私自身はお酒は一滴も飲めず、こういう所は今だかつて縁がありませんでした。中学校のとき、朝御飯も出た奈良漬を美味しくて何枚か食べ、学校で お前熱でもあるんか といわれたことがあります。体質なんでしょうね、粕汁で作った甘酒で背中一面に蕁麻疹が出来たんですから。

それはそれとして、赤門筋の北の通りは、昔富士見町と言ってたと思います。今は善通寺町といいます、映画館の キリン館 は元の町名から富士見座とってたんですから。そしてそのキリン館の西隣に、昔から有名な料亭がありました。父が接待にここを使ったことがあるらしいのですが、よく知りません。その裏に、東西の細い路地があり、昔のことですから充分覚えてはいませんが土壁に黄色い漆喰を塗り、上に瓦を置いた塀の、何だったのでしょうか、細長い庭のある立派な日本家屋に行ったことがあります。小学校に入りたてで、友人...ではなかったのですが、或る子に無理矢理連れて行かれ、なんで僕なんだろうと、首を傾げておりました。私はその子が嫌でした。態度が粗暴で、何か気に入らないと直ぐ陰湿な暴力をふるいます。つねる、小突く、頬を叩くーそんなことを平気でする子でした。そして、なにか眼に陰しいものがあり、大人びていて、常に暗い、暴力のにおいをさせた子でした。ですから、わたしはこの子が嫌で...怖かったのです。その子が、なぜか今日機嫌良く私を連れて、自宅で勉強しようと言います。怖かったので仕方なく付いて行くと、その子は表門からではなく、横の木戸から、何故かそーっと入って行きました。まるで忍び込むように...。そして誰もいないことを確かめると、縁側から障子戸を開けて部屋に入り、見たこともないようなおもちゃ を出してきて、遊ぼうといいます。勉強するんじゃないの？と戸惑うばかりでした。そこへ**ちゃん 帰ってたのなら 云々 ときつい声がしました。背中を鞭打たれるような声でした。見ると、派手な着物にひきつめ髪、とても怖い顔をした女の人で、**ちゃんの母親と分かりました。その途端 **ちゃんの顔は強張り、怯えが走りました。後は良く分かりません。 この子は？ **君と一緒に勉強しようと思って... その後は女の人怒声と、**ちゃんの声殺した泣き顔でした。そ

れからその女の方は私に、投げつけるように帰れと言ったと思います。女の方は**ちゃんの手か腕を掴んで障子の向うに行きました。私は暫くどうしていいのかわからずにはいましたが、そっと忍び足で裏木戸から出て行きました。入学式の時、母親が忙しく、代わりの女の方が連れてきた子がいました。派手な着物で、けばけばしい化粧をし、妙に愛想の良い物言いで、うちの ボン をよろしく と担任になる女の先生に、気取ったお辞儀で品を作った物言いで頼んでた子がいました。暗い顔の子でした。それがこの**ちゃん、この辺りは、昔の遊郭であったと、あとで知りました。 ...**ちゃんて、オメカケサンの子やと ... そんな言葉も聴きました。

父の残したもの

下の写真を見て、ああ と頷く人は少ないのではないのでしょうか。面相筆 と いいます。とても細い筆で、軸にそうかいてあるのが確認していただけるものと思います。これは人形の眉とか髪を描く物だとネットにはありました。しかし父はそんな風には使っておりませんでした。... いや大体、使ったことがあるのかなあ。確か、一度使ってみて、首を捻っていたように思います。

父は大変な新し物好きでした。今そんなものがあれば大変なもんですが、私が物心付いたときには 蓄音機 アコーディオン ラジオ 写真機 と いったものが私の身近かにありました。蓄音機も朝顔型のラッパの付いたもの、木の蓋の付いたいかにも高級そうなものと何台か違った種類のものがあったように思います。私はそれで

横浜の港から お船にのって 異ィー人さんにつれられて
とか

あーかいべべ着たかわいい金魚
という歌詞の曲などの童謡を覚えました。そんななかで

森の木陰でドンジャラホイ シャンシャン手拍子足拍子
という歌詞の 森の小人 は大好きな童謡でした。私がそれを幼稚園で一人歌って遊んでおりましたら、先生が ー と言っても 保母さんでしょうね ー 聞きつけて、みんな 聞いて と言い、みんなに聞かせました。私は恥ずかしかったけれど、つい二番まで歌ってしまいました。



この歌を聴くと、 とんがり帽子をかぶり、先の丸く上がった靴を履き、笛を吹いたり太鼓を叩いたりして夜の森で踊っている ― 子供の頃の私には、眼前にそんな光景が一杯に広がって、いつも夢のようにそれを見ていました。 どういった子供だったんでしょうねえ。今は品行方正、健康優良爺いで、本当に面白みも渋さもない、無菌培養のような爺さんになってしまっておりますが……。ですから、娘が大学に行く時、私は娘に 男って皆お父さんみたいだとは思うなよ、お父さんは例外中の例外なんだから と言いました。すると娘は 解ってる って返事でした。 えっ？ ... どう解釈すればいいのか、複雑な心境でした。

蓄音機から話が飛びました。面相筆でした。昔の写真屋さんは、大きなフィルム原板で写真を撮り、修正をして写真としていたようで、その修正にこの面相筆を使っていたようで、父はカメラに凝りにこり、現像 焼付け まで自分でやっておりました。暗室はトイレへの通路であったと思います。暗幕を張り、赤色燈を点け、焼付けには巨大なレンズの上でまばゆいばかりの電球を点し、その後印画紙を現像液のはいったパレットに浸けます。すると、あぶり出すようにゆっくりと画像が浮かび上がってきて、それを定着液のパレットに移し、次に水の入ったパレットに入れて洗います。こんな手順を踏んでいたように思いますが、違うかもしれません。ただ父がレンズを上げたり下げたりすると下の印画紙の上で画像が大きくなったり小さくなったりして、私はなによりそのレンズが欲しくてなりませんでした。

十徳ナイフがありました。なんとも中途半端な十徳ナイフですが、それは父がフィリピンで捕虜となり、その収容所で米軍からもらったステンレス製のナイフです。これに付いている紐も当時のもので、何十年も経っているのに切れもせず、擦り切れてもおりません。ただ、私がこれをおもちゃにし、つぎに私の子供が魚釣りに使い、充分酷使しておりますので、突き刺すための錐のようになっている部分は先が曲がったりはしております。丈夫なものですね。なにより紐が当時のものってことに驚きませんか？振り回したり腰に括り付けてたりして相当手荒く扱ったものです。

私が今の仕事のために、長期研修を受けていたところの所長は、戦争中満州だったか中国だったかで飛行機を作る工場の所長をされていたそうです。その人が こっちはガラスの直ぐ割れる風防なのに、あっちはこんな厚いアクリルなんだから、負ける

はずだよ　　といったことがありました。ゼロ戦は最も優秀な戦闘機だったはずと思い込んでいた私には浅学菲才で、よく理解できませんでした。しかし、肥後の守とこのナイフの違いは分っておりました。

多分物資が欠乏したからとか、向うは物量豊富だったからとかではなく、パラシュート用の絹糸が入って来なければナイロンを、ガラスは軽くて丈夫なアクリルでと、敵に劣るところを科学技術で克服しようとしていったことと、ゼロ戦は優秀だからと一つの成功にこだわり、その神話に拘泥したこととの違いかも知れません。そんなことを、今は考えてしまいます。

父は確か昭和18年に徴集され、後にフィリピンへ派遣されたと聞いています。ただ、父は学歴こそありませんでしたが賢い人でありましたから、海軍に徴集されても普通なら2～3ヶ月で戦地に赴かされるところを、訓練期間の長いトラックと戦車の運転に志願し、藤沢だったかで半年訓練を受け、それから戦地へ行ったと言っておりました。トラックか自動車に乗ったことのある者は手を挙げろ　ー　そういわれ、九州の炭鉱で乗せてもらったり触らせてもらったことがあるだけで、運転なんかしたことないにも関わらず機敏に手を挙げ、戦地に赴くのが少しでも遅くなるほうを選んだということです。非難を浴びそうで、父の名誉ためにはこんなこと書かないほうが良かったかもしれませんが、苦し紛れの一心であったようです。しかしそのことから、容赦ない日々だったようで、速成で運転技術を習得せねばならず、かつ今の人のように何らかの予備知識を持っているわけでもないのに、毎日がビンタビンタだったそうです。さらに、運転できるだけではなく、戦地では何もかも自分が出来なければならないと、修理技術も叩き込まれるわけですから大変な思いだったようでした。しかしそんなもの、後にはなにも役に立たなかったとは言っておりました。そして、戦地にはなんとか上陸できたけれど、始めの数日は嘘のように何事もなかったのに、突然装備も何も吹き飛ばされ、戦闘らしい戦闘を交えることも余地もなく、後はただフィリピンの森の中をさ迷い生き延びることだけが戦いで、食料と隠れる場所の確保が毎日の戦闘だったのです。

父が何時の時点で負傷したか、そう詳しく聞いたわけではありませんし、父の口も重く、余り話そうとはしませんでした。近くで砲弾が破裂し、手足を失うような事はなく済みましたが、砲弾の破片が体に食い込んで、その傷口は塞がらず、膿を垂らしたまま終戦を迎えました。そして降伏をすることとなり、米軍に収容される時、上官はせめて日本軍人として恥ずかしくないように、整列行進をして投降せねばならないと部下全員を歩かせ、出来ぬものには手榴弾を置いていったそうです。置いていかないでくれえ　連れて行ってくれえ　という叫び声を聞きながら行進していくと、その声も小さくなり、そして聞こえなくなり、手榴弾の破裂音が何度かして、それで終わりでした。あの戦陣訓　生きて虜囚（りょしゅう）の辱（はずかしめ）を受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿（なか）れ　というのはなんだったんでしょう。父がこんなことを語ったのは一回だけでした。言葉にしまえば、それだけで終わる、それだけのことになってしまう、あんなことはそれだけではないのだと言い、生涯、二度と語らず持っていきました。

一つの時代に色々な世代の人が生きています。ところが後から生まれたというだけで、先に生まれた人を否定していいのでしょうか。戦争に責任はないのかもしれないけれど、自分には関わりのないこととして抹消していいのでしょうか。私は父の体に刻みこまれた戦争の傷跡を否定も、見てみない振りも、ましてや非難などできません。

私は

海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍

の子供です。

私は、父の代わりに善通寺のビルマ慰霊塔に今も参っております。

父は名前も地位も財産も残せませんでした。この世に残したものは、子供一人、母も同じことです。生きていくだけで精一杯でした。

新し物好きの父は一時期カメラヲ趣味にしておりました。そのことから、共同住宅の人たちの何かの記念写真を撮ってと頼まれました。場所はどこかの体育館か講堂のようなところで、住人皆が舞台にあがり、思い思いに並んで立ちました。カメラはどんなだったのでしょうか。素人なのに写真屋さんのように、三脚の上にカメラを構え、フラッシュも用意し、あれこれ指示を出して撮ることになりましたが、ここで悩んでしまいました。フラッシュのほうです。金属棒の上に二つ折りの浅い、シガレットケースのようなものが付いた、マグネシウムを焚く 閃光器 といわれるものです。そのマグネシウムの量に、父は悩んでしまいました。そして 閃光器の蓋を開け、通常はこのくらいだからと、茶色い小瓶から白い粉末を着火部に振り入れて 撮りまーす と声を掛けてなにやら操作しました。ボツ、音を立て、パッと閃光が走り、カメラを覆った黒い布から父が顔を出して首を捻ります。そして、今日のための助手さんになにか言っておりました。光量が足りない ー そんなことです。そして閃光器の中を掃除し、多分大丈夫だろうといいながら、どうも通常の二倍ぐらい発光剤をいれたようです。大丈夫、火事になんかならないから、助手さんの心配にそう応えておりました。もう一枚、いきまーす と言い、今度は助手さんに閃光器を持たせて、一、二、三 と合図してシャッターを押しました。勿論、閃光器も発火しました。とんでもない音と、突き刺さるような閃光、さらに前を隠す程の煙と強い臭い ー 助手さんは立ち竦んでしまいました。

あとで解ったことですが、閃光器の着火部が溶けてしまったようでした。そして写真は大成功で、父は閃光器の弁償代と写真制作費の、二重の出費にぶつくさ言いながら、人数分の写真を焼いておりました。

その日父は大喜びで帰ってきました。新聞社だったかのコンテストに、父の写真が入選したようなのです。その写真はどんなだったかは覚えております。国立善通寺病院の一角のカイズカの木に、当時子供達がよく作って遊んだプロペラ機の模型が引っかかり、それを私が取ろうとしている写真でありました。実は、そのプロペラの模型飛行機は、隣の私より数才上の子が作ったものでしたし、片方の羽は紙が破れていたか、貼ってなかったものでした。それをカイズカの木に引っ掛け、私が野球帽を反対に被り、口を尖らせ、眉をしかめて、取ろうと木に登りかけているという構成の写真でした。特選とか一番とかではなかったと思います。しかし一応入選はしていたのではなかったでしょうか。そして子供の表情がいいと言う評があったようで、父はまた私を被写体として写真を撮りました。

その頃三角パンと言うのがあって、私はそれが大好きでした。単に平らなパンを三角に切っているだけの、ちょっと甘いパンでありました。それを買ってきて、手に普通の大きさのグローブをさせて、口にはその三角パンを咥えさせ、キャッチャーのように座って、手を広げているポーズでした。私はただ三角パンが食べたくて、しかし父は食べるなよといいますし、じっと我慢して三角パンの一番尖ったところを咥え、写真を撮り終えるまで待っていました。そしてやっと終わり、パンをかじると甘くて美味しいと思ったことを覚えております。

しかしながら、柳の下に泥鰌は二匹おらず、その写真は入選もなにもませんでした。古いアルバムを見ますと、この他に自転車の後ろで、同様に三角パンを咥えて私が母の後ろに乗っているものもありました。

写真自体が珍しい時代でしたから、そんなことがその頃の最先端だったのでしょう。

写真コンテストに応募するための写真を撮っていたカメラがなんだったのか、よく覚えてないのですが、多分二眼レフではなかったかと思います。それは一世を風靡しましたが、私も大変不思議でした。上蓋を開けると、眼前の景色が上下左右反対に映っています。ピントを合わすと、ぼんやりした景色がくっきり映り、眼でピント合わせを確認しながら写真を撮れるのですから、格段の進歩です。まあそんな感想は今だから言えることで、小さな箱の中に眼の前の景色がくっきりと映って、子供の私には幻灯機を見るような楽しさでした。

大きな箱のようなカメラとそれを支える木製の三脚、蛇腹式の小型カメラ、二眼レフカメラ、次々と手に入れた父のカメラは戦後のカメラの歴史そのままのようです。その上、現像、焼付けまで自分でやってのけたのですから、素人の趣味としては行過ぎています。もう　道楽　の域です。その父があらゆる写真機材を売り払い、一台の、金属部品の黒い塗装が剥げた、横に長くてそれが妙にアンバランスさを感じさせるカメラを大事そうに持って帰りました。それは今までにない精巧な機械に見えました。写真一枚を写すのに、こんなにも精密な部品をあっちこち操作するのかと、まあ私はそんなことまで分かる年ではありませんが、兎に角触っちゃいけないもののように思いました。そして母との諍いです。当然です。足らなかった金額については　月賦　で払うというのですから。そして何度か大きな声が響きあい、その後我が家には一台のカメラもなくなりました。あの　中古　だから、格安だから、もうこんなお金では手に入らないんだから、と父の必死に抗弁していたカメラは、多分　ライカ　だったと思います。今思うと。...違うかなあ。

共同住宅と言葉を濁していましたが、本当は官舎でした、とはいうものの、あの当時のことですから、官舎と言っても要するに　長屋　です。一棟の屋根の下に何戸かの家が連なっており、今のアパートと一緒にです。蛇腹式のカメラで住人達の集合写真を撮ったのも、この長屋の中央を通っていたコンクリートの道のところでした。

何戸あったのでしょうか、色々な職種の人があり、子供も沢山おりました。私はその中でも一番年下で、なにをするにも　みずこ　扱いでした。この子は一番年下だから、鬼ごっこで捕まっても鬼にならなくてもいい、缶蹴りで一番に見つかっても缶を蹴らなくてもいい、なにをしてもどんな遊びをしても、悪ガキ集団の回りを一緒になって駆け回っているだけの、遊びには本当は参加させてもらえてない存在でした。それを、今ならなんとも忌まわしい言い方と分かる　みずこ　という言葉で呼んだのでしょうか。まあ子供のことですから、呼ぶ方もなにも分かってないことです。そんなことでしたが、私も遊びの回りを走り回って、それだけで楽しかったのです。

しかし、年上の子供達は昼間は学校に行って、誰もおりません。私は一人外で遊ぶことになります。そんな時よく長屋の共同倉庫に入り込み、本とか雑誌を捜しだして見ておりました。勿論字など読めるはずもなく、昔の少年雑誌の絵を見るのみです。戦前戦中の雑誌だったのでしょうか、　タンクたんくろう　のらねこ一等兵　なんかの漫画もありました。そして巻頭の絵は凄く勇ましく、戦闘機　とか　軍艦、なかには　今でいう　ロケットランチャーのようなものに支えられた、今にも飛び立とうとするかのように二重のプロペラを旋回させている　垂直離発着の戦闘機　の絵がありました。私にはこれが一番勇ましく思われ、味噌臭い樽の中にその雑誌を返しては、また次の時に捜し出して眺めておりました。

長屋の前の空き地はとても広くて、誰の手も入ってはおりませんでした。ですから、住民達が責任者に掛け合い、そこで思い思いの野菜などを自由に作れることとなりました。おおらかなことです。春でしたか、早速休日に、総出で前の土地を耕し始めました。父は元々山の人でしたから、畑をすることには慣れており、鍬も三種類、四又鍬、平鍬、土をさらう三角鍬と、準備は整っておりました。自分の家の前の幅を自分のはたけとするというような申し合わせが出来ていたようですが、元々が荒地ですから一日で出来るはずもなく、何日も掛かって、しかし若かった父は慣れた作業でもあり、早々に何本かの畝を作りました。父の使っていた四又鍬を、私も振って手伝おうとしましたが、これは重くて無理で、母が使っていた平鍬は未だ軽く、何回かは振れたと思います。　　ぼく　　よう　　お手伝いができたねえ　　近所の父より年配の男の人からいわれました。

実はこの後の作業で畑が作れなくなりました。父も他の人も自宅の便所から肥えを汲み出し、それぞれの畑に撒きました。とんでもない悪臭がただよいました。その悪臭が何日も続き、畑をしてない人とか、女の人だけの家庭から、また長屋の周囲の人達から苦情が噴出したらしいです。農家出身の人から見れば、そんなこと常識だったんでしょうが。一応父も三角鍬を使って夜遅くまで、糞尿を撒いた跡に土を厚くかぶせたりしておりました。なにやらぶつぶつと言いながら...

しばらくして、悪臭も消え、父が母となにか植えました。雨が降り、日が照って、緑の蔓と葉が茂り、私など忘れてしまっていた頃にさつまいもができました。でも、私はあの悪臭の方は忘れてはいませんでした。それで、そのさつまいもが食べられませんでした。嬉しそうに　　美味しいのに　　と母に言われても、食べられませんでした。

次の年、もう誰も農作業はしませんでした。春になり、収穫し残した野菜から菜の花が高く咲きました。私はなんとも運動神経の鈍い子でしたから、他の子供達が蝉とか蜻蛉とかを捕まえられても、そんなものは捕まえられません。かろうじて　紋白蝶とか、黄い蝶　　が手にかかるぐらいでした。皆学校に行って、遊ぶ子のいない長屋の広場で、私は虫取り網を一人振るい、ふわふわと飛ぶそんな蝶を捕まえたりしておりました。今はその蝶も見ません。子供のときの春はこうでしたのに。

ちょっと寄り道を。

琴平に行くことがあり、ついでに写真を撮ってきました。琴平の私の知っている
ディープ ゾーン
です。





車の墓場です。しかし残念！去年の夏には未だ　　ホンダ　Ｚ　もありました。

いすゞ　ベレット　と　１１７　クーペ　も！今日行ってみると、大分整理され、なくなっています。かつて垂涎の、そして憧れの車達　ー　草に埋もれてても懐かしさで一杯になります。　スバル３６０　は父が乗っていました。　マツダ　キャロル　は後部座席が意外と広かった名車でした。そして　ホンダ　Ｚ　は後部ウィンドーが開くようになっていて、回りを被っているゴムの囲いから　　水中眼鏡　と呼んでました。ベレット　　はそのまま標準仕様でラリーに出られるという車評でした。１１７　クーペ　は一台一台手で組み立てられているとかで、貴婦人と呼ばれていたとおもいます。

あの時代、車は憧れでした。　...いつから車は今のよう、つまらないものに成り果ててしまったのでしょうか。今の車造りに愛情が感じられないと、あるカーデザイナーは言うておりました。走りゃいいーその程度にしか思っていないというのです。

続きです。

こんなに少なくなっていますが、これが車の墓場の全容です。



下の写真など、どこの車かと思いますね。三菱の軽自動車ですね。母がこれに乗っていました。もっとも、こんな派手な軽ではありませんでしたが。



ついでです。下の写真は神戸とか横浜の写真ではありません。琴平の某所の写真です。まるで、なんとかの館みたいですね。



そして、またも在り来たりの写真ですが、赤ポストです。もう一箇所知ってるんですが、写真を撮ってこれませんでした。つぎの機会にまた載せます。



あの時代、皆が食べられなかったのです。ですから父も里から米を貰って来ていました。ところが、それも 闇米 として摘発される対象でした。駅に着くと警官が雪崩れ込み、一斉に荷物検査が行われるそうです。今の覚せい剤持込検査みたいだったのではないかと思います。検査のやり方だけでなく、ものの隠し方とかもです。巧みに色々なやり方で摘発を逃れようと、かつぎ屋さんたちも戦っていたらしいです。特に女の人はずっと、警官やら刑事やらにむしゃぶりついて金切り声を上げ、米とか他の食べ物を取り返そうとしたり、泣き落としに泣いて米にしがみついたり、父は色々な光景をみてきたそうです。勿論、父も米とかを取り上げられました。しかしその土地出身ですから、摘発の刑事が従兄弟であつたらしく、あとから 気をつけて帰れよ と言いながら米の入った袋を返してくれたそうです。

摘発された闇物資は、全部ではないのですが、一部は警官、刑事の口に入るもののようでした。権力って、そんなもんだったんでしょうね。今も変わらないか。

あの下肥え騒ぎのあと、長屋ではいろんな動物を飼うようになりました、父は山羊、三軒先は鶏、それから羊、兎、それぞれでした。山羊は三ヶ月ぐらいから飼い始め、山羊の乳を私は飲んだ記憶があります。大分癖のある味で、美味しくはありませんでした。

山羊を飼うのは簡単で、家の前のクローバーが生え茂った野原に引き出して、繋いでおくだけのことです。それは父がやっておりました。そして、引き出された山羊には近寄ってはいけないといわれていたのですが、自分の家の山羊なんだからまさか突っかかってはこないだろうと妙な確信を持って触りに行きました。ところが、山羊は怖がって向うに逃げます。しかし、紐で繋がれていますから、それ以上いけなくなります。すると突如、意を決して向き直り、眼を据えて頭を下げ、ドーンと突きかかってきました。みごと、山羊の額は私の胸を突き、私は転がってしまいました。

そんなことからか、また山羊の乳の不味さからか、そのあとやぎはいなくなりました。

羊を飼っていた人もおりました。その人が大きくなった羊を売りました。羊毛を売り、代償を得てついでに解体した肉も手に入れたようです。ところがその量の多さと、癖のある味で食べ切れなくて近所に配りました。 臭いの に 父はそういつておりましたが私は食べてみました。・・・ 臭かったです。貰った肉は大量に残りました

棟割り長屋の間取りは一応引き戸の玄関があり、土間と上がり框に廊下があって、狭まった廊下の先にトイレ、廊下の左が6条間でそれに続いて4畳半、その横に勝手口と土間があり、そこが炊事場となっておりました。くどくどしく述べましたが結局玄関と部屋二つ、土間になった炊事場という間取りです。炊事場には水道がちゃんと付いており、流しもあったはずです。さらにはコンクリート製の おくどさん もありました。 おくどさん つまり かまど です。しかしほとんどの料理は 七輪 を使っていました。私は母がこの 七輪 で魚を焼くのが嫌いでした。煙くて臭いからです。そして かまど で葉釜を使ってご飯を炊き、おひつに取っておりました。三丁目の夕日 よりももっと前のことです。父も若く、母もなにも知らずに毎日を一から始めておりました。母は 梅干は酸っぱいから お酢 に漬けるんだと、また 動物は 牛が雌で 馬が雄 と思い込んでいたのですから。さすがに父は馬と牛のことは即座に否定したようですが、梅干の漬け方は母並みだったようです。

そして私は親の話を聞いておりました。－ 種を植えると実がなる － と。あの肥料撒きで長屋の表の畑は中止になっておりましたが、父は裏にトマトを植えておりました。その頃トマトは割りと新しい野菜で、珍しかったのです。そして少しの苗からトマトが沢山成りました。トマトはあの青臭さが嫌いといわれますが、私は最初からそれが好きでした。 種を植えると実がなる － そうなんだ、だったらこれも実がなる － 親の言ってることを聞き込んで、私はトマトの横に植えました。スコップでしたか、手鍬でしたかを持ち出し、懸命に穴を掘り、真剣にそう思い、実がなることを楽しみに植えました。なにをって？ 魚の頭をです。 母に聞かれました。

＊＊ちゃん、なに植えよん？

魚のあたま 植えといったら 魚の実がなる ！！

母に大笑いに笑われました。

トマトと魚の頭の話は余分でした。

その頃はどうかだったんでしょう、多分皆に余裕が出来てきたころだったのではないのでしょうか。長屋一同で正月の餅つきをしようということになりました。私が少年雑誌を見つけた共同倉庫に、以前の住人達が残していった杵とか臼かまどなどの、餅つき道具一式を置いてあったらしいです。そしてそれらを使っても良いということになったようで、正月前の餅つきになりました。と言っても住民それぞれ年齢も違い、経験もない人たちばかりだったのですが、それでもなかによく知った人がいて、その人の指揮に従って前日から石臼を洗い、持ち寄ったもち米を水に漬け、蒸し器も用意したようです。私のみならず、子供達は皆わくわくしていました。餅は知ってます。しかし餅つきなんて見たことはありませんから。

それは両親も同様で、父は山の人でしたから少しは知っていたようですが、母は初めてのことでどうしたらいいか解らず、ただ餅を入れる　もろぶた　を三枚買うことにしました。これは餅を入れる浅い木の箱のことですが、そんなものも我が家にはありませんでした。仕方ありません。母は実父に早逝されておりましたので、戦前の小学校、次に国民学校でしょうか　―　解りませんが　―　を卒業して、14歳か15歳ほどの時から家を出、一人で自分を養い生活してきました。父も同じく父親に早く死なれ、長男として山の田畑を母親と耕して一家を支え、兵隊に徴集されてのちは家を離れて生きてきました。ですから、家には何もなくて、家事も行事もなにもわきまえてはおりませんでした。そのことは前の記事でお解かりのことと思います。

餅つきの当日、裸電球が何灯か点けられ、共同倉庫の前は華やくだような明るさでした。と言いましても、子供は眠いのです。私は一人寝てしまい、眼を覚ますと外でにぎやかな声が聞こえました。そしてその明るい場所に行くと、餅つきはもう始まっており、長屋中の大人が集まってぺったんぺったんと音をさせておりました。男が杵を持ち、女が杵とりをします。すこし頭の薄くなった人が杵を振りますが、一臼突く前に疲れてしまって、もう少し若い人が替わり、やっと突きあがりました。粉を振った台に柔らかい餅が抱き上げられるようにしておかれます。それはまず子供達に振舞われました。お椀や皿に千切られた餅が配られ、私も貰いました。　柔らかいから　喉に詰めるなよ　大人達から声を掛けられます。　ちょっとずつ食べるんよ　喉に詰めるよ　餡かきなこをまぶしたら大丈夫よ　そう言われて、私の餅には　きな粉がかけられました。餅は一度にきな粉の味になり、餅の美味しさではなくなりましたが、私も他の子も夢中で食べました。柔らかくて、ほのかに甘くて、弾力もあって、私はあん

な美味しいもちを、それ以降食べたことはありません。

そのあと、父が替わって突き始めました。父は、子供の私が一番幼かったように、一番年若かったので、力もスタミナもあり、それから何鉢か続けて突いたそうです。とにかく子供は眠たかったのです。私は配られた突きたての餅を食べると、母に連れられ家に帰って、寝てしまいました。ですから、朝父が自慢してそういつてるのを朝聞きました。そして、もろぶたには鏡餅と小餅、餠餅、のし餅が入っていました。

数日経つと柔らかかった餅も硬くなり、次にひび割れてきます。私は餠餅を柔らかいときはそのまま、固くなると焼いてもらってたくさん食べました。しかしひび割れる程固くなると、焼いても食べ難くなってきました。しかし甘いものに飢えていた私は食べました。朝早く眼を覚まし、父も母も寝ている隙にごそごそと起き出してもろぶたの蓋をあけ、ひび割れた餠餅に指を突っ込み、餠をほじくり出して指ですくい、甘い餠だけを幾つも食べました。

私達の世代まででしょうか、がき大将がいて子供達が大きな子から小さな子まで年齢も関係なく集団になり、いろいろな遊びとかどこかへ行くとかしてきたのは。それも私が小学校へ行くと無くなってしまいました。

長屋にもがき大将はいました。顔のきつい、勝ち気な子で、とまでは覚えているのですが、どんな子だったかは忘れてしまっています。しかしその子の号令一過、あっちへ走りこっちへ走りしました。その意味ではその企画力は凄いと思います。また他の集団との揉め事にも力を持たなければなりません。しかし私達の集団は他ともめた記憶はありません。終戦後数年しか経っていなくて、しかも勤め人の子供たちであったし、地元の子供達もあまりいませんでしたから。ただ、仙遊町に沢山の市営住宅が出来、そこに外地からの引揚者が沢山住むようになって、仙遊寺のブランコを取り合いしたことは先に書きました。しかしながらその頃には私達のがき大将は学校も高学年になり、ブランコなどにかまってはいられなくなっていたようです。

私達の集団の遊びは、ごく普通に鬼ごっこ、缶けり、かくれんぼなどで、大して変わったものではありませんでした。ところが、私は一番の味噌っかすでしたから、そんななかにもあまり加えてもらえません。そして、女の子達との おままごと です。そこでは私はお父さん役、お兄さん役ですが、これも上手く演じられず、外されてしまったりしました。そんな中、男の子と女の子が混じって遊ぶのが、 影ふみ でした。外に街灯というものが初めて設置され、本当に昼間のように明るいとうれしくなって、その街灯の明かりの下で影を追いかけて走り回ります。 かーげ ふんだ どう逃げても自分の影がどこにあるかわかってなくて、すぐ踏まれます。そしてその子ではなく、影を追いかけます。味噌っかすの私も一人前として扱われ、鬼になって走っておりました。暗い中の一番楽しい遊びでした。後に 影をなくした男 という本をつい読んだのもこんなことからだったかと思います。怪奇伝奇小説とか言われておりますが、私にはとても淋しい、悲しくて孤独な人間の話のように思えました。

当時私はまだ幼稚園にも行っておりませんでしたから、家で一人母と居たわけですが、　　かくれんぼするもの　このゆび　と一まれ　とか　かんけり　するもの　とかの声がすると、いそいそと表へ出かけます。すると、もう学校から帰った子達が、がき大将の突き立てた指を次々と握っております。

ところが、大雨の降った翌日のことでした。台風の後だったかもしれません。空はまだ曇っており、雨こそ降っていないものの地面も濡れて水溜りがありました。どうしてそんなところへいくことになったのか思い出せませんが、以前なにか楽しくて面白いことがあったのはおぼえておりますから、それで行ったのでしょう。男の子らは総出で川に赴きました。一番味噌っかすの私も含めて全員です。事件はそこで起こりました。

川は楽しいことがあったときとは打って変って、濁流が川幅一杯に、それこそたうつように流れておりました。白いしぶきとよじれて流れる水流は恐ろしいものでした。そして、楽しいことを期待していったのに、全員が押し黙ってしまいました。それでも恐る恐る土手から下に降り、川面を見ておりました。　　子供たちの中に、ちょっとキツイ兄と気のいい弟がおりました。その弟が、　　すげえ　　とかそんな意味のことを言いました。そして更に水面を見ようと少しだけ下におり、脚を滑らせ、ゆっくりと、そしてスローモーションのように川の中へ落ち込みました。誰かが助けようと手を伸ばし、さらに別な子も襟を掴もうとし、私は滑り落ちていくその子の放心したような顔をはっきりと見、次には体から首、頭と沈んで流れにさらわれ、急に川の先へと流されるのを、声もなく見ておりました。

えっ！　　おぼれる？

多分誰もがそう思ったと思います。落ち込んだ子は浮いたり沈んだりして速い流れに流されます。しかし川はそこが淵になっていたので、川幅こそ広がったのですが、流れは巻いておりました。流された子は向こう岸の方のまで瞬時に流され、手を伸ばし、顔を上げたりしながら今度は反対方向に流れ、遂にはぐるっと回り込んで滑り落ちた土手まで帰ってきました。そして、流れも少しゆっくりになっていたことと、兄の必死さが弟を捕まえさせ、弟も必死に岸にしがみついたことで上にあがる事ができました。

水も飲んでいなかったと思いますが、流された子はずぶぬれに濡れて、なんにも言わず震えて帰りました。

だれにも　　いうなよ！

そうがき大将にいわれ、そうだ、このことを喋ったら大変なことになると誰しもの思いました。

味噌っかすの私さえそう思ったのですから、多分他の子もおなじでしょう。川に落ちた子は水溜りでころんだことになり、その子だけひどく叱られて事件は押し隠されました。そんな頃からだったと思います、皆が徒党を組んであちこちにいくなんてことが無くなったのは。その後がき大将と、徒党を組んだ子供達の記憶はありません。半世紀も前のことです。

当時私はまだ幼稚園にも行っておりませんでしたから、家で一人母と居たわけですが、　　かくれんぼするもの　このゆび　と一まれ　とか　かんけり　するもの　とかの声がすると、いそいそと表へ出かけます。すると、もう学校から帰った子達が、がき大将の突き立てた指を次々と握っております。

ところが、大雨の降った翌日のことでした。台風の後だったかもしれません。空はまだ曇っており、雨こそ降っていないものの地面も濡れて水溜りがありました。どうしてそんなところへいくことになったのか思い出せませんが、以前なにか楽しくて面白いことがあったのはおぼえておりますから、それで行ったのでしょう。男の子らは総出で川に赴きました。一番味噌っかすの私も含めて全員です。事件はそこで起こりました。

川は楽しいことがあったときとは打って変って、濁流が川幅一杯に、それこそそのたうつように流れておりました。白いしぶきとよじれて流れる水流は恐ろしいものでした。そして、楽しいことを期待していったのに、全員が押し黙ってしまいました。それでも恐る恐る土手から下に降り、川面を見ておりました。　　子供たちの中に、ちょっとキツイ兄と気のいい弟がおりました。その弟が、　　すげえ　　とかそんな意味のことを言いました。そして更に水面を見ようと少しだけ下におり、脚を滑らせ、ゆっくりと、そしてスローモーションのように川の中へ落ち込みました。誰かが助けようと手を伸ばし、さらに別な子も襟を掴もうとし、私は滑り落ちていくその子の放心したような顔をはっきりと見、次には体から首、頭と沈んで流れにさらわれ、急に川の先へと流されるのを、声もなく見ておりました。

えっ！　　おぼれる？

多分誰もがそう思ったと思います。落ち込んだ子は浮いたり沈んだりして速い流れに流されます。しかし川はそこが淵になっていたので、川幅こそ広がったのですが、流れは巻いておりました。流された子は向こう岸の方のまで瞬時に流され、手を伸ばし、顔を上げたりしながら今度は反対方向に流れ、遂にはぐるっと回り込んで滑り落ちた土手まで帰ってきました。そして、流れも少しゆっくりになっていたことと、兄の必死さが弟を捕まえさせ、弟も必死に岸にしがみついたことで上にあがる事ができました。

水も飲んでいなかったと思いますが、流された子はずぶぬれに濡れて、なにも言わず震えて帰りました。

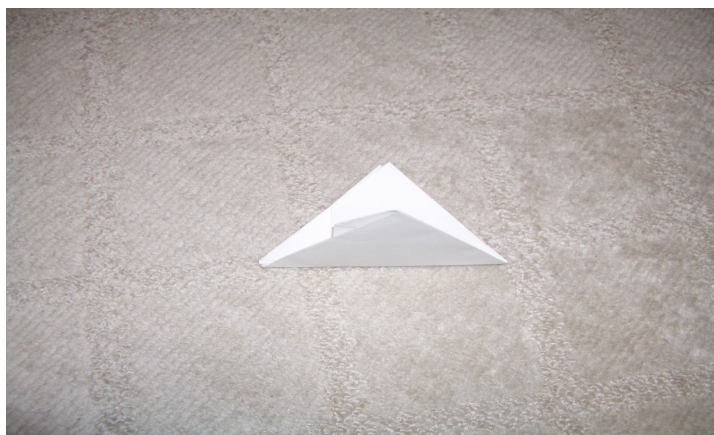
だれにも　　いうなよ！

そうがき大将にいわれ、そうだ、このことを喋ったら大変なことになると誰しもの思いました。

味噌っかすの私さえそう思ったのですから、多分他の子もおなじでしょう。川に落ちた子は水溜りでころんだことになり、その子だけひどく叱られて事件は押し隠されました。そんな頃からだったと思います、皆が徒党を組んであちこちにいくなんてことが無くなったのは。その後がき大将と、徒党を組んだ子供達の記憶はありません。半世紀も前のことです。

がき集団の遊びで一番熱中したのは、紙飛行機でした。どんなことから紙飛行機が流行ったのかは分かりませんが、子供達はそれぞれに新聞紙を持って、長屋の住人達の写真を写したあの講堂に集まり、それぞれに新聞紙を小さく切って思い思いの機体を折り上げ、講堂の舞台から投げてみます。

（下の写真は画像の挿入の順番を間違えて、違ったものが一番になってしまいました。。下の写真は児童用の折り紙細工の本にも載っていたので、そうそう変わったものでもないのかもしれませんが、端を持って強く振ると、次の写真のように開いて、ポンと音をたてます。）

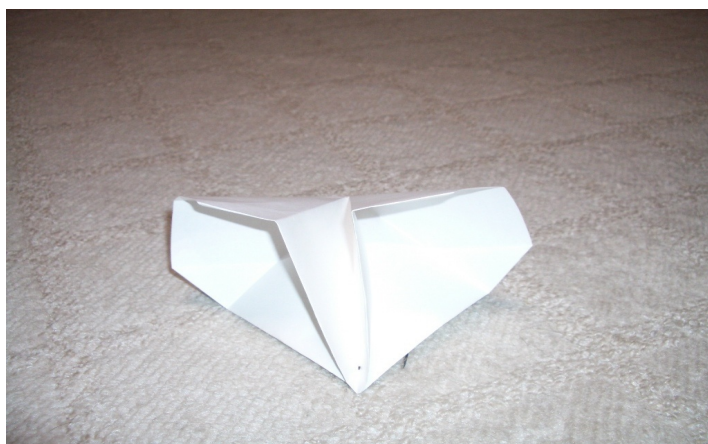


当時、片岡知恵蔵の探偵物で 多羅尾伴内 七つの顔の男だぜ という映画が流行っていて

またあるときは

またあるときは 片目の運転手

と、子供達は口々に囃しながら、二挺拳銃のようにこれを振り回し。ポンポン音をさせて走り回っておりました。勿論私もです。しかしその当時私はその映画を見てなかったんですが。



（このように左右両方が開いてポンと音が鳴ります。）

しかし子供達はそれだけではおわりません。時には両手に折り紙鉄砲を持ち、他の子を追いかけます。そして追いつくと勢いよく折り紙鉄砲を振り下ろし、ポンと音が出れば相手を捕まえた、もしくはやっつけたことになり、捕まえられたほうは

やられたあー

と叫んで、バツと倒れます。逆に鳴らなければ、逃げおおせたことになります。それが楽しくて、子供達は講堂中を走り回りました。

また、折り紙鉄砲の鳴り方にもランクがありました。一振りで

ポポン と、ちょっと時間差があって鳴るのが最高で 二連発 と言って自慢できました。

ポン ポン と続けて鳴るのが二番目です。そして

ポン と片方だけだと三番目。最後が空振りで、鳴らないことでした。

スカやあ と嘆きます。当地では空クジのことを スカ と言っておりましたが、同じことだったと思います。

それはさておき、片目の運転手 というのはちょっと荒っぽい言い方だと今気付きました。運転手というからには営業車で人を乗せているのしょうから、自動車免許は二種ということになります。ところが二種は両眼が見えなければ貰えませんね。ということは、これはあり得ない事になります。あの時代、こんなことが許されていて誰も気付かなかったんですね。いや気付いていたのかもしれませんが、私が気付かなかっただけですか。

そして私達が さえあがって (いい気になって、はしゃぐことを言いますが) 叫んでいたのが

あるときは

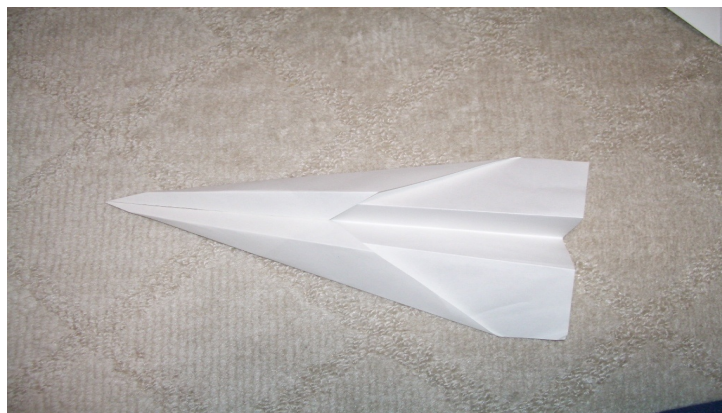
か・た・め・の

うんてんしゅ

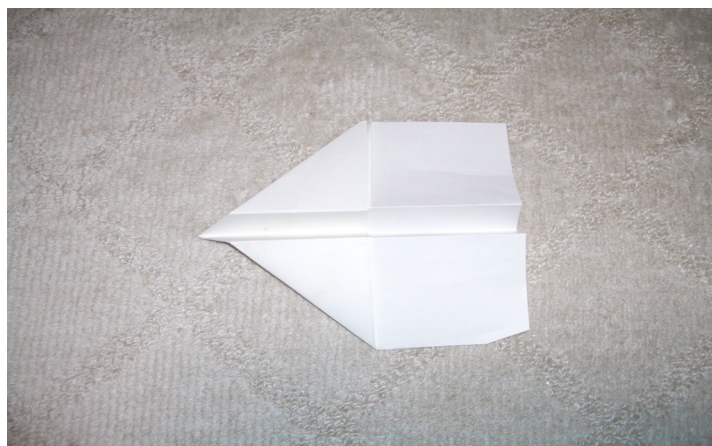
といった感じでした。

写真の都合で話がちぐはぐになりましたが、折り紙飛行機の話です。

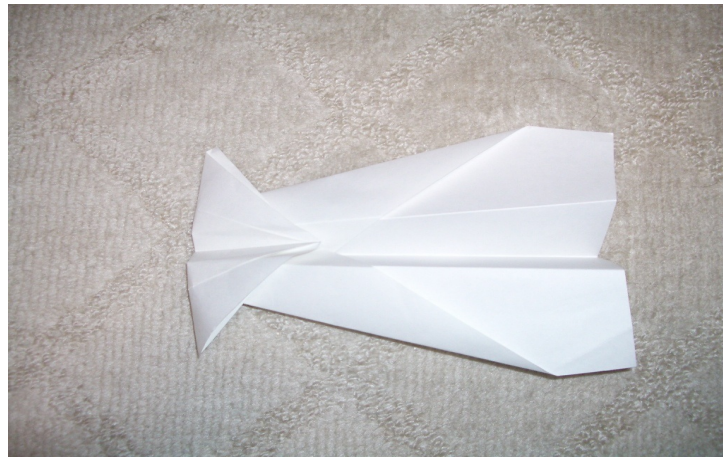
紙だって当時は貴重品でしたし、広告も入ってた記憶がありませんから、多分なかったんでしょう。ですから、材料は先に記しました通り、新聞紙でした。他の皆は新聞そのものを持ってきて、それぞれに切り離します。私は母に切ってもらったものを小脇に抱えるほど持っていきました。時には今日の新聞まで持って来ていて、父に叱られたこともありましたが、それを大きな子が折るのをまねて折ってみます。下の二枚が基本的な折り型ですね。



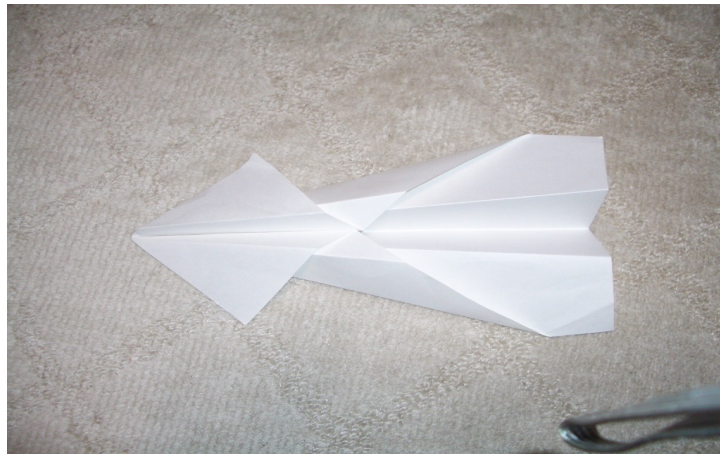
上の形を 旅客機 と呼んでおりました。今なら コンコルド とか言うのでしょうね。



これは、 戦闘機 でした。
そして下のものは みみずく飛行機 と呼んでいました。

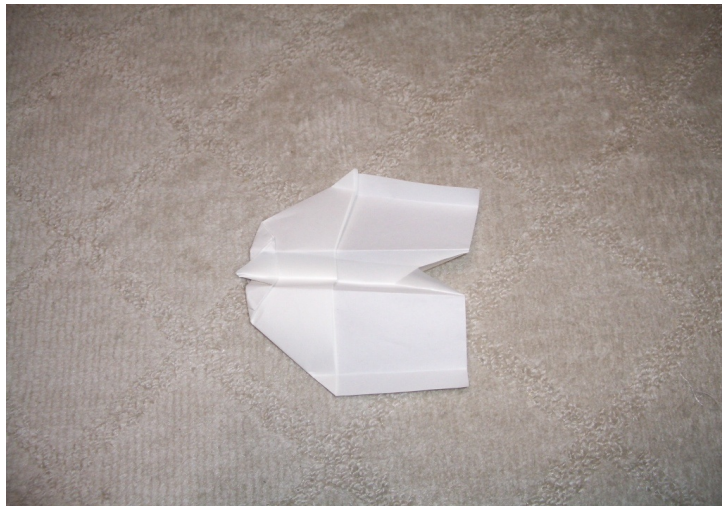


これは いか飛行機 です。



二機とも基本のものほどには、あまり綺麗に飛びませんでした。子供ながらに色々と工夫したものです。最初に いか飛行機 を見たときはびっくりしました。

そして基本の折り型から発展した、一番複雑な折り型の機体が下の写真です。先を二回折り返し、尖った様にし、うしろは折り込みがしてあって、尾翼の積りであったり ゼット噴射口 – ジェットではなく ゼット と言っておりました – のつもりでありました。翼の端も折って立てらせてあります。そして、これが ゼット戦闘機 でありました。子供心に一番勇ましく見えたのでしょうね。また、基本の折り型ほどではないにしろ、案外安定して飛んだものです。



紙飛行機が折りあがると、舞台に上がって飛ばします。旅客機は大方スムーズに遠くまで飛びますので、飛距離を競い合いました。ところが戦闘機の方は時に宙返りしたり、失速してストンと落ちたり、急な旋回をと面白い飛び方をすることがあります。特に宙返りをしたりすると、大得意でした。いや、私の飛行機はしたことがありませんで、大抵失速の方でしたが。そして、ストンと落ちると、けなされ、馬鹿にされます。子供はそんな時、容赦ありません。思いっ切りあざけり、はやしたてます。私は下を向くだけでした。

私も綺麗に飛ばしたくて、上手に飛ばす子の飛行機の折りかたを覗いてみると、さっと隠されます。ただ辛くて、きちんと左右対称に折ろう、翼を大きめにしてみよう、先を折り返してみようと一人で工夫してみました。しかし他の子のようにには上手く飛ばないことばかりでした。

そんな時、ひょっと気がついたことがありました。紙飛行機の先に小粒の石を入れたりゼムピンで挟んでいたり、翼を曲げ直して形を整えていたりしてる子がいたのです。それこそ昇降舵とか方向舵とかの知識のない子供が、翼を直し、バランスを取るとスムーズに飛び、旋回も宙返りもすることに気がついておりました。子供だからと馬鹿にしてはいけません。経験則から、そんなことに気がつき、工夫してよ上手に飛ぶようにしているのです。私もよく分からないまま、そんな風に真似してみますが、やることがちぐはぐなのか、上手くいきません。投げるとき力んで角度が悪く、またストンと落ちたりの繰り返しです。それでもたまには綺麗に飛びます。そんなとき回りは無視です。誰も注意を払ってはくれません。一人で綺麗に飛んだとはしゃぐだけでした。

そして、この遊びも出来なくなる日が来ました。この講堂には、舞台と反対側に売店がありました。その売店には、白髪交じりの髪を茶巾絞りにくくり止めたおばあさん

がおりました。この人から、親達に抗議があったのです。子供ですから、そんなこと知らなかったのですが、子供たちがいなくなったあと、おばあさんがこの広い講堂を一人で掃除し後始末してくれていたようです。しかしそのことが何時までも続くので、たまにかねて親達に注意したということでした。すぐに子供達は、講堂に立ち入り禁止と同じことになり、片目の運転手遊びも飛行機も突然終わってしまいました。

聞いたようなタイトルにしましたが、先ほどの講堂の売店は、近隣にお店のない長屋のものには好い買い物場所でした。と言っても沢山の物を置いているわけではなく、パンとか煙草、そしておやつ類くらいです。私はおやつ類をよくここで買ってもらいましたが、特にお気に入り

おまけ付き の グリコ のキャラメル

でした。ところが残念なことに、どんなおまけが付いていたのか余り覚えていません。確か、木の機関車とか客車、自動車とかはあったように思います。しかし、はっきりと覚えているものもあります。

おきあがりこぼし

です。グリコは、これがついてると 当たり でした。そして、このあたりを集めると、賞品がもらえました。残念なことに、これもなにをもらったのか、おぼろげにしか覚えていません。

と言いますより、 あたり を集めると何か貰えるということが充分分かっておらず、また母に連れられて売店のおばあさんの家へ行き、あたり券3枚だとこれとこれと言われても、貰っていいものか、なにを選べばいいものか、迷ってしまって結局詰まらないものを貰った気がします。しかし売店の叔母さんの家も、小さくて古びていました。元々は職業軍人の妻で、所謂戦争未亡人であったように思います。そしてさらには、ご子息も戦死され、その息子の子供を、つまりは孫の男の子を育てていたと、曖昧ではありますが、記憶しています。もうすっかりお婆ちゃんになっておりましたのにね。

でも上品でやさしい人でした。私が母に連れられておやつを買いに行った時、しゃっくりに取り付かれていました。母が世間話をしている最中も、ずうっとヒックヒックやっておりました。それがつらくて、苦しそうにしていますと、コップに水を一杯に汲み、一気に飲んでごらん、といい、私はそれを飲んでみました。手に余るほどの大きなコップを、息を詰めて一気に、しかし子供のことでですから、直ぐに口をはなして、それでもなんとか半分ぐらい飲みましたか。

もう だいじょうぶ はい なおった

お婆さんがそういった途端、じっとこらえたにも関わらずヒックヒックとしゃくりあげてしまいました。すると今度はおまじないをと、私のつむじを捜し、おばあさんが息を吹きかけながら、なにか呪文を唱えました。その間も私はじっとこらえ、息をつめて神妙にしておりましたが、終わった途端、またヒックヒックでした。お婆さんも母も、きま

りわるそうにしておりましたが、例によってグリコのキャラメルを手に持ち、意気揚々と家に帰りかけた時には、私はしゃっくりを忘れておりました。

そして初めてのお使いです。とは言っても必要なものを買いに行ったわけではありません。母に言われて初めて売店に、自分一人で先程来の　　グリコのキャラメル　　を買いに行くことになったのです。長屋を離れ、黒い給水塔に向かい、小さな池を回ればそこに講堂です。多分初めて一人で行ったと思います。雨の後で風が吹く、少し寒い日でした。私は母に一円札を十枚貰い、不安を抱えながら歩いて行きました。行き慣れている筈の道です。遠くありません。しかし母に手を引かれながら行くのではなく、自分で考え、自分で判断して行かなければなりません。それが　　初めてのお使い　　なんでしょうね。少し雨も降り出しました。風も吹いて寒いです。そうして給水塔まで来た時、風が吹いて手に持ってた一元札の何枚かが飛ばされました。子供のことですから、こけそうになりながら一生懸命拾いましたが、一枚か二枚足りません。どこかへ飛んで行ったみたいです。でも手には一元札が沢山あります。それで私は探すのを止め、売店に向かいました。そこへ母がとんできて、**ちゃん、お金があっちいってるよ　　といいました。私は、確信を持って言いました。

いっぱいあるから　　だいじょうぶ

講堂が取り壊され、売店もなくなってから、売店のお婆さんは自宅でたばこ屋をやっておりました。あれから何十年も経っていますが、その家も　　タバコ　　の大きな看板も、今もってそのまま残っております。

夕方の5時すぎでした。私はとても楽しみにしていた・・・なんだったんでしょうか、ラジオ放送がありました。ちょっと調べてみましたが、私はてっきり

少年探偵団

だったと思っていました。違ってたようです。あの　不気味で不敵な笑い声の後

ぼ　ぼ　ぼくらは少年探偵団

という歌声が聞こえていたはずだと思っていました。ところがその時期少年探偵団とか怪人二十面相は、ラジオドラマをやってないようなんですね。怪人二十面相は明智小五郎、小林少年なんかはお添え物で、まさにウルトラ　スーパー　大ヒーローだったんですが・・・。模擬色のトリックで透明人間になり、いざとなると気球でやすやすと脱出してしまうとか、なにより変相なんてことがあるってことを、私はこれから知ったわけです。そんな思い込みで、てっきり二十面相だと思っていました。

ですから、確信は今でも持てません。

なんの　こしゃくな　なを　なのれ　！

あかどう　すずのすけだあ

だったらしいです。とにかく、私はこのラジオドラマが大好きでした。それで、ラジオを合わせ、歌声を聴いておりました。ところがその日は父がいて、ちょっとだけ、ちょっとだけ相撲を聞かせてというものですから、直ぐ終わるという言葉信じて父に譲りました。呼び出しがあり、見合って見合ってと延々とやり、時間が過ぎて行きます。立った、がっぷり四つ相撲！などという声が聞こえ、私にはよく分からなかったんですが、勝負がついたようです。急いで番組を変えました。そして、ドラマは終わっていました。

すんでしも一たあ

一瞬は耐えたんです。こらえました。でも辛くて悔しくて、私は大声で泣いて叫びました。母が何か言って取り成したとは思いますが、こらえきれず泣いていました。

＊＊ちゃんはずの皇太子だから、次はちゃんときけるから

おとうちゃんが一番偉くて、つぎは　＊＊ちゃん

だから　きょうは　おとうちゃんにきかせてあげて

そんなことを聞いたように思います。父は気まずそうにしていました。私は母の言葉を嘘だ一と思っていました。いつも母に叱られているのですから。

少年探偵団のことから色々思い出し、調べても見ました。私が呼んだ一番古い漫画は、のらくろ上等兵 なんでしょうね。少しずつでしたが、とてもユーモラスで、ゆっくりした時間の流れのようなものを感じ、一度に好きになった覚えがあります。他にも タンクタンクロウ なんかを、雑誌だったのでしょうか、単行本ではなかったとおもいますが、読んでいます。それから、これが分からなかったのですが、まあいい、子供の落書きのような描き方で じらいや を主人公にした漫画があったと思います。そして 真田十勇士も、猿飛佐助、霧隠才蔵、三好青海入道、三好伊三入道、うんの・・・、なんてしたか、これ以上思い出しません、こんな名前も漫画から覚ええました。

私は絵本を読んだ記憶がありません。今はあんなに沢山、本屋さんでも一コーナーを作っているほどありますが、私達の子供時代は絵本自体が少なかったのではないのでしょうか。小学校でも、図書室に絵本はなかったと思います。ですから、漫画なぞ読むのは、悪癖といわれました。しかし兄弟のいない私は、いつも一人で黙って大人しく、悪戯もせず暴れたりふざけたりもしないで、漫画を読んでおりました。本当は悪戯の仕方、ふざけ方も知らなかっただけです。

漫画を読んだ？・・・そうです、私は漫画を読んで理解しておりました。幼稚園前から のらくろ を読んで、分かっていました。ひらがなとかカタカで書かれたものを読んで笑っておりました。ほかにすることがありませんでしたから。それでクリスマスの前に、クリスマスプレゼントは何が良い？サンタさんに何を持って来て貰う？ と親に聞かれた時、まんがと答えました。少年王、冒険王、少年、ぼくら、少年画報、沢山の付録と別冊の読み切り漫画ー そんな月間雑誌が数多く出版されており、まるで沢山の具を挟み込んだサンドイッチのようでした。そのなかでも付録が一番沢山ある 冒険王 を頼みました。サンタさんに、です。

サンタさんがやってきたので、押入れに閉じ込めたとか、プレゼントを置いていくのを見たとか、赤い服を着ていたとか、私はこうだった、自分はこうだったと子供達の中に得意そうに話す子が何人かいました。私は見たことも押入れに閉じ込めたこともありません。それがくやしいほど残念でなりませんでした。

そして雨の日、父が傘を差して外から帰ってきました。私は目ざとく、傘の骨の中に漫画本が隠されているのを、みてしまいました。見なければよかった、見付けなければよかった、何時かは知ることですが・・・。

それからでしょうね、サンタは勿論、妖精も魔法も信じなくなり、魔法のランプ、

空飛ぶじゅうたんは本の中だけのことと思うようになり、現実というものを知るようになったのは。

もうすぐ幼稚園に行くという時、母は何をあせったのか数字とひらがな、カタカナを覚えさせようとし始めました。当時は幼稚園で文字が読めない、書けないということなど当たり前で、読み書き算数は小学校からが常識でしたから、幼稚園入学のため、事前に文字数字を覚えさせることは殆ど必要ないことでした。しかし私がそんなこと分かるはずもなく、私は教えられるままに母から文字数字を習いました。そうは言ってもま

だまだ幼いですから、充分なことはできません。 ち を さ と書き

、 き の下部の丸めるところも反対向きだったり、 も も同様だったこと

を覚えています。そして数字も同じことで、 2 3 6 が反対向きだったと思います。ところが読めるんです。書くことと読むことは違うのですね。読めても書けない、書けないけど読める — 子供の知的発達はこんなふうなんでしょうか。急に普遍的な言い方になりましたが、実は孫に同じことを見ました。書かせた時の字の向きの間違え方、読めても書けないこと — これは孫二人ともが同様で、苦笑いしたものでした。

そして母がギブアップしたのでしょうか、私に文字を教えるのは隣のお姉ちゃんに代わりました。隣の、品の良い未亡人の長女で、私とはだいぶ年が離れていたと思います。子供だったでしょうに、物静かで根気の良い教え方でした。それから、私もそろそろ覚える時期がきていたのかもしれませんが、すこしの期間教わっただけで、 のらくろ を一人で読んでいましたから。 さなだじゅうゆうし も タンクタンクロウ も。私の読み書きの教科書はこれらの漫画でした。

私がそんなことを忘れたころ、お姉ちゃんが修学旅行に行きました。そして、制限されていたこずかいのなかから、わたしにと ミルキーの大箱を買って来てくれました。まだ都会でしか売ってなくて、珍しいもので、しかも私にと買ってきてくれたことが、子供心にとっても嬉しかったことでした。ペコちゃん、ポコちゃん、 そして

ミルキーは ママの あじ

です。

隣のお姉さんの下に、男の子がおりました。私は、この子とばかり遊んでおりました。いや、私は一緒に遊んでいるつもりでしたが、向うは遊んでやっているという積りではなかったかと思います。向うはもう小学校の中学年か高学年だった筈ですから。私は一人っ子で、その子のことをまるで出来の良い、やさしいお兄さんのように思って、さも当然のようにあだ名で呼び捨てにし、多分うるさくまとわりついてたんだと思います。しかしその子は嫌がりもせず、怒りもせず、よく遊んでくれました。今思えば、やはりお母さんの人柄であり、育て方だったんでしょうね。

その子が盛んに作っていたのが、

プロペラ模型飛行機

でした。とは言っても当時のものですから、細長い紙袋を破ると中から出てくるのは竹ひごと細い木の軸、翼に挟む木片、プロペラ、ゴムといったものでした。それらから先ず組み立て図を取り出し、丁寧に部品を確かめ、組み立て始めます。道具はペンチとかナイフ、ものさし、きり、セメダイン、そして何よりろうそくと糊です。セメダインー当時の魔法の接着剤でした。そして長い竹ひごは主翼、短い竹ひごは水平尾翼と垂直尾翼、それをろうそくの火であぶり、組み立て図に合わせて丁寧に丸め、形を整えます。これが難しい。曲がりすぎたり角張ってみたり、時に竹ひごが弾けてささくれ立ったり、不用意に力を加えると折れてしまいます。失敗すると、文房具屋さんに竹ひごのみを買いに行きます。ところが、少しずつ太さが違っていたりして、それがあとで機体の微妙なバランスを崩す結果になり、綺麗に飛ばない原因になります。実は私も、小さいくせに真似して作ってみました。勿論だめでした。一回飛ばすと、くるっと回ってストンと落ち、主翼のアルミ製の接合管が折れて紙は破れ、子供には直しようがありません。途方にくれるより仕方ありませんでした。

しかし隣のお兄ちゃんの飛行機は、紙も綺麗に張ってあり、プロペラの取り付けもゴムもしっかりしていて、しかも完成した機体を指先に乗せ、微妙なバランスの調整や翼の歪みも色々に調整しします。非常に慎重な作り方でした。あの セメダインでの接着も、じっと一時間ほど待つて確実に硬化してから次の作業に掛かります。翼に貼った紙は霧吹きで湿らせ、ピンとしわを無くし、縁も切りそろえて、見事でした。

ですから、いざ飛ばそうとする時もゴムを巻かずに、まずそおっと短い距離を何回か飛ばし、機体の不備と癖を直し、それからしっかりゴムを巻き、風向きを見て飛ばすのです。野っ原の空を見事に飛びました。私は何回も何回も追いかけて、着陸した機体をお兄ちゃんのところまで持って帰ります。

飛ばしてみる？

私は首を横に振って、プロペラだけは巻かせて貰います。一重によじれ、二重にも巻き込みます。そのプロペラを押さえて、風を見、さっと離し、私が懸命に追いかけます。

父が写真コンクールに入選したのも、この飛行機を借り、カイズカに引っかかった飛行機を私が取ろうとするという構図でした。

その他、グライダーも作っていました。機首が、まるで新幹線の先頭車両のようで、主翼も幅広く、長さもプロペラ機より長く、相当大きなもので優雅なものでした。最初はこれも手投げで飛ばし、ゆったりと、そして悠々と飛ぶのを確かめて、プロペラ機のゴムを使って勢いよく飛ばしました。しかし急に左旋回し、地面に左翼をこすり付けて壊れてしまいました。一回こっきりでした。お兄ちゃんは壊れたグライダーを手にとって、黙って帰っていきました。

他にも潜水艦まで作っておりました。木の胴体に木の司令塔、昇降舵はL字型に折った金属片で、前後に二枚釘で固定し、船体の下に鉛のバランサーを打ち付けて完成でした。それを水溜りのような池に持って行き、スクリューを回してゴムを巻き、水面に浮かべて手を離すと、司令塔だけが水上にあって静かにすべるように進んでいきます。何回か金属板の昇降舵の角度を変えて走らせました。模型は水中に潜り、ゴム動力が伸びきったところで浮かんできます。つぎに、ゴムを一杯に巻き、池の中央に向けて走らせました。潜水艦は遠くまで静かに進み、船体を沈めて見えなくなりました。綺麗に潜行したのです。私達は、多分池の中央付近で浮かんでくるだろうと思っていました。それにしては遅い、待っても待っても浮かんでこない・・・でも待っていました。

藻に　引っかかったんじゃわ

つい、言ってしまいました。多分そうだったのでしょう。お兄ちゃんは黙ってました。

石　投げたら　浮かんでくるかもしれへん

私は石を、このあたりと思うところに向けて投げました。そして

木か　なんかに　紐付けて　投げたら　引っかかるかも　しれへん

そう言うと、お兄ちゃんは小さな鉄の棒に紐をくくり付け、投げてみはじめました。投げては引っ張り、投げては引っ張り・・・。

私は子供のくせに、肥後の守が切れないと言うと、その子に

叩いたら切れるようになる

と、映画で見た、刀匠が日本刀を火で赤く焼いて鍛える場面を思い出してひよろひよろっとそんなことを思い付き、石で叩いて刃をごちゃごちゃにってしまうような子でしたから、紐で括った棒で、なんて言ってしまいました。結局石で叩いて駄目にしてしまった肥後の守は、母が弁償したようでしたが。

お兄ちゃんは何回も何回も投げては、紐を引いていました。もう暗くなり、私はなんていったらいいのか分からず、お兄ちゃんの背中を見ながら、そっと、黙って帰りました。

ああ！ 今日この文章を書くまで、 私はこんなにも懐かしい人たちを忘れていました。

共同住宅を離れ、それからの毎日に追われ、目の前のことばかりで今日を向かえ、私は何時も大事なものを置き去りにしてきたようです。

そして今、この人たちに出会い、すれ違っても、思い出しもせず、気がつきもせずに行ってしまうことでしょう。・・・もう、そうしてきたかもしれません。

共同住宅には、共同浴場がありました。とは言っても、週に何回かで、毎日のことではありません。風呂の日は父と毎回行きました。浴槽も洗い場もとても小さく、体をくっつけるようにして湯に浸かり、ほんの二、三箇所のお湯の出る蛇口の前で、体を洗ったと思います。

その日も狭い脱衣所で、体と体がぶつかりそうになりながら脱衣籠に服を脱ぎ、沢山の大人たちで一杯の浴室に入って行きました。私はおとなしい子で、どこでも悪ふざけをする子ではありませんでした。しかしその日はがき大将と一緒にしたので、ちょっと浮ついた気分ではありましたから、父がそのがき大将を洗い、私を洗ってたときにがき大将が悪ふざけをするとすこし憎憎しく思いはしたものの、浴槽に入る段ではつい一緒になって騒いでしまいました。なにを騒いでいたのか忘れてしまってますが、お湯を掛け合ったりとかではありません。ただ大きな声で、きゃあきゃあ言っただけだったと思います。しかしそれが気に障っていたのでしょうかね。

潜りっこ しよ

がき大将が言いますので、熱いお湯は嫌いなのですが、ふん　と言って人で一杯の湯船に潜りました。熱くて苦痛なのに、がき大将に勝ちたい一心でじっと我慢して、お湯の中で体を沈めておりました。案に相違してがき大将は直ぐ飛び出たようですが、私はまだ潜ってられるぞっと頑張りました。そしてもう息が苦しくて堪らなくなった時、ぐいっと私の頭が押さえつけられました。必死でした。頭を振り、力一杯もがき、顔を出そうとしました。しかし頭を押さえつける力は更に力を込め、押さえつけてきます。あと数秒で私はお湯を呑み、溺れていたでしょう。ずっと手が外され、私は顔を出すことが出来ました。息を吸い、顔を拭い、誰が私の頭を押さえつけたのかと、その大人の顔を見ました。頭の禿げた、力瘤の凄い、そして逆らえない小動物をなぶって喜ぶ、にたにた笑いの残忍な眼がありました。私は声も出ず、父を見ました。父はなにも気付かず、蛇口の前で頭を洗っておりました。　　・・・　　なんで　なんで　一番苦しいときに　助けてくれなかったの　私はそのときになって初めて声を上げて泣きました。それからどうなったのでしょうか。この子の頭を押さえつけていたとか、私の子供を殺す気か、とかの怒号が聞こえました。見ると、頭の石鹸を落とし、まだ胸の辺りに泡を付けた父がその男の前で仁王立ちになり、怒鳴りつけておりました。　　いやあ　ちょっと悪ふざけが過ぎるから　懲らしめてやろうと思って　・・・　それで溺れさすんかっ！　　父は木の桶を掴んでおりました。　　いやあ　いやあ　そう言って男は出て行ってしまったと思います。

風呂から帰る道筋、私はじっと黙りこくっておりました。頭を押さえつけられ、溺れそうになった恐怖と、まさにその時最も頼りにしていた父が何も気付かず、知らん顔して頭を洗ったことへの不信感で一杯でした。そして本当の危機に会った時、他人は誰も、そして親さえも助けにならないと知りました。勿論こんな風に考えたわけではありません。しかし子供心に、最後は孤独なんだと知りました。

善通寺病院の中に、大きなタイル張りの浴場がありました。そこはそれまで一度も使われたことがありませんでした。どうしてだろうと思っていたのですが、いよいよ取り潰されることになり、その前に一度周辺の人に無料で開放されることになりました。その代わり、人手がなかったのか、その浴場の清掃に周辺の人が借り出されました。母が出向いて、私も一緒に付いて行ったと思うのですが、母は忘れてしまっていました。陸軍病院時代の大きな、白いタイルの浴場でした。

父が仕事から帰り、未だ明るかったから土曜日だったのでしょうか、その浴場に行きました。脱衣室も広く、人も余り居なかったのでゆっくりと、まるで独り占めのように浴室に入って行けました。室内は白いペンキ塗りで、タイルも白で、高いところにある窓から一杯に陽が入り、とても明るくて気持ちよかったです。浴室の真ん中に小判型の浴槽があり、風呂の縁は水色で、それだけでも、いつものお風呂とは違い、清潔感にあふれておりました。湯も熱くなく、湯船は浅くて、つい泳ぐ真似さえ出来ました。なんで、いつもこのお風呂にしてくれないんだろうー そう思ったことでしたが、このように開放されたのはこれ一回で、白くて大きなこの建物は程なく解体されました。今見ても、どのあたりだったか分かりません。池があり、売店のある講堂があって、その向うにあった筈なのですが。

そして、その後、こんな噂も聞きました。

あのお風呂では 遺体が 洗われていた

戦場から帰ってきた 血だらけの遺体 とか 戦場から帰ってきた後亡くなった人の遺体が洗浄されていたという噂です。真贋のほどは分かりません。しかし私はだからと言って、どうとも思いませんでした。子供のことはありますし、親が連れて行って一緒に入浴したのですから。そして、今でも、それが本当なら痛ましいこととは思いますが、その当時の大人がしたように気味悪がったりはしません。たとえそれが本当でも、痛ましい目にあった同胞のことではありませんか。

私が以前めちゃくちゃにした肥後の守の持主だった子が、幻灯機を映すからおいでと他の子を誘っておりました。しかし私は誘ってくれません。やはり怒っていたのでしょうか。

гентウキ . . . ?

何なんでしょうか、分かりません。いつ?何時? 口々に訊いております。私は誘われてなかったので、仲間外れでした。しかしです、なに映すん? という言葉を聴いて興味深深、なにやら面白そうと思う気持ちで頭が一杯になりました。

今から えっ まだ明るいやん

大丈夫 雨戸 閉めたら 暗くなる って お兄ちゃんが いったた
そういいながら他の子等の行く後を、私はそっと付いて行きました。元々私は目立たない子でしたので、後を付いて行ってもそうは注意も払われません。私は咎められることもなく、彼の家に入り込みました。

長屋の間取りは他と一緒に、居間の方に入って行き、私は隅っこで黙って座っておりました。お兄ちゃんという人は、親戚の子で中学生くらいでしょうか、彼がお土産に幻灯機を持ってきたのでした。とは言っても新品ではなくて、黒く塗られた金属性の箱の角は塗料が剥がれ、錆も見えました。机の上にそれを置き、電気のコンセントを上の方の電気の二股ソケットに差し、雨戸を閉め、スイッチを入れるとぽおっと明るい円が映りました。操作は中学生がしました。幻灯機の前をレンズごと開き、あれはなんと呼ぶのでしょうか、映写フィルムというのでしょうか、上方の巻き取り軸にセットし、蓋をすると、前方の壁に映ったのは 冒険ダン吉 でした。とは言っても輪郭線がとても太く、かろうじてそうと分かる程度です。しかし、お兄ちゃんが脚本を上手に読んでくれるので、場面が変わるのを皆じっと見入っておりました。

何度か場面が変わると ダン吉 は直ぐ終わり、次に見せてくれたのは ベティちゃん でした。 ダン吉 は何か紙製の物に描かれていましたが、ベティちゃんは普通のフィルムで、画像も明るさも段違いだったと思います。でも余り説明がなく、内容はよくわかりませんでした。

気が付くと、真夏のことでしたので、汗が滴っています。雨戸が開け放たれた途端、一度に涼しくなり、生き返るようでした。 幻灯機 — 私はこの後、ずっとこれを覚えておりました。そして小学生になったとき、私はお菓子の入ったボール紙の箱で、これを作りました。しかし、映すものがありません。そこで普通の写真のフィルムを

映してみましたが、白黒の反転しているものが使える筈もなく、がっかりしました。そして考えたのが、写真そのものを電球で照らし、これを映すことでした。箱の中で電球の後方に写真を置くと、果たして明瞭に映りました。

しかし映ったのはアルバムの中の家族の写真で、ただそれが大画面になっただけでした。私が小さいときから、思い込んでいた 幻灯機 でしたが、あれはなんだったんでしょうか。暗闇の中でじっと息をひそめて見る、ぼやっとした画像とそれを映し出すブリキのからくりと、機械の縁から漏れてくる電球の明かり — なにか特別な仕掛けがそこにあったように思ったのです。ごく単純な構造から現出される まぼろしが子供の頭にこびり付いてしまっていました。高々20ワットほどの電球を光源として、稚拙な画像と、赤や青の色が意味もなく広がり、ピントの合わない滲んだような幻影がしみの付いた壁に薄暗く現出している、そのことが子供の私を捉えていました。しかし後に自分で作った 幻灯機 で映し出したものは真反対の現実で、私を落胆させるのに充分でした。子供の私が一番欲しかったものは、手に入れてしまうと直ぐ放りだしてしまうものでしかありませんでした。

子供時分、おもちゃを縁日で買ってもらいました。水笛、鳩笛、しばき独楽、地球独楽、そして割り箸鉄砲。割り箸鉄砲は輪ゴムと割り箸で、自分でも作れました。勿論小学生になってからのことです。道具は先に写真を載せた父のナイフでした。割り箸鉄砲は父の里の、八幡様のお祭で見ました。従兄弟が買ってましたが、それは連発式のもので、どんな仕掛けか知りたくてちょっと手に取ってみましたが、構造が分かる前に取り返され、充分にはわかりませんでした。しかし輪ゴムを何本も掛け、次々と発射することが出来、たかが割り箸鉄砲なのに、こんなことできるんだと思いました。

水笛、鳩笛は、・・・どこだったんでしょうね、菊人形を見に行った時かに買ってくれたと思います。陶器製の、中に水を入れて吹くと、ピロピロと震えて鳴る笛でした。しかし吹き方を間違えると、中の水を吸い込んだりします。また水を入れないと、ただポオポオと鳴るだけの笛で、すぐ飽きてしまうものでした。地球独楽も、科学独楽とか言っておりましたが、今思うとオートジャイロの原理ですね。それでもおもちゃって子供は飽きちゃいますね。むしろ使いこなしが難しかったり、それで何かが出来るようになる方が面白かったと思います。それに、私は余りおもちゃが欲しいとは思ってませんでした。

母が家にいて縫い物などしていた時はミシンの糸がなくなった糸巻きの芯で、糸巻き戦車を作り、大きなボタンのぶんぶん独楽で独り遊びをしておりました。それででしょうか、また私が一人っ子だったからでしょうか、小学校では協調性がないとか消極的だとか、担任にいわれていたようです。その言葉の裏には、共稼ぎの子は という言葉が隠されていたようですが。

父は私の面倒をよく見てたと思います。お風呂は必ず父とでしたし、父は釣りをしましたが、よく一緒に行きました。しかし例えばキャッチボールとか、何かを一緒にして遊んだ覚えはありません。そして今孫までいる私は、自分の子供に何をしてやっただろうかと反省しております。私も父同様、体を使って子供と遊んだ記憶がないからです。今更のことですが、少々後悔しております。

私達の子供の頃は町におもちゃ屋さんなんて、そうはありませんでした。この善通寺の町中にも確か一軒あった筈ですが、私は買ってもらった記憶はありませんので不確かです。しかし、あれ いるうー と道に寝っ転がって泣き喚いている子を見た記憶はありますから、あったのだと思います。

ところが親もそうそう買い与えてくれた訳でもなかったんですが、何故かおもちゃを沢山持っていました。そんな時、取り分け高価なおもちゃをお土産に貰ったことがありました。中ほどで二つに折ると銃身の中のポンプが引かれ、引き金を引くと先に詰めたコルクの弾がポンと音を立てて飛び出すピストルのおもちゃです。そんなもの見たこともありませんでした。またそれは、子供の手にはとても大きくて二つに折るのも大変でした。そのお土産を持ってきたのは、父の戦友と言う人で、他にも さくまドロップス

とか 筒型に包んだビスケットも持ってきてくれたように思います。声の大きい、背も高い人で、とても自信に満ちた態度でした。何度か来たと思います。そのたびに高価なものをお土産に貰いました。しかしその中で私の喜んだものと言えば さくまドロップス でした。その さくまドロップス も、缶の中に少し入ってる はっかのドロップが、今まで口にしたことのないびっくりするような味覚のものでしたから、缶の穴に指を入れてこね回し はっかのドロップ ばかりを搜しました。

かと言って、持ってきてくれた人のことは好きではありませんでした。なぜなら、その人の前では父がなんとなく気圧され、あまり顔も見ず、口数も少なかったからです。にもかかわらず、その人はお構いなしに、戦闘の際父はこんな風に逃げ出したとか、要領良くこんな風に立ちまわったとか、大きな声で母に話しておりました。父は下を向き、抗弁もしません。母も生返事しかしようがなかったと思います。子供の私にとって、父は一番強くて一番偉い人でしたから、なんでもっと堂々としてないのだろうと思ってました。

その人が帰った後、父がボソッと言いました。

あいつ 闇屋で 儲けてるらしい

なんだか危険な匂いがしました。父はあの時何才だったのでしょうか。まだ30才にはなってなかったと思います。

これも縁日で買ってもらったと思います。 ポンポン船 です。お解かりでしょうか。ブリキ細工の船で、炉の下にろうそくを入れると、ペコペコペコとうるさく音を立てて水上を走るおもちゃです。舵が付いていたりいなかったりと私は何隻か買ってもらいました。子供がおもちゃを選ぶ時、全く知らないものを選ぶより、以前一番楽しかったものを選択するものです。ですから、私は なにがいい？ と言われると、壊れてなくなったポンポン船をまた買って貰いました。

ポンポン船を走らせるのは、木のたらいでした。洗濯機など未だない時代でしたから、木のたらいに洗濯板が普通に使われていました。ですから、テレビドラマなどでたらいや洗濯板を使っている場面を見ると、違うんだよと言いたくなることがあります。そのたらいに水を張ってもらい、船尾からパイプに水を入れて水に浮かべ、短く切ったろうそくに火をつけて丸い盤の下にいれます。すると、最初はゆっくりと、だんだん速くなり、ついにはうるさい程に音を立てて走ります。狭いたらいの中を縁にぶつかりながら回っていきます。隣のお兄ちゃんの潜水艦にはスクリューが付いておりました。そんなんじゃなくても、こんなに走るのに、と不思議でなりませんでした。

ろうそくがなくなると、当然止まります。しかし自分ではろうそくに火を点けられません。それでまた母に火をつけてもらいます。そして何回かするうちに、自分でマッチを摺り、火をつけることをおぼえました。向うへ向かって摺る、手前に引っ張って摺る、最初はなかなか難しいものです。しかしそれが出来るようになったとき、私は或ることを決行しました。

父がどこからか、ジェット機は火を吹いて飛ぶんだ、だから速いんだといったたことを、火を噴くから速いと理解しました。雨の日でした。火遊びはしてはいけないと、きつく言われておりました。しかし雨が降ってるから、火事にはならないと自分で決めました。そして、新聞紙で旅客機型の紙飛行機を折り、窓を開け、その紙飛行機のお尻に火を点けて飛ばしました。紙飛行機はお尻を燃やしながらひよろひよろっと飛び、雨に濡れた地面に落ちました。

うそばっかり 火を噴いても全然速くないし 遠くにも飛ばないし
そう思って、窓を閉めました。

両親が雨の中を帰って来て、前庭の火の消えた紙飛行機を見つけました。

＊＊ちゃんが火をつけてとばしたん？

火をつけて飛ばしても ジェット機みたいに早くとはへんかった
それだけでした。怒られることもなく・・・。

そして、ポンポン船は私の一番のお気に入りでした。

お尻に火の点いた紙飛行機が、雨の中ひよろひよろっと飛ぶのを怪訝そうに見ていたのが、ジョンでした。ジョンなんてまるで雄のようですが、実は雌でした。

隣にエルという犬がおりました。両耳の先が垂れた、とても気の短い、明るい茶色の犬でした。いつも鎖に繋がれて、私なんかが近づこうものなら、その鎖を断ち切らんばかりに吠え掛かり、最初は私など怖くて、泣きそうになりました。

近寄らんとってね 本当に噛むからね

本当に噛むそうです。こんなのに噛まれたらひとたまりもありません。エルは私が前を通る度に、鎖を引きちぎりそうな剣幕で吼えました。

その頃、犬はペットではなく、番犬でした。ですから散歩させるなんてことはなく、犬小屋の前で鎖に繋ぎっぱなしでした。ですからエルは優秀な番犬でした。隣は母子家庭で、用心してるんだろうと父母が言ってたように思います。しかしとても大事にし、可愛がっていたように思います。エルに餌をやるのは、おねえさんでした。餌を持ってきて食器にうつしてやり、エルがガツガツ食べるのを、スカートで膝を包むようにしてしゃがみこみ、膝に突いた手で顔を支えてじっと見守っていました。エルも食べるものがなくなると、からから音を立てて食器を嘗め回し、じっとお姉さんを見詰めます。それがとてもやさしい目なんです。吠え掛かるときは、あんなに怖い顔をして歯をむき出してくるのに、こんな表情もするんだと思いました。

ジョンを飼うようになったのは、どうしてだったか思い出せません。母が欲しかったのでしょうか、私が飼ってと言ったのでしょうか、分かりません。ただ、母が抱いてきた子犬を見て、父が

足袋を履いている犬は良い犬だ

とか蘊蓄を垂れていたと記憶してます。白っぽい短毛の、前足に足袋を履いたような感じになってた子犬でした。名前は確か、父が付けたと思います。それから休日に板切れを鋸でひき、普通の屋根の形の犬小屋を作ったのも父でした。最初の夜はクーンクーンと鳴き続けました。もう首輪をされ、杭にとめられた鎖に繋がれておりました。

餌をやる係りは私で、食器代わりのアルミの洗面器に、ご飯に味噌汁をかけたものを

入れてやると、自分の顔の何倍もある入れ物に顔を突っ込み、懸命に食べます。小さいくせに、その間に食器を触ろうものなら、ウーっとうなります。そして、本当にカプッと噛まれたことがありました。まだ幼児だったこともあり、余りの痛さにわっと泣いてしまいました。すると父が出てきて小さいジョンの頭をポコンと叩いたのですが、涙でよく分からない視界のなかで父が手を振り上げた時、ジョンがおびえて目を細め、体をよじってすくみ上がるのを見ました。そして実は、ジョンが私の手を噛んだときも、一瞬の後アッまずい、やってしまったという顔をしたのも分かりました。いや分かるんです、犬でも。そして泣きやみかかった私は、ジョンが小さな声でギャンと悲鳴を上げるのを聞いて、

ジョンを たたかんとして
と言い、それが悲しくてまた泣き入ってしまいました。父は、 ちゃんとおしえとかな、いかんから これは しつけやから と少し言い訳がましく言ったように思います。

ここまで書いて、隣のお姉さんの名前をおもいだしました。

けいこさん

四国八十八ヶ所を巡ると、死んだ人に会えるといいます。決して死んだ人ではないのですが、こうしていると昔の人に会えます。

寄り道です

写真を撮ってきました。荒瀬の地蔵菩薩さまです。由来は下の写真に見える看板に詳しく書いてありましたが、よく読んでいません。看板の奥に見えるお堂の中にお地蔵さまがおられます



桧作りの背の高い仏像で、本来ならこのお地蔵様一体を守るだけのために一寺が建立されていても不思議がないぐらいと思います。



鉄の扉に鍵が掛かっておりましたので、きれいに写っていないのですが約1200年前の、行基の作と看板には書いてあったと思います。一度扉が開け放たれているときに出くわし、まじまじと拝観させていただいたことがありました。本当にびっくりしました。

荒瀬の地蔵菩薩さま

甲山寺手前の田んぼの中にあります

ジョンを繋いでいたのは、鉄の鎖でした。T字型に付いている横棒を丸い輪に縦に通して外すようになっている鎖でした。これが子供には難しく、出来るようになるのに頭を捻りました。また出来るようになって、犬が引っ張って思うようになりません。なんとか鎖を外して、散歩の追い紐代わりに持ち、ジョンと走ったりしました。ところが私はよくこける（ころぶ）んです。四六時中膝小僧を擦り剥いてかさぶたになり、そのかさぶたを剥がすと黄色い膿が出てきて、また痛みます。ですから、ころぶとジョンに八つ当たりしました。ジョンもじっと身をすくめ、小さい暴君の暴虐に耐えます。そして仕方なく、また走ります。

私はコッペパンが大好きでした。アンパン、ジャムパン、クリームパン — その頃パンはクリームパンも含めて、中に餡が入ったものばかりで、パンとはこうしたものと思ってましたが、コッペパンはほの甘く、餡のないものだったので珍しく、また食べやすかったからかもしれません。その好物のコッペを、ある時ジョンと食べたくなくて犬小屋に行きました。きょとんと見ているジョンの前に座り込み、一口食べます。そしてそれを突き出します。するとジョンが飛びつくように、私の指ごとパンに噛みつきました。その頃にはジョンの歯にも慣れてはいましたが、必死のジョンの歯はさすがに痛かったです。でも左手でジョンの頭を叩き、今度は私がパンをかじります。そしてジョン、次に私。ジョンも慣れたのか、何度目かからは私の指に噛み付かずにパンをかじって行きます。

＊＊ちゃん なにしょん

母が言いました。

ジョンとパン たべよん

最後のパンの端をジョンにやって、パンはお仕舞いになりました。

その頃は犬の躰も、一緒に遊ぶ遊び方も知りませんでした。フリスビー犬もいませんし、ドッグランありません。名犬ラッシーも未だでした。お手とお座り、これくらいのもんです。しかも幼犬ですから、待てなんて餌の前では、するはずもなく、後は鎖に引っ張られながら立ち上がり、私に飛びつこうとするばかりでした。まだ4～5歳の私でも、そんなジョンをだっこできました。後ろからお腹に手を回し、胸に抱えるようにして持ち上げます。嫌がっているのは分かります。しかし面白がって、よく抱き上げました。犬の遊ばせ方、犬との遊び方を知っていれば、こんなこともしなかったのでしょうか。

ところが、だんだんそんなこともしなくなりました。ジョンが何時までも幼犬ではいてくれなかったからです。ある時ジョンに飛びつかれ、後ろに跳ね飛ばされました。子供は犬の成長ほど早く大きくなれなかったんですね。私はジョンに負けました。鎖で追っても引きずられます。そうして私はジョンと遊ばなくなり、ジョンは犬小屋の前で鎖につながれるだけになりました。そうしながらもジョンは尚大きくなり、誰が前を通ってもチロリッと見上げるだけの、脚の長い大きな犬になりました。

そしてジョンはお腹が大きくなっておりました。いつも家の前におり、殆ど鎖につながれていたはずなのですが……。ジョンは薄汚れ、何かというと息切れし、後ろ足をそろえて横に投げて坐っていました。なにか救いを求めるように父や母を見上げ、自分の体がいかに重いといった風に立ち上がり、鎖で動ける範囲を徘徊し、また身を投げるように横になります。

暗い晩でした。ジョンの様子がおかしいと、父や母が犬小屋の中の覗き込み、古い毛布を入れてやってみました。翌日の朝、奥の壁にもたれているジョンのお腹の前に3匹の、目をつぶったままミュウミュウと鳴く子犬がおりました。1匹はジョンと同じ毛色、1匹は茶色、……。もう1匹のことは忘れています。いずれも口の回りが黒く、耳ばかりが大きく見えました。子供を手にとろうとすると、ジョンがこの上なく怖い顔で、それこそ歯を剥き出し、明らかに噛み付くと分かるうなり方をします。私は本当に怖くて、手を引っ込めました。

これ以上犬は飼えないので、子犬は捨てることに決まったようでした。父が仕事から未だ帰らない夕方、母は子犬を箱に入れ、私を自転車の後ろに乗せて自衛隊の建物の辺りに行きました。もう薄暗く、人通り也没有せん。母は子犬の入った箱を川べりに置き、音を立てないように自転車で帰ろうとしました。私には、子犬を捨てようとしていることが解っていました。

いぬ　　ほおらんわぁー

顔を洗えるほどの熱い涙が、私の頬を流れました。母がうろたえているのは解ってましたが、私はもう一度

いぬ　　ほおらんわぁー

と自転車の荷台で泣いておりました。

子犬のことは、貰いに着てくれた女の人の記憶がありますので、どこかで飼ってくれたのだろうと思います。相当迷惑顔だったことも覚えています。子供を連れて行かれる時、ジョンが鎖一杯でグルグルと歩き回って見ていました。私も、シンと鎮まったような気持ちで見えておりました。そして子供が全部居なくなり、ジョンはまた自分の前足にあごを乗せ、犬小屋の前で横になっている日々に戻りました。

当時、母は6折りだったか5折りだったかの小さな屏風のようなもの（調べてみますと、へら台 というものだったようですが）を広げ、ローチャコという楕円形か半月形のもので布に印を付けたり、へらで痕をつけたりして服を縫っていました。紬け台に裁断した布の端をとめて手で下糸をかがって行きます。そしてミシンも使いました。その時糸のなくなった芯で糸巻き戦車を作っていたので、その作り方を私に教えたのは多分母だったのだと思います。しかし裁縫をしている母の横で、私は退屈でたまらない時間を過ごしておりました。へら台を立てて体を隠す陣地とし、糸巻き戦車を走らせ、パーンパーンとかドカンとか一人言っってナントカごっこをしておりました。へらがなにかの武器にも見えました。

何時だったか、私に何かをかぶせます。綿の入った頭巾です。

これ なあに ？

防空頭巾

今思うと、母の心の中には未だ戦争があったのだと思います。

時々町に、裁縫の材料を買いに行きました。布とか糸、そしてその時はボタンだったと思います。いつもの八百屋の向うの手芸屋さんでした。その時たまたま鎖を離れていたジョンが、自転車に乗って行く私達の後をうれしそうに付いてきたのは知っておりました。しかし手芸屋さんまでは付いて来ず、母はボタンを選んでおりました。それは一声でした。

ー キャイン ー

聞けば解ります。ジョンと他の犬の声の違いは解ります。手に取ってみていたものを全

部投げ出し、通りに走りました。そしてそこは一種異様な殺気が満ちておりました。何人かの作業着の男達が、棒の先にワイヤーが輪になっているものを持って、違う犬を追い詰めておりました。男達が声を掛け合い、怯えた犬が竦み上がり、一瞬走り、男の手が伸びて輪が犬の首に架かって空中でもんどりうつのを見ました。その向うにゲージがあって、何匹かの犬が閉じ込められているようでした。

さっき捕まえられたん おくさんとこの ジョンとちがうん？
いつもの八百屋のおばさんが言うておりました。・・・母も私も無言でありました。

家に帰り、ジョンがいないことを確かめ、母は父の帰りを待って事の次第を話し、相談しておりました。私はジョンが居ないとだけ思い詰め、何もいえません。翌日、保健所に行き、ジョンを返してくれるようにたのんだようです。しかし紐にも繋がれずに一人歩きしていたことと、鑑札を持たず狂犬病の予防注射もしていなかったことで、どうしても返すことはならないと言われて来たようでした。

返してもらってくるからね 絶対返してもらってくるから
母がそういていたので、私は帰ってくるものとおもっておりましたのに、ジョンは帰ってきませんでした。私の中には、何もかも吸い込んでしまうような悲しさとか思いとか言葉とか、お構い無しに全て吸い込んでしまう何かが胸のうちに重く沈みこみ、なにも思うことができず、涙もでませんでした。

次の日曜日、父が一人で犬小屋を壊しておりました。

父は煙草農家の生まれでしたから、子供の時から煙草を吸っていたと豪語しておりました。事実叔父の家（父の実家）に行くと、夏には煙草の葉を収穫し、それを乾して手で伸ばし、専売公社に納めておりました。

父の実家は徳島の山奥で、一番近い国鉄の駅で降りても歩いて2時間ほどもかかりました。それも細い、だらだらと傾斜の続く山道です。乗り物なんてある訳もなく、ひ弱い子供でも自分の脚で歩いて上がるしかありません。目的の駅に行くのに、汽車は一度吉野川をわたり、大きく U の字に回ってまたもとの側の川岸に帰るという複雑な走り方をします。その先が父の実家へ行くための駅です。駅を降り立つと思わぬ広さの広場があり、表通りに繋がる道の角に、もうその時から廃院になっていた内科の医院がありました。ところがその地域の人もその前を、もう用もないといった風で振り返りもせず通り過ぎてしまいます。コンクリートの小さな医院で、私が知った後からも、誰も住まぬまま何十年か先まで残っておりました。

あれ なに ？

ないかの いしゃよ もう しんで おらんけど

叔父の田舎言葉が耳に残って、降り立つ度に見上げておりました。

その通りを抜け、角の八百屋の横を吉野川の方へ行くと、製材屋さんが何軒もあり、太い材木がベッドに載せられ、幅広の帯鋸が回って材木の切り出しをひっきりなしにやっていたものでした。叔父の家に向かうにはその反対の方角に行かなければなりません。ゆるゆると上がって行く狭い坂を出発点として、ただ歩いて上がってゆきます。後に道が整備され、車でも上がれるようになりましたが、それでも一時間弱はかかります。対向車でもあれば、谷に落ちそうになりながらすれ違います。曲がりくねって、車に弱い人なら確実に酔います。途中展望台が作られており、そこに立つと眼下に吉野川がみえます。それも地図の通り、曲がりくねって見えます。それほど登ってもまだ半分くらいでしょうか。休日など対向車に殆ど会いません。

時には道に倒れこんだ木が、そのまま横たわっていたりします。そして昔はその距離を歩いて上がりました。歩くしかなかったのです。

どうだったのでしょうか、まだその時は親の家にいたのでしょうか、のちに看護婦

になった叔母が迎えに来てくれたことがありました。父は長男で、父の末の妹は私とそう年が離れていませんから、その上の女兄妹も未だ家にいたんだと思います。やさしい叔母で、足弱な私に合わせてゆっくりと、そして私にとってはとんでもなく長い距離を根気よく付いて歩いてくれました。途中飽きが来ないように、

このみずは のめる ここは のめない

と話してくれました。叔父はまだ山に暮らしていますが、水は今も山の湧き水を使っています。電気の方は当時も来ていました。

雨の降った朝でした。水溜りのぬかるんだ道を行くと、バッタが飛びました。一気に飛び、道の先で止まります。私達が近付くとまた飛びます。まるで道案内をしてくれているように何回も飛び、目を離した隙に居なくなりました。そんなことに気を紛らせて、岩を削った道を行きます。反対側は大きな岩が転がっている川です。雨で増水し、白く砕けている流れが恐ろしいようでした。

そして他人の庭先かと思う所を通り抜け、川に沿って歩くと、二ノ宮が見えます。ここからまだずっと上の八幡さんの分社です。川を渡って、とてつもなく急な石段を上がるようになっていきます。その横を通っても、まだ五分の一ほどしか到達しておりません。

それから・・・、どうだったんでしょう、小学校は通り過ぎております。二ノ宮、八幡様、分教場、暗くて怖いような杉の森、そんな順序だったと思います。そして背の高い木はなくなり、なだらかな畑と小さな農家作りの家がぼつんぼつんとあって、道は未だダラダラと続きます。周りの畑の向うに沈み込んだような家、藁葺き屋根が重たそうな家、屋根をトタンに換えた家、どれも小さい家ばかりがあって、その後道も急に陰しくなりだし、木を組んで何かを干している畑のそばから人一人やっと通れる急坂をあえいで上がると、叔父の家、父の実家に到着でした。

収穫した煙草の葉は、太い縄のよじれをゆるめ、そこに出来た隙間に根元を差し込んで吊るします。少し枯れかけたような大きな葉を等間隔に挟んだ縄を何本も仕立て、今度は屋根裏にぶら下げます。剥き出しの柱にあがり、紐を引っ張って、煙草の葉が挟まった縄を引き上げて括りつけ、もう梅雨だというのに囲炉裏を焚きます。余り煙を上げないように用心しながらチロチロと火を燃やすのですが、すぐ蒸し風呂のようになってしまいます。だからと言って戸は開けられません。折角の熱気が逃げてしまうからです。

つい最近まで、讃岐でも煙草作りは盛んだったらしく、確か　　ベーハ小屋　　といったと思うのですが、米の作りにくい内陸山間部に、煙草の葉を干す専用の小屋が今でも沢山残っています。ベーハ　　というのは、たばこのは　　が　　ベーハ　　になったのではないのでしょうか。入り口の狭い、背の高い、上塗りをしてない土壁の蔵のような建物で、特に一目で　　ベーハ小屋　　と判別できる特徴があります。屋根の上の煙抜きの越し屋根です。高松飛行場からレオマワールドへ行く道沿いに何箇所も見られます。余談でした。

私は運動神経が鈍く、力もありませんでしたので梁に昇って綱をわたすなんて出来ませんから下から見てただけでしたが、私より一才上の従兄弟は梁の端から端まで手放しで渡って行き、得意そうに煙草をはさんだ綱の先の紐を渡せと指図します。私はちょっとムツとなりながら渡します。反対側は叔父夫婦がやっておりました。そうやって何本も張り渡し、乾燥するの待ちます。

そして乾燥すれば、煙草の葉の手延べ作業をしなければなりません。私達はそれも手伝いました。叔父夫婦、祖母に従兄弟と私です。五人が黙々と伸ばして行きます。一応叔父達が束ねた葉煙草の束を渡され、子供はそれを台に手延べしました。根元を括った葉煙草の束の上に、葉先の丸まったくしゃくしゃの葉を置き、破らぬように丁寧に伸ばして行きます。葉脈は固いけれど葉そのものは厚くて、薄手の鹿の皮のような手触りだったと思います。

枚数は専売公社が数えているから、破っちゃならないぞと叔父は言います。しかしどう

でしょう、作業に倦んだのか、一枚の葉を鋏で切り刻み、英語の辞書の紙を破って小さな板の上にセットし、細巻きの巻き寿司を作るように巻き込みました。両切りの手巻き煙草が出来ていました。それを囲炉裏の火で火を点けて深々と吸います。

うっ きつい きくう

加工していない葉煙草ですから、相当強い煙草になっているらしいです。

たばこに 酔うわ

体に悪いからやめとき

いやぁ うまい はまきより うまい かみは辞書にかぎる

そんな会話があったように思います。叔父の口から吐き出された煙は、煙草のやに臭い気持ち悪くなるようなものでした。しかし手延べする私の手に染み付いたにおいは漢方薬のような良いにおいでした。父も昔ああやって吸ってたのでしょうか、聞いておけばよかった。

葉煙草の出荷作業を手伝っていた時は、もう小学生になっておりました。官舎に居たころは勿論そんなこと知りもしませんでした。

その官舎に居たころ、よく父が吸っていた煙草は 光 でした。今はもう見ることもできませんが、全体が鮮やかな朱色の、下方に太陽があり、雲も描かれていたショートピースと同じパッケージの煙草だったと記憶しています。それを、森永のミルクキャラメルのように ー と当時の私は思っていたのですが 一箱の下から指で中箱を押し上げ、銀紙を外箱の上縁で千切り、ポンポンと下を叩いて煙草を浮き上がらせ、その中から一本指でつまみ出します。その動作が、今で言うなら一連のお茶の作法のように見えて、とても遠いものに思えました。大人ってそんなことするんだ、大人は煙草を吸うんだ、そんな憧憬です。つまみ出した煙草は両切りで、それを箱の上でポンポン叩き、煙草の上端が沈むと上の縁を丁寧になでつけ、吸い口とします。・・・ふーん、そういう風にするんだと、これも子供は見てました。次に、マッチを擦ります。赤紫の火が走り、軸が燃え、口に咥えた煙草に持って行きます。そして煙草の先に火が移り、まああるい橙色になって、吸うたびに光を増します。不思議でした。父のする一連の動作が不思議なことでした。

父はこの 光 の他に しんせい いこい ゴールデンバット なども吸ったりしていたと思います。なんでそんな銘柄まで知っていたかと言うと、それぞれの時に、これはこうだとか言ってるのを聞いていたからです。バットは香りがなくてやっぱり不味いとか、いやバットは色々な煙草を作った時に出てきた残り物で作るから、時にはとてもうまいことがあるらしい、などの噂話をしていた記憶があります。いこいより しんせい の方が辛いとも、叔父と話してたと思います。そういえば、イアンフレミングが 「007 ジェームス ボンド」 の中で、どの作品かは忘れておりますが、日本には しんせい というおいしい煙草があると書いてあったと思います。

そして小説から煙草のことを知ったものとしては他に 朝日 があります。紙の筒が吸い口として付いていて、芥川龍之介はその筒を縦と横につぶすと美味いと書いてありま

した。彼は相当のヘビースモーカーだったようです。余分な蘊蓄でありました。

さて、父がその 光 の外箱を使った遊びを覚えてくれたことがありました。光の固い外箱を丁寧に横に裂いて広げ、輪を作ります。そしてそれを手のひらに載せ、上から両手を打ち合わせます。すると、まるでタイヤが破裂したようにパーンと大きな音がします。ピストルを発射したみたいと言ってもいいかもしれません。そんな音は、拍手を打つように打ち合わせてもでませんので、やはり紙のリングをお蔭なんでしょう。一度使うと、リングは潰れ、どこかが破れます。私は父が 光 を吸って空き箱が出来ると、いつもその紙のリングを幾つも作ってこの遊びをしていました。そしてさらに、中の銀紙を丸めます。丸めて出来た玉に更に銀紙を押し付け、だんだんと大きくして行きます。昔はこうして銀紙を集め、供出していたんだと父が言うておりました。物語の中では宝物のことを 金 銀 珊瑚 と言うておりましたので、この銀紙を集めた玉は大変な宝物なんだと思っておりました。ですから、私は父が煙草を吸い終わるたびに銀紙を貰い、少しずつ大きくして行きました。そして砲丸投げの砲丸程になったとき、それはなくなりました。何時の間にかなくなりました。私は宝物が無くなったと、家中捜し回りました。すると、父が

お国のために 供出した

と言います。子供にはよくわかりませんが、なにか妙に説得力があり、私は得心しました。そしてまた、せっせと銀のボールを作りました。そしてまた何時の間にか無くなります。供出するのなら供出すると言うてくれればいいのですが、父は黙って持ち出します。お国へ供出するのですから、どこかとんでもないところへ持って行かなければならなくて、それで黙って持って行くのだらうと、一人合点しておりました。

しかしあれはどうも、 ぼろ買いさん と私達は言うておりましたが、廃品回収業の人のところへ持って行ってたのだらうと思います。玉を半分に切って、中に石でも入ってないかと確かめてた、その時はなんのことも解りませんでした。父が母に話しておりました。そしてまたそのお金で煙草を買っていたのでしょ、けっこういいお金になると他の大人も言うておりました。私はそれからもう銀紙を集めなくなりました。

父は未だ三十にもならない、若造でした。

光　　って煙草は、考えてみると高価な部類のものではなかったでしょうか。ショートピースが相当高いののでしたから、多分そうだったのでしょう。それを父は常時吸っていたように思います。

おっ、　光　　か　　いいたばこ　だよな
父の同僚もそんなふうに言ってた記憶があるくらいですから。父はその両切りの煙草を、時に　シガレット　ケース　に入れ替えておりました。シガレット　ケースは金属製で、横に開き、中に張り渡してある細いばねで煙草を押さえておりました。ケースの横の金具を押すと、上蓋が　独りでに　－　自動的に　という意味ですが　－　開きます。私は父からこのケースを取って、一生懸命、何回も金具を押しました。子供の指の力ではなかなか押せませんが、押せるとスーと開きます。それが面白くて、閉じては開き、閉じては開きを繰り返しました。そしてその度に煙草の香りが、干草のような香りがしました。

パイプと父は言っておりましたが、正確にはシガレットホルダーなのでしょう。それも無骨なほど厚手の、象牙のシガレットホルダーを持っておりました。これは口当たりが柔らかくて気持ち良いし、使い込めば使い込む程にいい色になるんだと、自慢そうにいったと思います。そのホルダーと煙管、きざみ煙草を、叔父が作ってくれた煙草盆の小引き出しに入れて持っておりました。そして時々ちり紙を紙縊りにして掃除します。茶色というか、チョコレート色というか、なんとも臭い　やに　が、ちり紙にまわり付いてきます。煙管は、雁首のところを蠟燭の火であぶって、じゅじゅっといっている間にちり紙と紙縊りで拭きます。そんなことを、子供は好奇心一杯で見えておりました。そして父の居ない間に小引き出しを開け、パイプを咥えて吸ってみます。気持ちの悪くなるにおいと、舌にまわりつくにがさで、おもわず吐きそうになりました。それでも懲りずにまた咥えてみます。それででしょうか、パイプの吸い口辺りに歯の当たった傷が付き、父が首を捻っていたことがありました。

そして、はっと気付いたのか、私に

こどもには　毒　なんだから

といいます。そうなんだ、あの臭さと苦さは　毒　なんだと解りました。それでも大人

になれば 毒 じゃなくなるんだからと勝手に思い、また時々啜えて遊んでいました。大人ぶって、パイプを指で挟み、スウッと吸って本当に煙を吐くように、口をすぼめて息を吹き出します。ふっと大人になったような気がしました。

その頃、我が道楽親父はカメラをぶつくりと止めてしまっておりましたが、だからといって何もしないはずもなく、仕事帰りに通い始めたのが、パチンコでした。その当時、時間的経緯ははっきりしませんが、自衛隊は 警察予備隊 と呼ばれていたはずで、隊員のことは 予備隊さん と言っておりました。それが、 今度 保安隊 って呼び方が変わるらしいと言っている 間に、 自衛隊 になりました。ですから、今は隊員のことを 自衛隊さん と読んでおります。そして、その若い隊員さん達の娯楽の一つがパチンコでありました。勿論映画もそうで、善通寺の映画館の料金も 自衛隊割引 というのがあったと記憶しております。

そして当時パチンコ台は、 正村ゲージ という大革命があって、大変なブームになってたようです。パチンコ店が善通寺に何軒もでき、 チーンジャラジャラ という音が店先まで響き渡っておりました。ご他聞にもれず、父もこれにのめり込んで行った一人でした。確かに最初のうちは 勝って 沢山の景品を抱えて帰ってきたこともありました。綺麗にパックされたビスケット、森永のチョコレート、キャラメル、そんなものに大喜びしたこともあります。しかしそんなことは直ぐ無くなり、あっても煙草数箱だけって事になりました。その煙草が 光 であり、後には ショートピース に変わったわけです。

どうした訳か、父にパチンコ屋へ連れて行かれたことがありました。母が実家に帰って不在だったのかもしれませんが。父は母が不在の時でもパチンコがしたくて、子供を連れて行くのです。パチンコ台がズラーっと並んでいる所を シマ と言ったと思います。当時は機械も未だ機械化されておらず、その シマ の中に人がいて、玉を補充して回っていたようです。

たまあ でないよおー

そう言って、台をドンドン叩いておりました。私はただ退屈で、父の玉受けから数個玉を取り、父の真似をしてハンドルを弾いてみました。弾くのが強すぎたのか、ポンと跳ね返り、また戻ってきたりします。弱いと玉は駆け上がらず、これも戻ってきます。首尾よく弾けると、玉が釘の間を弾かれて踊るようにしながら落ちて行きます。私は玉が風車に当たり、風車がクルクル回ればいいのかと思っていました。

とおちゃん これにあたって

まわったのに たま でないよ

ここに はいらないと たま でない

そう言って、自分は自分の打っている台を見たまま、入賞口を指差しました。また弾いてみます。確かに入りました。真ん中の玉を溜めてある円形の窓が光り、円周の玉が両脇からザラッと落ちて、 チン ジャラジャラ 、玉が出てきました。

おっ はいったなあ

父の連れの人がいきました。

こどもは よくが ないから はいるんだよなあ

そうでしょうか、退屈してただけなんですが・・・。

当時パチンコ客は、じっと立ってパチンコをしていたと思います。左手に玉を持ち、親指で次々と玉を流し入れ、右手でハンドルを弾きます。全くパチンコ一つするにも、職人技です。そうやって玉を弾いていますから、盤面はガラスに玉が当たってガチャガチャいいながら、いつも数個踊って落ちて行きます。それを目で追っていると肩が凝って、疲れてしまいます。私は立てりっぱなしに疲れてしまい、床に座り込んで指で何か絵を描いて遊びました。私は絵はへたくそで、何を描いたら良いか知りませんでしたが、他にすることもなく、仕方無しにそんなことをはじめたのです。泥だらけの油染みた木の床でした。するとそこにパチンコ玉が落ちていました。私はそれを拾って弾いてみます。玉が一個、コトコトと落ちて行きます。それを目で追ってゆくと、一番下の穴に吸い込まれ、パチンコ台は静まり返ってしまいます。私はまた床を捜します。直ぐ向うの台でおばあちゃんが、一発一発私と同じように目で追い、一発ごとに舌打ちしたり何やらぶつぶつと口説を言っていました。

父はその日は負けたのか、不機嫌そうに私の手を引き、黙って店を出ました。外の静かさの中で、私の頭の中はガチャガチャとパチンコ台の音が響いておりました。

それ程までして熱中していたパチンコに、父はある時からはたと行かなくなりました。母が父のパチンコ通いを気に病んで　－　パチンコも賭け事ですから　－　しかしそうまで咎めたくなかったのか、

行くな　ご飯くらい　食べていけばいいのに
と言った時がありました。すると、小賢しい小坊主が　－　私のことですが　－

ご飯も食べんと行ったらいかんがなあ　かあちゃん
と、すぐ側で言ったものです。そんなことまで言われていても、父は職場からパチンコ屋へ直行するまでになっておりました。

それが、ぱたっと行かなくなりました。本当に、ある日突然、といった感じでした。その理由は三十年ぐらい経って、やっと解りました。

その日お給料を貰った父は、同僚と共に例によって行きつけのパチンコ屋へ直行したようです。ところがその日はどうしても全然玉が出ず、つい熱くなってついついお給料の半分ほどを注ぎ込んでしまいました。そこでやっと気が付き、青くなって隣とその隣を見ると同僚達も同じ有様で、最後の一発がカラリンと一番下の穴に吸い込まれていく

ところでした。それからが、若さですね、どういう経過でそうなったか、詳しいことは知りませんが巡回している店員を呼び止め、

どうなってるんだ 全然出ないじゃないか 金返せ
とやったらしいんです。すると急に陰悪な雰囲気になり、みんな来い と店員が全員を集め、

お客さん そんないちゃもんつけられたら どもならんなあ
と凄み、しまった やくざだとその時になって気が付きました。しかしこちらも数は居ましたから、虚勢を張って 金返せ と言い募ります。多分大きな声も出ていたのでしょう。回りから普通の客はこそこそと逃げ出し、一触即発の状況になった時、店主が出てきて、

まあ待て
今日は大人しく帰ったらどうや 怪我してもつまらんやろ
と、静かな声で諭します。

こっちは 南方で 命がけの戦闘をしてきたんや
と、後はわかりませんが言ったそうです。

南方？わしも南方やったんや . . . わかった 半分 返そ
後は男の店員は散り、店主のうしろに付いて行った同僚達と父は、カウンターで女子店員からお金を返してもらって、ほうほうの態で逃げるように帰ったそうです、それこそ一目散に、後も見ず。

多分 南方 は口実でしょうね。いい口実が飛び出したので丸く治めるために店主がそれに飛びついたんだと思います。

しかし、あの泥臭い、勝新の 兵隊やくざ の一場面みたいです。そしてこれが事の真相だったようです。

パチンコは前回のようなことで、やまりました。しかし我が道楽親父は、早々に次の道楽を見つけてきました。それが社交ダンスです。ところが私は、この父のダンス道楽のことは余りよく知りません。さすがに気が咎めたのでしょうか。私も母も、父がダンスをしているところを見たことがありません。

わたしも ならおうかしらん

だめだ おまえは せがちいさいから にあわん

そんな会話があったそうです。母は一生働き続けた人でしたが、この頃は世間のことは父からしか入って来ませんでした。しかし、今流行っているものをよく見つけてくるものです。あとから調べてみると、このころ社交ダンスは確かに一大ブームで、父の職場でもダンスクラブが出来、そこに通ったようです。そしてここでも色々な武勇伝を残していたことを、後から知りました。

それを母は見にも行きませんでした。協議会が催されるということで、父はそれに備えて随分気取った衣装を自分でそろえ、意気揚々と不機嫌な母を尻目に出かけて行き、なんとその大会で準優勝して帰ってきました。ところがその時自慢そうに見せびらかした小さなカップも賞状も、次に引っ越したあとは、どこにも見当たらなくなりました。いや、その以前から無くなっていたのかもしれませんが。

さらに、父は出張でどこかへ出かけたとき、夜その町のダンスホールに同僚達と一緒に出かけてゆき、そこのダンサー相手に踊って、

あんた しとうとやない ぷろやねっ！

と言われたようです。そうです、父は凝りに凝って、ダンス教師の資格まで取っていた・・・らしいのです。

これは違っているかもしれませんが、そのころ男の髪型でオールバックが流行り、それもスワロウテールと言っていたと思いますが、前から真ん中の髪を後方に撫で付け、それに重ね

るように左右の髪を撫で付けてまとめるやり方があったと思います。父がそんな講釈をしながら、手鏡を立ててポマードで髪を整えていました。（・・・ 幼稚園にも行って

ない子にこんなこと、何を考えて話してたんでしょうね、父は ） 母は台所で夕飯の後片付けをしておりました。そして髪が整えられると、よく磨きこまれた靴をもって、玄関からでもなく、勝手口からでもなく、裏の窓からそっと出て行こうとします。

とおちゃん どこいくん そんなところから

訝しんで声を掛けました。すると指を立てて口に当て、シッと言って私を黙らせました。怒ったような、叱り付けるような顔をして、しかし明らかに私が悪いことをした時とは違う、後ろめたそうな顔付きで 。 。 。 。私は父のその顔がいやで、嫌いでした。

とおちゃんは？

母がいます。

まどから でていった

だんすにいったんやろか そんなに だんす したいんやろか

父のダンス道楽で直接覚えている記憶はこれです。そして、これが本当に関係しているかどうかはあやふやなのですが、

赤い靴のタンゴ

の歌詞の一節とメロディをその頃のこととして、記憶しています。昭和25年頃の歌なんですね。

誰が履かせた 赤い靴よ

涙知らない乙女なのに

後の歌詞は知りません。

ついつい、ここまで父の道楽のことを書き並べてきてしまいました。しかし、そのどれもが終戦ののち突然走り出した 時代そのもの でありました。徴兵前、父は勤労奉仕隊で九州に行き、炭鉱の地下坑道で連続200日石炭を掘り続けたことがあったそうです。そんなこと、私には想像もつきません。また、細い木の鞭のようなものを作り、蜥蜴をピシッと叩いて捕まえ、焼いて食べる—そんなジャングルでの逃亡生活、これが父の戦争でした。それも 時代 であつたのかもしれませんが。しかし、戦争が終わった途端、それまで押さえつけられていた 時代 が、狂ったように走り出したと私にも見えます。そしてそれがもたらした戦後の繁栄は、私達団塊の世代をを豊かに育ててくれました。

もう一度父の道楽を振り返ってみますと、今まで列挙したもののほかに、原付自転車、スーパーカブ、石油コンロ、蛍光灯、洗濯機、電気炊飯器、掃除機、そしてテレビ、自動車、また、8ミリカメラと映写機。勿論父だけがこれらを欲しがったわけではありません。しかし父は新し物好きで、どこよりも早く青白い光の蛍光灯を付け、母は洗濯機のおかげで洗濯の重労働から開放されました。また、ご飯を炊くのは電気釜で、私の係になりました。そしてこの 新しい時代 は、このような物質的な豊かさだけでなく、過剰なまでの精神の自由ももたらしてくれました。

しかし、何時 時代 は父を置いて行ったのでしょうか。戦争による刹那の死の狭間を生き続け、終戦で開放された途端 時代 が狂ったように走り出し、その時代 と共に一緒に走りに走って、何時の間にか前を走る時代というものに置き去りに置いていかれました。私も今は一緒に走っていますが、もうそろそろかもしれません。

確かにあれは、父の生きた時代でした。

地方のダンス大会で準優勝して帰った後、父はダンスのことなどまるでなかったことのように、ピタリとやめてしまいました。ダンスに行かなくなっただけでなく、ダンスができることなど毛程も口にしなくなりました。そのあたり、何事かあったのかもしれませんが、父の性格に由来しているかもしれません。この後確かに色々なものを欲しがり、いの一番に買い求めたりはしましたが、道楽というほどのことはこれ以降なくなっただと思います。落ち着いたというのでしょうか、懲りたというのでしょうか。

共同住宅で居たころの母は本来の仕事を止め、しかし何かしなくてはと洋裁を習い、毛糸の編みもの教室も通いました。こういったものも、それから何年かは流行ったものです。最初は至って簡単な編み物の機械で、先を斜めに削って三角形にした物差し状のもので、毛糸の掛かった編み針の列を一気にうごかします。現在は毛糸の編み機というものの自体みつからないのに、そんな原始的な構造のものがかつてあったという記録すら見当たりません。どういったものか想像もつかないと思いますが、L字型の編み針が並んでいて、それに毛糸の鎖編みしたものを一本一本手作業で掛け、次にその針の列の後方に毛糸を渡し、先ほどの先端が三角の物差し状のものを編み針の列の後方に通して一斉に動かします。そしてまた一箇所一箇所手持ちの編み針で毛糸を絡め、終わるとまた糸を渡して物差し状のもので編み針の列を動かします。模様を付けたり色の違う毛糸を使うときはその場所まで針の本数を数え、手持ちの編み針で色々に操作します。私は母がそうやって根気よく、生真面目に根を詰めて編んでいたのを見ておりました。多分内職だったと思います。家で子供を見ながら出来る仕事をと、肩を凝らせ、歯が浮くとか言いながら一針一針毛糸を引っ掛け、物差しのようなものでジャーっと音を立てて編んで行きます。

そんな時期だったと思います。目を醒ますと誰もいません。父は仕事に行っております。母は？目を醒ました私は家に居るはずの母を捜して家の中、表、そして外へ出て捜しました。知った人もおらず、どこかへ行った母も帰ってこず、多分仙遊寺の辺りだったと思います、そこで一人泣いておりました。私が3才でしょうか、4才でしょうか

、そんな時分です。母は昼寝をしている私に安心して、内職のものを届けに行ってたようでした。仕事から帰ってきた父にそんなことを話し、母はこっぴどく怒られていたのを覚えています。

先日母に、この毛糸編み機のあの毛糸の掛かった針を動かす物差しみたいなものの名前を訊ねました。しかしそれ自体、特別に名称のあったものではなかったようで、母も解りませんでした。ところが母はあの機械を今だ持っているらしいのです。何年前のことでしょう。やっぱり、あの奉公袋を残していた人ですから、こんなこともあるのかもしれませんが。相当奥に仕舞い込んであるようなので、また機会をとらえて写真を撮って載せます。

しかしながら、一番古い機械はあるものの、次の自動編み機はないようです。物差し状の物で押し込まなくてもよくなった機械で、四角い箱状のものを左右に動かせば編めて行くものでした。確か、ブラザー編み機とシンガー編み機があって、母は迷って父に相談し、結局シンガー編み機にしたと思います。それは本当に高級機械といった感じで、椅子に腰掛けて操作するようになっていました。ところが思いの外自動化されておらず、結局手持ちの編み針で色々と手を加えなければ模様も編み方も変えられなくて、母は期待はずれのようなようでした。そして結局内職の毛糸編みは古い機械で、また一針一針毛糸をかがり、肩をこらせてやっていました。新しい機械は早々に売り払ったと思います。

何時だったか、今度は私を連れて編み上がった品物の納品に、赤門筋の洋品店へ行きました。今でもわすれません、風呂敷包みを持って、子供の手を引いた母を見た店主のあの一瞬の一瞥を。そして次の一瞬で顔を変え、口では母の仕上げた品物を褒め、私を可愛いと愛想を言い、頭までなでようとしてしました。私は頭など撫でられたくなかったので、首を振って避けようかと思いました。

しかし、一瞬の間に手が頭に乗り、決まり文句の

年 幾つかな

という台詞が出てきました。私は答えなかった。そして母が困惑して、*才です と答えていたと思います。

次はなにを？

手間賃を受け取って母が聞きますと、また知らせます と言ってた筈です。しかしもうその頃からこういった内職仕事はなくなりかけておりました。そしてこのお店には、今

度は客として来るようになりました。その時店主はは仮面を被ったように、あの表情を顔の下に隠しておりました。しかし私にはその表情が透けて見えました。その後何年かして、母が客としても行かなくなった頃店主が亡くなり、長男や外の子供や叔父叔母の相続争いがあったようで、結局は誰も相続できず、店を手伝っていた長女さんがあとを引き継いだようだと噂が聞こえてまいりました。その店は今も赤門筋の一等地にそのままあります。

ここからは蛇足かもしれませんが、今もその店の商品の並べ方や表の看板、床がコンクリートの打ちっぱなしなどは、何一つ変ってないように見えます。そしてもしかすると中に入ればあの当時柱の前の棚に乗ってた 福助 が両手をついて今も客を迎えているかもしれません。

松江駅を降りると、美保関行きか大学行きのバスに乗ります。大学前まで乗って100円か120円だったと思います。大学の正門から少し手前で降りて、学校構内を通り抜け、裏の細道を行って赤土の急な坂を、自然にできた踏み段を伝って上がると、当時マンションと言われた私の下宿があります。下宿代も高いのは高かったと思います。4畳半の間でトイレは共同、流しも共同で、風呂場が隣り合わせで二つ、そしてなんと、洗濯機がありました。これは使い放題で、何回洗濯しようと無料でした。電話もインターホンで呼んでくれます。もちろん、下宿代と電気代は別です。私はここへ来るまで二回引っ越しておりました。その度に下宿代は上がります。ましてや一人で引っ越すことの大変さは、そのたびに増してゆきます。最初は服と布団の入った、当時布団袋と言うものがありました。それ一つと机だけで、引越し屋さんに頼むと、これならタクシーに乗せても間に合うと、引越料の高さに同情されました。学生の事ですから、そんなことも解らなかったわけです。

二度目になると、学習机に電気炬燵、ストーブ、本棚に本がびっしりと言った具合に増えてしまっておりました。今度こそは引越し屋さんに頼まないと思っておりましたところ、学生の引っ越しはリアカーでするものと頭から思い込んでいる友人が大学のリアカーを借りてくれ、荷物運びまで手伝ってくれました。今でも、その時手伝ってくれた友人には感謝しております。その彼が私に丸山真男氏の本をくれました。君の方がこれを持っているのにふさわしいと言ったと覚えています。どこがでしょう。この理屈っぽさでしょうか。しかし今でもこの本と格闘しております。えらい物をくれたと思っています。

そんなことで3度目の正直から、私のわがままもここで納まり、そのあとは卒業までそこで過ごしました。赤土の墳墓の上に建てられた学生寮でした。墳墓ですから、松江でも代表的な前方後円墳であったと思います。金崎古墳群と言います。雨の日は足を滑らせるとズボンのすそが赤く染まって色が退きません。手に着くと、きらきら光る雲母の小片がいっぱい見えました。松江は雨の多い所でした。

この下宿の、何というか、自由さが気に入ったらしく、一人の友人が引っ越してきました。考えてみると、男女が普通に同じ屋根の下にいるという下宿も、珍しかったのかもしれませんが。当時は不思議にも思いませんでしたが、私の隣は女の子でしたし、その反対側は大学の助手をしている人でした。棟を変わると女3男7の人数で住んでいました。といっても、そう親しくもせず、こんなにちがいのもんでした。

引っ越してきた友人は農学部で、かつ空手部でした。彼がある日、いきなり頭を剃って青頭になりました。剃ると頭は青くなるのです。大学の生協の理髪部に乗り込み、剃ってと言ったそうです。いいのか、いいんですと言った問答があって、結局電気バリカンで刈り、あと何回か蒸しタオルで蒸して剃刀を当て、剃ったそうです。ご丁寧に、そのあと頭全体にオロナインをべたべた縫ってくれたそうでした。初めてだからと言ったそうです。その青坊主と一緒に歩いていると、向こうからくる人に脅えが見えます。ましてや、その青坊主が粋がって高下駄をはいているんですから、なおさらでしょう。その男がいきなり、おす、と声を張り上げます。なに？と言

う顔を見ると、はるか向こうに先輩がいたということです。あんな向こうじゃわからないんじゃない？と言っても、挨拶しとかないと後でぼこぼこにされるからと言います。そんなもんかと、世間知らずは思いました。

語れば、大学時代は語ることが多々あります。年を取ると、身の内に沢山の思い出を持っています。それが人に語るに値しないものであっても、世の片隅で、それでも生きてきたのですから語りましょうよ。せめて子供ぐらいには、語ってもいいのじゃないかと思ってます。子供が聞かなきゃ、妻に語ります。こっちの方が手ごわいのですが、向こうこそ私に聞かすのですから、言いまくってます。人は人の中でしか生きられないのです。

小学2年生の初夏のことでした。ツベルクリン反応の検査が学校であって、

かゆくなるけど、かいてはいけません

と確かに言われました。しかし余りのかゆさについ、掻いてしまいました。その性か、発赤が二重になり、硬結もあって偽陽性と判定され、私は学校を半年ほど休みました。その判定のとき、受け持ちの女の先生が、象牙の先の付いたノギスで発赤の径を測ってひどく強張った面持ちとなり、他の先生を呼んで二人で真剣に測りなおしたり、発赤の硬さを指でつまんで確かめていたのを覚えております。ところが、私は私だけ特別扱いで、あれこれされることが恥ずかしくてなりませんでした。これは大変なことでしたのに、子供ってこんなものです。

とにかく、なにか解らぬうちに私は学校を休み、病気だから寝てろと言われ、一人何もすることなく家で過ごすことになりました。母は仕事に行っておりましたし、少し微熱もあったようで体もだるく、所謂空咳もしておりました。午前中は10時、昼間は3時に熱を図りなさいと言われておりましたから、その体温を測ること、昼寝をすること、昼は母が作っていった昼食を一人で食べることに、それだけを繰り返す毎日になりました。あとは何もしてはいけないのです。これを闘病生活というのでしょうか。戦ってなんかいませんでしたから。

その繰り返しの毎日に、ラジオを一日中聞いておりました。

NHK ラジオ第二放送、これで

銀杏は手品師 老いたピエロ

という歌を覚えました。

公園の魔術師

フランク・永井 の歌声でした。じゃ、この歌が好きだったかというと、好きじゃありませんでした。いちようは老いたピエロで、その老いたピエロがまるで魔術師のトランプを撒くように、黄色の葉をはらはらと撒いているなんて、物悲しさが一杯じゃありませんか。私は一人、誰にもそんなことは言わずに、寝具の上に寝転がって聞いておりました。

そして、次の楽しみの番組まで、聞くとはなしにラジオを聴き続け

でーてこい でてこい でてこい

おはなし でてこい

おはなし でてこい

おはなし でてこい

おはなし でてこい どんどこどん

という歌が流れるのを待っておりました。わたしにはこの番組が救いで、いつも姿勢を直し、ラジオを見詰めて聴いておりました。

でてきた でてきた ほーら おはなし でてきた

ここから、お話が始まります。

いつもその汚い容姿と、蚊や蠅、昆虫を食べることで、他の鳥から嫌われ、お前なんか 鷹じゃない、名前を改めろ と鷹にも脅かされる

よだかの星

も、これで聞きました。実際、よだか がどんなに醜いのかは知りません。しかし、小さな鳥にもものしられ、鳥の面汚しとまで言われ、夜鷹 の名を改めろと鷹に迫られ、それでも心優しく、いや心優しいから自分が羽虫や甲虫を餌にしていることに心を痛め、お日様に救いを求めます。そして、お日様に教えられて星にすがりますが、星座たちにも拒絶されます。その絶望のなか、よだか は必死に空を登ってゆき、星座たちを巡って おまえなんか といわれてしまいます。そして、地面に落ちて行き、もう少しというところで一気に空へ舞い上がり、自分も星になって青く燃え続けるようになります。・・・ よだかは死んだんだ、死んで よだか は空を駆け上り、それで星になれたんだ、私は突然理解しました。このお話は、 童話 だと思って聞いていました。しかし、私は最後に みやざわ けんじ という作者の名前を必死に覚えました。

よだかはぼくだ でもほしになんかなれない

その頃にはもう、私は私の病気のことがなんとなく解っておりました。

私は自分自身大変不本意ではありましたが、法学科に進みました。私の学校は学生が一期八十人に対して、教授陣は助手、講師を含めて四十数名いるという贅沢さでありました。憲法を教える学部長こそ東大ではありましたが、学部自体は京大系と云われ、だからどうなんだということですが、講義は詰まらないものばかりでした。学部長に至っては何時作ったか解らないノートを、聞き取りにくい口調で読み上げて講義を済ませ、学問をすることに熱意が感ぜられません。そんなことで学生に憲法学への興味が湧く筈もなく、ただ単に単位が取ればいいという勉強の仕方しかしませんでした。

学生はこずるいもので、試験前には去年の出題を先輩に訊き、それについての解答を用意するだけで、見事に山が当たって単位が取れます。憲法しかり、民法しかり、刑法も同様でありました。民法は相続について、刑法は罪刑法定主義と、今でも覚えています。憲法は 優 を取りましたが、試験に回答を書いた途端なんだったか忘れてしまいました。しかし、 ゼミ は違っておりました。私は法学部なのに法学を離れ、社会科学方法論をテーマとしました。大胆不敵と言うほかありません。そこで私の中に出てきたのが、 丸山真男 マックス・ウェーバー 宇野弘蔵 でありました。これを半年で読み解くなんて、まず無理です。

10月ごろ、レポートを出せ、早く出せ、もう締め切りは延ばせないぞと驚かされ、三日下宿に閉じこもって原稿用紙八十数枚をでっち上げたのが11月半ばでした。そして、その寄る辺は 丸山真男 でもなく、 マックス・ウェーバー でもなく、 大塚久雄 『社会科学の方法――ウェーバーとマルクス』 でありました。更に、その 社会科学の方法 にはない 宇野弘蔵 経済学原論 にも、いかにも難解な、社会と世界に斧を押し付け、食い込ませて分析して行くという風な文章に跳ねつけられ、跳ね返されながら食い下がり、なんとかでっち上げたのが八十数枚の原稿用紙でありました。はじめの、余りにも壮大な構想の果てが、岩波新書一冊の読書感想文程度で終わってしまいました。それをゼミで言うと、

そんなもんです さいしょは なにかの ひはんで はじまるもんです と、担当教授に言われました。

自然科学は実験が出来るが、社会科学は実験が出来ない

自然科学は 仮説を立て 実験をした結果がその仮説の

正否を決める　そして　結果は一つ　である

実験の出来ない社会科学は　歴史に対して　ある視座を
持ち　仮説を立て　それでその歴史が説明できればその
仮説は正しいと結論付ける

しかし　視座が変われば　仮説もあやふやなものとなり

正が否になることもある

ところが　宇野弘蔵氏は、未来からの視点と言いました。奴隷制は封建制から、封建制は資本主義から、資本主義は社会主義、社会主義は共産主義からと、未来からの視点に立つとそれぞれの全貌が見えてくるということです。ああそうかと一度に解った気になりました。

しかし今ならどうでしょう。人類の壮大な実験といわれた　ロシア革命とソ連、その崩壊を見てきた私達は、未来が社会主義だといわれて納得するのでしょうか。イデオロギーとしての国家の崩壊と、経済体制としての社会主義の瓦解が二十世紀の現実でありました。

そのような疑問を抱きつつ、私はなかなか歯のたたなかった　宇野弘蔵氏の　恐
慌論　を読んでおります。今　学問　をしております。

ドナルド・キーン氏の

なんでも　しりたい　いろんな　ことが　しりたい
という言葉が　よすが　に、この歳にしてです。

私は 野鼠の子 であったようです、あの ゴーシュ のゴウゴウと弾かれるセロの中に入って、病気をなおしてもらった 野鼠の子 です。半年余り学校を休み、やっと微熱も空咳も出なくなつて、私は復学いたしました。しかし、私は依然、よだか でありました。いや、前よりももっと よだか でありました。新学期が始まるときの席替えで、**君、**君の隣、と私に指名がされました。 えーっ！これがそのときの反応でした。私は俯き、その席に座りました。

勿論、成績はひどいもので、算数など 九九を覚えておらず、惨憺たる有様でした。

ある日、私は受け持ちの女の先生に、一緒に帰ろうと言われ、ひどく気詰まりな思いをしながら付いて行きました。何か話したのでしょうか、多分私は殆ど何も言わなかったと思います。そして立ち寄ったのが大きなお屋敷でした。石柱の門を通り、踏み石を踏んで式台を上がり、先生は黙って部屋に入りました。そこは先生の実家でありました。この子が**君、先生が若い男の人に言いました。この人は先生の弟でした。その日から私は学校の帰り道、その家に立ち寄って、勉強を教えてもらうことになりました。しかし、そのことを私は母にいいませんでした。私が劣等生であることを告げるようなものだったからです。

私は、次は何日と告げられるまま、このお屋敷に通いました。ここで楽しかったことは、イソップ物語を音読することでした。口にくわえた肉をポロリと落としてしまう犬の話を、今も覚えています。

しかし隠してもわかるものです。これを母が知ることとなりました。母は私を伴い、菓子折りを携えてこのお屋敷に向かいました。男の先生は、ちょっと驚いたようですが、さほど表情をかえず、静かに応対をし、菓子折りは受け取りましたが、月謝は頑なに断り、受け取りませんでした。

学期末、受け持ちの女の先生が学校を変りました。そして、弟の先生も理由を言わず、勉強を見られなくなったと私に告げました。母にそれと言うと、顔こそ曇らせましたが、どこかほっとしたようでした。その後、日を置かず、母はまた菓子折りを持って、お礼に行きました。この人を見たのはこれが最後でありました。

確か、その日の夕食の後であったと思います。隣の部屋で母が父と話しているのが聞こえました。弟先生も本当の小学校教師であること、肺結核で療養中であったこと、だから

あんたんとこの子 あそこにいつてるけど いかんほうが

ええでえ

と近所の知り合いに言われたこと、そしてあの家は元善通寺師団の副師団長で中将だった人の家系であり、姉弟共に教師になった教育一家であることなどを小声で話しておりました。

だから また うつらへんか しんぱいしてたんよ

私は毎日あの家の横を通って通学しておりました。家はいつもひっそりとたたずんでおりました。そして二年ほど経っておりましたか、私が転校する前の年、その家の前を黒い服を着た男の人や学生服の一団があわただしく動いておりました。そんな日があって、その後その家は門が閉ざされ、ひっそりと静まってしまいました。

まだ十年以上前まで、その家は建っておりました。今、立派な新しいお家が建っております。それを見ると、自然と涙が流れてしまいます。

四十代の終わりに思わぬ大病をしてから、私は毎年健康診断に行っております。それがダイエットのきっかけになったことは書きました。毎年同じ病院に行っていると、一年に一回とはいえ、看護師さんたちも何となく顔を覚えているらしく、説明の仕方にもそれが解ります。しかし健康診断って慣れっこになんかなれません。なにか異常が見つからないか、どこか要精密検査と言われないかとびくびくします。しかし顔は平気を装い、何度か聞いた検査の説明をあらためて頭に入れ、調査票を書き、服を着替え、他の人と共に最初の検査に向かいます。みな無言で、顔もどことなくこわばっています。思いは一緒なのでしょうか。

実際に健診が始まると後は流れ作業で、名前を呼ばれるまま順番にそれぞれの所をまわって行きます。血液検査、聴力、視力、慎重体重・・・、それぞれを詳述しても一緒なことで、なにも変った事はありません。ただ今回、エコー検査を追加しました。腎臓、脾臓、肝臓などの検査でした。ジュエルを塗り付けられ、医師が体を抱え込むようにして機具を当ててきます。チラッと不安がよぎります。その後胃のバリウム検査、そしてクライマックスが来ます。医師の説明です。

ああ、むかし**をやったのね、たいへんだったね

血液も検便も いじょう ありません

ウォーキングとか体操は今のまま続けてください

ごくろうさまでした

これだけを聞きたくて健診に来ます。ほっと胸をなでおろし、受付で代金を支払って、妻に電話します。

よかったよ

でも何時か、精密検査しましょうといわれるようになるのでしょうか。

身長が2 c m減ってた、体重は変らず

他はなんともなかったよ かえります

これが今年の結果です。でも去年歯を2本失い、肩が上がりにくくなり、膝も・・・年々うしなっていくものがあります。それに耐えなければならない年になりました。

危機感を覚え、万歩計を2個買ってきました。私がリバウンドしたわけではありません。馬鹿な飼い主だと反省仕切りなのですが、朝夕散歩に欠かさなかった我が家の犬が糖尿病と診断されたからです。ついこの前、しきりと水を飲みます。それも水入れの容器を舐めるほど水を欲しがります。そこで気が付かなければ馬鹿です。犬は糖尿病にならないと妙に信じ込んでいて、どうしたんだろうと首を捻り、ネットで調べました。すると、犬が水を欲しがるのはストレスのせいだ言うのを見つけましたので、尚食欲を掻き立てるような高級ペットフードを買ってきて与えたりしました。本当に殺すところでした。

結局獣医さんに診せ、血糖値が異常に高い、入院させなさいと言われてただただ驚くばかりで、また馬鹿な飼い主だったことが申し訳なくて、落ち込んでしまいました。

いまペットの糖尿病は多いんだそうです。今回もお世話になった獣医さんの娘さんは動物の糖尿病の専門医だそうですから、そのあたりの事情がなんとなくわかります。人間だって、特にこの香川県は糖尿病全国一だそうですから。さらに二位はというとお隣の徳島県だそうです。糖尿病は一度発症すると直りません。そしてサイレントキラーでもあります。そして透析治療を受けなければならなくなることも充分ありますし、心筋梗塞脳梗塞、失明、さらには下肢の切断の憂き目にさえあわなければならないこともあります。そんなこと知ってて飼い犬を糖尿病にしまいました。戦前戦後、日本人は糖尿病にならないと言われてました。それは単に栄養不足ということだったんでしょう。いまや飽食の時代、ペットの動物まで糖尿病になる時代です。心しましょう、食べまくらないように心がけましょう。今は妻と二人、夜万歩計をつけてあるいています。

ああ何か楽器が出来たらいいなと思いました

我が家にはピアノがあります。そして、子供が学校で使っていた楽器のほかに、フルートがありました。エレキギターとそのアンプ、スチール弦のギターもありました。と言うと、まるで音楽に関心があるように聞こえますが、私達の子育て時期の流行です。ギターは私が買ったものでしたが、全然弾けませんでした。他のものは全部子供達に買ったものです。子供達の居なくなった応接間には、一年に一回調律をしてもらうだけのピアノが、飾られています。

先日、乏しい小遣いで買ってやったフルートを、嫁いでいった娘が持って帰りました。それまで振り向きもしなかったくせに。その途端、そうだ、楽器をやろうと思い立ちました。しかし、私は楽器の経験なんて、何もありません。勿論、学校でハーモニカとか、リコーダーは習いましたが、そんなに楽しい経験ではありませんでした。それなのに何故か、楽器が演奏できるといいなあ、と思ってしまったのです。しかし、なんにしよう・・・、と迷いました。管楽器がいいなあ、と漠然と思ったのですが、吹けるほどの体力があるかと我が身を疑いました。それに、なんで吹こうと思ったんでしょう。弾く選択も、奏でる選択もあった訳ですから。弾くならギター、奏でるならピアノ、とか。しかし何か楽器と思った途端、私の頭の中には クラリネットの メモリーズ オブ ユー のメロディが響いておりました。 誰？ ベニー・グッドマン？北村英治氏の演奏はよく知っていましたが、突然若い頃興味、関心を持った覚えのない ベニー・グッドマン という名前と、曲まで思い出そうとは、我ながらびっくりしました。

確かに、ジャズは好きでした。松江ではジャズなど聴けませんから、米子まで行きました。東京には ディグ という有名なジャズ喫茶がありましたが、米子にも古くからのジャズ喫茶がありました。汽車賃払って、コーヒ一杯貰って、擦り切れてじゃりじゃりノイズの入るレコードを聴きました。ちょっと気取って、誰が演奏しているのかも分からないのに、カウンターに立てられたジャケットを、わざとチラッと見るだけにして、隣の男は首を振り、私はつま先でリズムを取ったりします。

大学闘争の時期、暇にまかせて米子の高校で教師をしている人を訪ねた帰り道、ジャズ喫茶に寄ってみたのでした。この人は国語を教えていて、詩人でした。痩せて、針金を捻って人型にしたような人でした。突然訪ねるようになったので、ひどく戸惑わせてしまいましたが、連れて行ってくれた大学の講師が知り合いだったからでしょうか、精一杯歓迎してくれ、色々話してくれました。谷川俊太郎氏を批判していたことと、米子の劇団の男優がこの人の詩を上手に朗読してくれたと嬉しそうに話し、各自に自費出

版の詩集をくれたことをおぼえております。こんなことばかりやっているから未だに独身だ、初めて会った学生にそんな事を言っておりました。私はその時、学生に占拠された広島大学から、原爆反対闘争に駆り出されて帰る途中に鈍行の汽車で聞いた夜の蟬の鳴き声を思い出しておりました。蟬は夜鳴かないもの、夜鳴く蟬は寿命が尽きかけようとしているから、不気味と人の言うのを聞いておりました。

ジャズ喫茶では、好きな曲を掛けてもらうと、100円とられます。お客さんはどんなのが好きですか？と聞かれ、ジャズピアノがと言いました。すると、ビル・エヴァンスの枯葉を聞かせてくれました。

その頃、ジャズと言えば、マイルス・ディビス　そしてジョン・コルトレーンでした。。これじゃなきゃ、ジャズじゃないという雰囲気でしたが、確かに　コルトレーン　の　マイ　フェバレット　シングス　は好きな曲でした。しかし、ジャズ　でなくとも良かったんです。米子のジャズ喫茶は、ああJBLのスタジオマスター　を使ってるんだ　とか　アンプは　ラックスマン　の真空管アンプ　なんだ　とかの、オーディオマニアだったからです。当時、スピーカーに三菱ダイヤトーンの通称ロクハン、16cmシングルコーン、全帯域の名器がありました。これを使って、ざぶろく板のベニヤ板で、長岡鉄男さんのチープなスピーカーボックスの設計図を元に、バックロードホーンを苦勞して作り、友人宅へ持って行って鳴らしたものでした。艶やかに鳴るその音に、ああ　アンプとプレーヤーが欲しい　、そう切実に思いました。昔トリオと言っていたのが今はケンウッド、パイオニアはカーナビのメーカーになり、山水は確か、台湾の会社買い取られた筈だし、ヤマハがグランドピアノのようなコーンのスピーカーを作り、ソニーがやっとトランジスタのアンプを出してきて真空管アンプの陰で大出力を売り物にし始めた時期でした。

話が横道に逸れましたが、要するに音楽的教養も経験も無い私がクラリネットを思いつき、ベニー・グッドマン　とか　メモリーズ　オブ　ユー　なんて、どこから私の頭に入り込み、どこに住み着いていたものか分かりませんが、突然浮かび上がって、遂にクラリネットを買う羽目に陥りました。買いました。音がでません。吹くと血圧が上がるのか、血管が膨れて血が上るのを覚えます。ぷつつん　しそう・・・と思いながら、今私の頭の中には、ベニー・グッドマン氏の柔らかくてやさしい高音が響いております。

ついでに、今でも真空管アンプの組み立てキットがあるらしいので、暇になったら半田ゴテを振るってみたいと思っています。

まんじゅしゃげ と入力し、変換すると 曼珠沙華 となりますが、漢字に直ると、まんじゅしゃか とも読むようになります。このお彼岸に、曼珠沙華が咲き誇りました。

田んぼのあぜ道、線路の土手、のっばらに突然によきによきと茎が伸びて先の緑に紅が差し、するともう翌日には赤い花が咲きます。それも群れだって咲き連なります。土手に並んで姿をあらわし、一日10センチの早さで育ってゆきます。それが50センチほどになると、高くなるのはやめて花をつけ始めます。天を突きそうに尖った蕾が一気に開いて、真紅の花が開きます。最近白い曼珠沙華も珍しくなくなりました。それでも曼珠沙華の花の色は、妖しい赤です。

いや、本当に妖しい雰囲気をもった花です。あの赤は妖艶と言ってもいい。だから白い花は地味で、興味を引きません。あの花の赤は、子供の頃不気味に感じ、すくみあがるような所もあるような気がしました。

この曼珠沙華、正式名は彼岸花。原産地は中国揚子江付近。曼珠沙華のような別名が沢山あり、その数1090とも言われています。その一例が、幽霊花、死人花。ちょっと気持ちの悪い名前です。それが、西洋ではマジックリリーやレッドスパイダーリリーと言うようになります。そのようなことからか、日本では昔から和歌や絵画、生け花、茶花などに使ってはいけないとされてきました。あの原色の赤が毛嫌いされていたのでしょう。花形も派手な中国風に見えますから。それ故でしょうか、別名の中に天蓋草があります。天蓋を詳しく述べますと、仏像・導師・棺などにさしかけてつるす、笠(かさ)状の装飾の事を言います。王侯貴族や大僧正などに差し掛ける大きな傘のことなんでしょう。これもまた、余り日本的とはいいがたい感じのものに見えます。中国風なんでしょうか。

ところが、この彼岸花、毒花痺れ花ともいわれる通り、毒は確かにあって大変なのですが、それでも貴重な澱粉源で、飢饉のときなど球根を掘って、それを晒して毒を抜き、食べたようです。どんぐり、しいの実などのあくを晒して食用にしてきた日本人ですから、さほど抵抗はなかったようです。

さらに、その花言葉は、「情熱」「悲しい思い出」「独立」「再会」「あきらめ」というのですから、ちょっと趣きが違って戸惑います。まして葉見ず花見ずと言う名前通りに理解していると、この花の実際とは違っております。彼岸花に葉はあります。お彼岸ごろ立派な花を咲かせると、秋雨の中花を枯らせ、そのあと球根からさわさわと葉を茂らせて、他の植物が冬枯れにかけたころでもたわわに葉を残して光合成に励んで冬を越します。そして夏に葉を落として休眠期に入り、秋に華を咲かせるというサイクルを繰り返します。毒花、彼岸花の毒は球根にあって茎、花は大丈夫ですが、毒は毒です。気を付けましょう。

曼珠沙華、今盛りです。先ほどの白は、品種改良で出来たと言われてますが、駅の裏には野生で白い彼岸花がありました。赤は、ちょっと毒々しく不気味な雰囲気の花ですが、その群生の中で見ると、ちょっとほっとします。あまり忌み嫌わず、見てやりましょう。彼岸花、小説にも歌にも見かけたことがなかったので、その理由を調べてみたのでした。

新しい家を建てようとおもっています。

未だこの年で、私は現役で働いております。同世代、または同級生などはもう定年で退職したりしておりますが、いやいや継いだ父の仕事が技術職であったため、いまだ仕事を続けていられるというのは幸せなことなのではないでしょうか、幸せというべきなのでしょうね。もうあまり行き来のないかつての同級生も、顔こそ会わせませんが退職し、家の車も止まったまま動いておりません。遅くに結婚して、あのままずっと一緒に過ごしてきたのでしょう。学校時代友人であった者とも、社会に出るとこんなもんです。

今日はこんな話題ではなかったのですが、笑い話です。

お前、若いなあ。なんぼになったん？

同窓会で、まじめな顔して言われました。

えっつ、・・・、沈黙してしまい、思わず自分の年を数えておりました。

そろそろ引退を考えております。同時に、今の家を出て、どこかに 終の棲家 をと考えております。今の家は父が建てたもので、小さな家ではありますが、ここで押し合いへし合いしながら二人の子供を育てました。そしていま、夫婦二人だけになると一日中で一回も入らない部屋が出来てしまっています。ひろくなったものだと思いますし、古びたといえど古びた、家族の歴史がそこにあるといえど、その通りです。ただ使い勝手が悪いからとか、古びたからとか、そんなことで新しい家と思ったわけではありません。家族の歴史が刻み込まれた家であっても、そこを捨て、住むところを変えればなにか新しいことが始まるのではないかと、なんとなく、かすかに期待するからです。いや、今までの家を捨て、新しいことを始めたいという決意のようなものが芽生えてきたからです。自分の家というものを持ったことのない妻に、一生のお礼として、自分の家を持たせてやりたいという気持ちもあります。

不動産ニュース 香川 という情報誌が愛読書になりました。しかし 売地 って妙に目がいきません。イメージが湧かないからです。ですから、つい中古住宅を見てしまい、妻から、 手垢が付いてるみたい でいや！と言われてしまいました。しかし中古住宅を見ていると、いろんな想像をしてしまいます。その家が立っている土地の土地柄、周りの環境、時にはその空の色さえ見ることがあります。想像のし過ぎでしょうか。しかし、牟礼町には夏行った事があり、その空の色は同じ半島でも仁尾、詫間の庄内半島とは違って、か一んと硬いものでした

。香川でも、大野原から雲辺寺の山は湿気たような重さがあり、琴平から阿波池田への319号線、猪鼻峠の山は木も低く、落ち着いた感じがあります。さらに塩江街道は奥深く、未だ開けてないのに車の通りが多くて通過するだけの温泉地です。そんな山の雰囲気、裾野の方に広がっていくのではないかと思うのは、独断でしょうか。善通寺は大麻山の麓で、ずっと立った山を背景に、程よい品のある、実に落ち着いた町ですから余計にそう思ってしまう。五岳山は総本山善通寺の寺号です。

ハウスメーカーの展示場にも行って見ました。今頃は地元の工務店で家を建てようと思う前に、**ハウスとかーハウチュとかの方へ行ってしまふのが一般的かとおもったからです。そして、行く前に色々と条件を考えてみました。結論から言うと、年取ってから家を建てようなんて輩が言う事は皆一緒に、話をする前から得心顔で、
ご要望はわかってますよ と言わんばかりでありました。

先ず第一に、 街中ではないこと

二番目に、しかし スーパー などが近いこと

三番目に、 病院が近いこと

四番目は、 特にJRとは限りませんが、 駅が近いこと

五番目もあって、平屋であること

後は、家の耐震性と津波が来ないこと。それには海から遠くて、近くに川が流れていないこと。さらに贅沢を言うと周囲に山坂がないところ、と言いたい放題を要望しまくりでありました。聞いてた方は多分、そんなところがあったら、こっちが住みたいわ、とハウスメーカーの人も思ったことでしょう。にこやかではありましたが、舌打ちしそうなのがよく解りました。年取ると贅沢千万です。

実は家を建てたいと言う事については、別立てで文章にしたいと思っていたのですが、一向に前に進みませんので少し文章にすることで整理をしてみようと思って書き始めてみました。同世代の人であれば、終の棲家への我々の要望については十分に理解してもらえんと思います。町中のごちゃごちゃしたのは嫌やとか、分譲地は嫌やとか、わずらわしさを嫌う気持ちはどうしてもあります。また、車に乗れなくなるときが必ず来ますので、駅やスーパーが近くにあって歩いていける距離であることは、必須だと思います。タクシーに乗り合わせてスーパーに買い物に来ている姿を見かけます。また、病院の近いこと、二階に上がるのが辛くなるだろうこと、同様の理由で山坂のないこと・・・、衰えるとは辛いことです。しかし、こうして整理してみると、大変です。なにか諦めなくてはなりません。

じゃあ何を外すかと考えると、結論から言って 駅でしょうね。そうそう鉄道に乗って遠出もしないでしょうから。旅行も、多分 ツアー なんかで行くようになるでし

ようし。それにしても ツアー というのは味気ないものだと思います。何度かバスツアーに行きましたが、その度にがっかりして、しかも疲れ切って帰ります。横道に逸れますが、ウィークリー・マンションとかマンスリー・マンションがあるのではないのでしょうか。旅は駆け足で行くのではなく、旅館、ホテルに泊まるのでもなく、1週間ぐらいそこで滞在し、毎日歩いて、生活もして、体験した方が良いのではないかと考えます。観光地は、そこまでの程のものもないかもしれませんし、表通りは飾りだけと知っています。生活すれば、そこは 日常 です。だからと言って、旅が 非日常 だけを求めるものでもないでしょう。日本中どこへ行っても同じようなビルが建ち、車が走り、画一化された町並みと風景が広がっています。でも、旅したいのはなぜでしょう。同じ所に1週間もいて、何かを見つけないかと思ひ込んでいます。知らないところへ行けば、隣町でもそこは 観光旅行 と思いますから。

今住んでいるところが、あまりにも便利なんです。駅は毎日犬の散歩につれていってまですし、スーパーも車で5分、病院は中核病院である国立善通寺病院、香川小児病院があります。本当に不自由しません。だから動けない……。先日、かつて住んでいた住宅に行ってみました。一つの棟を左右に分けて、二軒の住宅にした借家でした。それが道を挟んで東西に五棟、六棟と建っておりました。思えば小さな家でした。台所と六畳、四畳半、あとはトイレがあるだけで、水道は付いていたはずですが、ポンプ式の井戸が各棟に一つ、共同で使えるように設置されていました。台所には、羽釜を二つ乗せるコンクリートのかまどがあり、時々煙突掃除屋さんに掃除をしてもらいました。掃除し立てはごうごうと煙を吸い、その音は驚くほどでした。そしてその隅のちょっとした土間で七輪に火をおこし、煮炊きや魚を焼いたりしました。テレビを見ると料理番組で、ここで火を中火にし、と言います。七輪でどうやって中火にするの、と少し反発してましたが、ガスも入ってきました。ガス栓を開け、マッチで火をつける、それだけでドキドキしてました。ガス中毒は、とても怖いものでした。家の外にある縁側は私のお気に入り、よく独りで遊んでおりました。庭に桃の木、垣根に蔓バラがありました。そんな小さな、しかし新築の住宅でしたが、今行ってみるとその棟は潰され、更地になってしまっていました。考えてみるともう40年ですから。他のところも更地になってたりしましたが、私達が出て行った時、隣の棟でいた人がまだ住んでいました。時は確実に流れ、その家に積み重なっているというのに。

家を建てる、その新しい家にも確実に時が積み重なって、何時か無くなってしまいます。私達だって、何年その家に住めるのか、そう思うと、さびしくなります。本当にこの世は、生きている人たちのものです。

しかし、家を建てます。

その積りなんですが・・・。

首をかしげて考えてしまいました。娘にもっと前向きなことってないの？明るいこと、ないの？そう問い詰められたからです。いつも暗いんだから。眉をしかめ、常に難しそうなことばかり言ってるのが立派なわけじゃないのよと、妻の方も言います。楽しくあははと笑い飛ばせるようにならなくっちゃ、人生面白くないわよ。ふざけることがいいことだとは思わないと反論します。じゃ何か面白いことあるの？と言り返されます。また考えてしまいます。面白いこと、楽しいこと、それってこの年じゃ中々見つけにくいんじゃないかなあ・・・いや、あるんかなあ・・・、昔はあった筈なんだけどなあと考えました。

隠れたベストセラーといわれておりますものに、 定年後ライフプラン手帳 というのがあります。これを私は何年か前、始めに私の、後で妻用と二冊買いました。これは確かに、自分の人生を整理し、記録するのにはよく考えられており、手帳の項目に従って書き込んで行くと定年後のライフプランも見えてきます。ですから真剣に考え、決定していないことはきちんとやり遂げ、定年後の再就職なんかも決まってから書き込みます。資産も、私には整理するほどありませんが、確かなことを書き込みます。勿論借金もです。そして遺産相続、葬式の有様まで書くようになっています。この手帳は多分今流行りになった エンディングノート の火付け役だったのでしょう。

これを買ったとき、妙な焦りがありました。なにか残しておかなければとか、先が見えすぎて不安ばかりだとか、他にも何かに駆り立てられるような焦りでした。自分が何も残さず消えてしまうような、といえぱいいのでしょうか。それで、この手帳に懸命に書き込みました。私の履歴書、学歴、これまで住んだ町、私の好きなもの、項目は家族の歴史にまで及びます。そしてこの手帳の一番最初には 私の定年予定日 を記入するようになっていて、今見ると 平成22年12月14日 と書いてありました。ところが、まだ働いています。22年というのは自分で勝手に決めた期日で、その日を通り越して今もずるずると働いているわけで、贅沢なもんです。叔父達も知人も決められた定年で、ぽんと退職させられているというのにです。そして彼らは一様に、役立たずになったといいます。退職の日を記入したとき、私は早く 役立たず になりたいとおもっておりました。そしてライフプラン手帳の、退職後の一日の過ごし方を計画する スケジュール表の欄に色々考えて記入し、ああ、全部自分の時間だ と思ったことでした。

そして定年後何をしたいかも書くようになっています。二年前私はなにをかいていたのでしょうか。絵を描く、あちこち町角探訪をする、先ず八十八ヶ所まいりをすると、

とりとめもなく書き散らしています。忘れていました。忘れるから書いておかなければならないのでしょうか。今私はそんなこと忘れてしまい、クラリネットを吹いたり、こうして文章を書くことを続けています。そして、読み返してみて、ああそうだ、これやってみようと思い返したりもしております。

しかし自分ですることを見つけねばならなくなっていると、知っておかなければなりません。外側からは、何かを与えてはくれません。たとえば 仕事 とか。仕事と愛する人があれば、人は生きていけると、フロイトは言っています。たとえ年寄りでもあの上勝町の人たちは、自分の体力に合った山仕事で生き生きしています。そして孫に家を建ててやったと、嬉しそうに言います。それから見ると 役立たず になりたいと思っている私は、全く真反対にいることになります。

そう思ったとき、私は 感動 がなくなっているんだと気付きました。役立たずが 夢中 になれることを捜しても、それは無理なこと。感動しない人間に夢中になることなんか捜せるわけがない。建設的でかつ面白いこと、これを探そう、いや今から無様にやってみよう、そう思いました。ただ、

無理はすまい

嫌なことはすまい

与えられることだけに終わるから、感動がない

参加しよう

そう思って、またライフプラン手帳にかきくわえました。そして最後の 参加しよう に思い返すことができました。

人は人の中でしか、自己実現が出来ない

小林秀雄氏の文章にこうあったと思います。

これで、すこしは娘に回答できるかもしれません。

つい悪い癖がでました。なにかというと直ぐに優等生ヅラをして、紙に書いたような 正解 をしてしまいます。娘に対してまで、道德の教科書にありそうな 解答 をしてしまいました。世の中を斜めに見て、早く 役立たず になりたいと願っている者のすることではなかったと思っています。

しかしこの文章自体、子供達にあなた達の父はこんなことを考えて生きてきたのだと知ってもらいたくて書き出しました。いわば本当の意味での エンディングノート であるかもしれません。大体ライフプラン手帳は適切な項目設定がなされていて、それに従って記入していけば一人の人間の一生が整理されて記述できます。何年にどこで生まれ、名前は誰が付けたか、どこに住んでいたか、学歴はどうか、趣味はなどですから。これに 当社を志望した理由 の欄があれば、まるで 履歴書 です。それなら何ページにもわたって書かせるようにしてあるか、一枚の紙に要約して書くか程度のちがいでしかありません。逆の見方をすると、履歴書って凄いものだと思えてきます。人生ってこんなものなのかもしれません。が、しかし、子供達にはもっと知らせたい、あなたの親はこんなことを考え、こう生きたということを知ってもらいたい、そう思ってこの文章を書き始めました。ですから、書き残しておくことはいくらでもあります。父は スーパーマン ではなく、そこいら辺りに生きている、ただの男の一人です。それがたまたまあなた達の 父 になり、迷い迷って生きて、あなた達を懸命に育ててきました。だから間違ったこともあるかもしれません。父はそこら辺にいる、世の片隅で目立つことなく生きてきた、ただの男です。

ですから、この文章の読者は、私の子供二人と思って書いてきました。私の生きてきた 昭和 の時代 とその 世の中 のこと、そこで父は何を考え、どう行動してきたか。ですから、これは 履歴書 では書ききれない 私の エンディングノート です。

ロンドンオリンピックはもう終わりましたが、メイン会場のあったリバプールと言えば、我々世代は　ビートルズ　であろうと思います。確かに、私達は彼らと同時代を生きて、生活の中で彼らを聞いておりました。とにかく彼らは今までの価値観全てをひっくり返した存在でした。長髪ならば、私も流行に乗って長くしておりました。ジーンズを定着させたのも我々だったと思います。ビートルズとは関係ないことです。

長髪、ジーンズ、フォークソング、ヒッピーと、価値観の混乱がカオスのごとくでした。70年安保、全共闘の事は置くとしても、かつての価値観が突然崩れ始める予兆が　ビートルズ　だったように思います。世の流行から何時も一歩引いて暮らしていた私でさえ、彼らの曲は全部解ります。たった四畳半の下宿に、人が座れるほどのスピーカーを二台おき、何時もビートルズを聞かせてくれた友人がいました。彼はデモには参加せず、やかましくアジるハンドマイクの少し向うで、フォークギター一本で反戦フォークを歌っていました。

私がアルバイトで映画の映写をやっていたとき、Let it be　を映しました。最後の屋上での演奏が、いかにも印象深く記憶に残っています。ロンドンオリンピックの、ヘイ　ジュード　も聞いてしまいました。もう、彼らも古典に成りおおせたのでしょうか。あのお騒がせな、ジョンとヨーコのベッドイン会見で耳目を集め、キリストより人気がある、と言い放って大批判を受け、しかし、ビートルズを離れてもジョン・レノンは天才でした。あの音域の狭い声で、クラシックのように技巧を凝らさずとも、じっと聞き入ってしまう彼の曲は、暗殺されても残りました。私はジョンが一人になってから作られた曲の中で、Happy Christmas　が、心に何時も残っています。

彼の事はもっと考えてから書くべきだったといま思っています。

キリスト教の芸術は、なぜあかも心騒がせるのでしょうか。あの宗教芸術、彫刻、教会の壁のフレスコ画を見ても、そしてそれがルネッサンス以前であっても以後であっても、その前に立って少しも安らげないのは不思議なくらいです。なにか肉体の生々しさを感じさせ、それがいつかは滅ぶ肉体の約束事に身もだえしているように見えます。その上宗教画の制約に縛られ、画一的な様式が息を詰まらせます。鳴門の**美術館は半日見れば、どっと疲れさせられますし、倉敷の**美術館も同じです。魂が疲れます。処女受胎、受難、聖衣剥奪、最後の審判、なんでもいいです、それらを見ても、救われる思いをさせてくれません。ジョンも救われたかったのだと思います。

MOTHER と叫び　P A P A　帰って来てとそげた頬で叫び、

Imagine 想像してごらん、天国はなく、地の下に地獄もない、宗教もない、私達の上

には空があるだけ、今生きている私達がいるだけ、あなたは私を夢追い人というけれど、あなたも一緒に加わってほしい、そう薄い唇で、技巧も凝らさず歌います。ジョンはポールではなかった。ポールはイエスタディを残してだけで、薬をやって日本にも入れなかった。ポールは、イギリス人の自制心で今も生き残っているけれど、ジョンは

　　ヨーコ　がいなければ、プレスリーやマイケルジャクソンになっていたかもしれません。その出生のトラウマに縛られていたというのは簡単ですが、それでは終わらないものを感じます。キリスト教の伝統の中に、肉体の孤独、魂の孤独を感じてしまいます。彼の Imagine は、宗教は滅んだと叫んで回ったツアラトストラのように聞こえるからです。西洋で、キリスト教を否定することは大変なことです。やはりキリスト教の因習のなかで、神に立てつくのですから。最後の審判に怯えて否定するのは勇気が要ります。やはりあの筋肉隆々のキリストとその使徒、異端者の血を流して果てていく様が、どんな人の脳裏にも浮かぶのではないのでしょうか。魔女さえ焼き殺す宗教ですから。それを肯定する者も否定する者も、自分の魂を懸けてそうする宗教社会が、白人の社会です。

　　ジョンはヨーコとよく日本に、お忍びでやってきてたそうです。確か、伊勢神宮のも行ってたとおもいます。あの清潔で静謐な空間で、ほんと安らいだのではないかと、そうであればいいのにと期待を込めて思っています。

小学三年生のとき、私は自宅で一人で長期療養しておりました。その時、私は自分でも奇妙と思う遊びをしておりました。二枚の鏡を向かい合わせに立てさせます。それを覗き込むと、無限が映っています。それこそ自分と反対側の鏡を、一瞬にして映し返し、無限に繰り返しております。無限なんて抽象的な概念でしかないと思えるものでも、こんなに簡単に見られます。二枚でこうなら、三枚とか数を増やすとどうなるんだろうと、家中の鏡を捜しだし、三角形に並べてみました。・・・無限なんて消えてしまい、ただの三面鏡になってしまいました。しかし、これを回転椅子の座面に置くと、万華鏡のようになります。鏡は不思議な遊び道具です。四角の鏡で日の光を反射させ、小鳥に光を当てると、ぱっと鳥は飛び立ちます。外に出られない私には、これが光線銃でした。

大江健三郎氏は、松山の山奥の人でした。確かに難解でした。しかし初期の作品は、彼の意図したところとは違っているかもしれませんが、如何にもみずみずしく、あふれるような感性でありました。私は氏の小説が発表されると同時にそれを読み、作者の意図とは関係ないところで考え込んでおりました。ああっ、小説を書くって、恥ずかしいことなんだ。こんなことまで書いていいのか、わかりませんが、人格の全てをさらけ出し、パンツまで脱いで見せるってことなんだ、と思いました。不遜な言い方になりました。ノーベル賞まで貰っている文学者に対して抱く感想ではありませんでした。

しかし先日原発反対のニュースで見た氏はもうそれ以上想像力が及ばず、思考が止まっていると、かつての氏の主張を繰り返しておりました。政治的主張を文学者もしていいんです。しかし文学が文学であるゆえんは、作者のみずみずしい感性が言葉になって書かれていることではないかとおもっています。難しい哲学でもなく、政治的主張でもなく、そこに描かれたもの、作者の感性がとらえたもの、それが文学だとおもいます。その意味で、私は死者の奢りが凄いと今も思っております。なんて捉え方なんだ、これは何なんだーそんな読書体験でした。そしてこれを一口に実存主義というのはたやすい事と思います。しかしそれは他者が言葉で描いたものを読んで、現実を認識する、言葉で解り、それを学ぶということで、主義と名付けることはそんなことだと思います。そしていったん名付けてしまえば安心しきって、忘れてしまう。死者の奢りは、わたしをそれで済ませてはくれませんでした。

魂の抜けた肉体を鳥に与える鳥葬という儀式が、チベット仏教では行われているそ

うですが、これを知ったのは確か、世界残酷物語という映画だったと思います。その時は、なんて風変わりで残酷な慣習だろうとしか思いませんでした。しかし多くの命を奪って生きてきた人間が、死んで魂の抜けた肉体を自然に返し、鳥に与えて魂の天に昇ることを願う儀式と知って、一つは玉虫厨子の捨身飼虎図を思い出し、また毎日平気で魚を食べ、肉を食い、野菜の命を頂いて自分の命を養っているにも関わらず、人間が一番偉いと勘違いして傲慢に生きていることを当然としていますが、チベット仏教は人間も他の命も同じものとして、肉体を鳥にあたえます。魂が抜けるという事に宗教があるのかもしれませんが、魂の抜けた肉体を鳥の餌とするなんて、言葉だけの実存ではないとおもいます。 死者の奢り は事象としての 実存 を突きつけておりました。チベットの人たちは、言葉としての 実存 、哲学としての 実存 なんて知りもしません。しかし、死者の書を持つ彼らは、正に 実存 の世界を、自分の足で立ちながら生きています。五体投地の国です。大江氏はそんな 実存 を描いたと思っています。

あれは、なんだったんでしょう。高橋和己氏は 邪宗門 の中で、 大江健三郎氏 は 万延元年のフットボール で、何に対して闘ったのでしょうか。警察やら、軍隊やら、反乱を起こせばこれらと対峙し、暴力で鎮圧されます。国家でしょうか。体制でしょうか。それを構成しているのも我々自身なのに、これと闘うのでしょうか。とは言いながら、大江健三郎氏の 反国家 の意識は私も共通しています。 国家は暴力装置 と言ったのけた官房長官がいました。人民の側に立つと、国家は暴力装置と規定したくなるのですが、彼はその国家の中枢でありました。ところが、保守政党の論客は、国家の概念を広げて、国土、国民、主権としての国家を装って、国家体制を守れ、と言います。その実、彼の言ってることも暴力装置としての国家でありました。

60年安保の時、20万人ともいわれる人が国会を取り巻きました。そして 安保反対 と叫び、国会に突入しようとして果たせませんでした。しかし、これも 民意 でありました。声なき声 と時の首相は言ったのけました。

古い話ですが、日支事変当時、東大生に世論調査を行った記録があるそうです。その結果は85%が 中国に派兵すべし であったそうです。東大生という特殊な条件がありますが、やはりこれも 民意 でありました。

民主主義は、国民主権を謳い、選挙 という手段で間接民主制の下、一定の期間政権すなわち権力を、民意によって選ばれたものに委ねます。選挙によって民意は示されます。しかし代表者が選ばれた途端、民と代表者との間の乖離が始まります。

政治は、中道を行かなければいけません

三島由紀夫氏 は わが友ヒットラー の中で彼の人 ヒットラー にこう言わせています。彼もドイツ国民に選ばれた人でありました。

60年安保 は、我々団塊の世代はまだ子供で、当事者ではありませんでした。連日のデモを、私はテレビで見えていました。ある日、自衛隊員の子供の友達が言いました。

日米安保って 日本とアメリカが 仲良くしましょうって
ことだろう？

ちがう！ 一緒に戦争しようってことだよ

そう言い切ると、彼はとても戸惑った顔をしていました。

お父さんも 戦争に ゆくの？

私は そうだ と断言しました。

この 60年安保には一つの総括が出されています。

されどわれらが日々

です。その作者は、全共闘運動を評して、ゲバ棒を持ちたがる暴力衝動といいました。戦後の人間観にはなかったものだともいっておりました。私達は暴力衝動に駆られていたのでしょうか。私達は、後の東大名誉教授に　　猿以下　　だと言われたような気がしました。

70年安保は69年に、もう終わってしまっておりました。そして、浅間山荘事件と、あの忌まわしい連合赤軍事件で、皆俯いて忘れたように何も言わなくなりました。勿論、誰も総括しませんでした。その　総括　という言葉さえ、連合赤軍に呪われ、忌まわしさの象徴のようになってしまいました。

しかし、私達は安保反対と叫んで、安保に反対していたのでしょうか。ノンセクト・ラジカルズは共産主義革命を見ていたのでしょうか。それとも本当に、暴力衝動に駆られていただけなのでしょうか。最近私には、私達が敵としたものが解ってきたように思えます。一つは、国民から乖離した　国家権力　、もう一つは　全てを　商品　に変えてしまう　資本主義　です。国家権力は　嘘　をつきます。資本主義は　人間　をも　商品　にしてしまいます。それは今も同じことです。

今　ウオール街を占拠せよ　と連日デモが行われています。彼らの主張はさまざま、格差是正、機会の平等、もっと自由を、と叫んでいるかと思うと、一般の女性が　資本主義　が終わろうとしている　とインタビューに答えました。ああ、資本主義も行き詰まってるんだと、思いました。

ここまで、さまざまに考えてみましたが、やはり　あれはなんだったんでしょうか。かつての　新左翼の全共闘くずれ　は　されどわれらが日々　と考えて、未だ　総括　できずにおります。そして、今日まで　資本主義にどっぷりつかり、日本の繁栄のため　懸命に働いてきました。

昔、本屋さんになりたかった子供が、自分独りの時に考え出した鏡遊びのように、色々な本を自分勝手に読み散らかして眺めた的外れの景色を色々書いてきました。そして今、自分の精神にくい込むように本を読むのは、やはり若い時しかないのではと反省しています。今の時代の文学も、若い人はそんな風に読んでいるのかもしれませんが。私の精神の方が強張ってしまって、今の文学が読めないのだと思います。

戦後保守思想の代表者といわれている、小林秀雄氏は 本居宣長 を最後の仕事にしました。そのイデオロギー的偏向はいざ知らず、この人の若い時の文章は 知の芸術 であると思っていました。そんな冷徹なこの人の文章の中であって、 中原中也 論はひどく異質なものに感じました。ゴッホやランボーに 知 の及ぶ限りを語って、そのことを文芸にしてしまった小林秀雄氏の 知 が、深いところでおろおろと泣いているように感じられたからです。これを読んだのは、まだ高校生のころで、彼らのことなどなにも知らないし、知ったところで何も解らないことと同じ次元のままだったでしょう。今でも、中也が小林に遺稿を託したことが十分にわかりません。

君は彼とは思想が合うけど、僕とは気が合う
小林氏がそんな 悪魔の囁き をささやき、三年後に別れると、
僕のところに帰ってくる
と、気をふくらませて待ってしまう 天性の詩人、
自分で持ちきれないほどの野心と希望を抱え、時代を飛び越えた、理解されない 女優志望、
なんなんでしょう、これは。

しかし中也は小林だからこそ、信頼し切ってその遺稿を託したのだと思います。この人たちは、私達とは違う次元を生きていたのです。美 はそこにある と。

・・・、違うかもしれませんが、最期に、他人の創った 美 を介してのみ 美 を語れる 小林氏に、天性の詩人が 美 を見せつけたのかもしれませんが。

坂本龍一氏は言葉で物事を表現するのは 苦手 だと言っておりました。言葉では充分表現できないと。言葉で表現しないで、何かが理解できるの？と思ってしまいます。しかし、天才の頭の中では、物事に対して音楽が鳴り響くのです。あらゆる感情や思考が音となってあふれるのだそうです。私のような凡才には解らないまま終わる世界だと思います。ですから、言葉で語ってくれる文芸は、まだ手に取り易いものではありません。

ます。これもまた理解できているかどうかは別な話ですが。

また、司馬史観と評された司馬遼太郎氏は、

私は歴史的、具体的事実に基づいて人を理解することはできるが、そこから物事を規定する法則などを抽出して科学にすることはできないので、小説を書いているというようなことを、語っておられます。

この人たちにとっては、文学は 文芸 なのでしょう。音楽が音 学 ではないように。

堅苦しい話ばかりでした。文芸の話はこれで終わろうとおもいます。

ただ一つ、疑問に思っていることがあります。こんなことを書くと怖いことになるかもしれませんが、三島由紀夫氏は、 2・26 に蜂起した将校達に強く憧憬しており、東大全共闘の学生の前で、諸君らが 天皇陛下万歳と言えば、私は共闘できると講演していましたが、2・26の青年将校らに激怒して鎮圧させたのは、当の天皇陛下でありました。どこだったかの演習のときの白馬に跨って兵を閲兵する天皇陛下のことを、心震わせて、彼は語っていたと思います。

彼ら、創作する人は凄いとっています。

今、節電、省エネと声高に言われております。その性ではありませんが、薪割り機が欲しいと思っています。調べてみると電動、手動で油圧、エンジンを搭載したものと色々開発されているようです。近い将来、こんな機械を一家に一台もたなければならぬ時代がくるかもしれません。猫の尻尾 蛙の手 のベネシアさんがもうそんな生活をしているようにです。

今の地球上の人口全員が先進国並みの生活をするようになると、地球が4～5個必要になると、何かのテレビで見ました。それは資源がという意味でしたが、それだけでなく、今身近かなことでは、まぐろもコーヒーも小麦もどんどん値上がりしているのを実感します。それには個々に理由があるのですが、一まとめに言うと先ほどの 今まで貧しかった人たちも皆、先進国並みの生活が出来るようになって、豊かさを追い求め始めた結果だと思えます。

そんな風にならざるを得ないのですが、私達は仕事を離れると 晴耕雨読 と考えます。しかしこの考えも影が薄くなってきておりますが、それは人々がその土地を離れ、自らの手で物を作ることを忘れたからではないかと思っています。

また、私達は昔、囲炉裏をみております。薪をくべ、自在鍵に鍋をつるし、それで煮炊きをしたり温まったり、日常生活のいろいろなことをその周りでやっておりました。その他に炭と火鉢、七輪、それが、石炭にだるまストーブとなり、ちょっとハイカラなものに変わったように思いました。その後は石油、ガス、そして電気 ― そう変わってしまいましたが、薪、石炭、炭の生活を知っているのは我々の世代までではないでしょうか。私達は昔のこういった生活を実体験として持っていますから、やろうと思えばできるはずで。七輪に炭をいこし、かまどに薪をくべ、風呂も沸かす、そんな生活も出来ると思います。洋風薪ストーブが おしゃれ というものではありません。 スローライフなんて思っていたら、三日で逃げ出してしまいます。じゃ、薪割り機はどうなんだといわれそうですが、そこはもう 年 ですから。しかしその薪割り機一台から、昔の、そしてそれが 古臭くはない という生活が、戻ってきそうな気がします。

こんな歌を覚えていたなんて自分にびっくりなんです、メロディだけが浮かんできて、誰の歌なのか思い出もしませんでした。これを you tube で検索してみると、硬いギターの音が響き始め、それでも思い出さず、トリオ・ロス・パンチョスの字を見てまたびっくりでした。何歳のころだったのでしょうか。１９５５年に発表され、日本では１９５９年に紅白歌合戦で歌われたとありますから、私は７才から１１才までのことになります。ですからこの歌が 妻を亡くした男の歌 だなんて、知りもしませんでした。

最近始めたクラリネットで妙に音楽づいて、頭の中を時々思いがけないメロディが流れます。私が最初に吹けたのが 新日本風土記 のテーマ曲でした。そして次々と吹きたい曲が浮かんできます。しかしそのどれもが不完全なままで、クラリネットの音も息切れします。そうして息切れしながら、音符もないので、指で音を探りさぐり吹いてみます。聞かせることの出来るのは、犬と妻だけです。

しかし、しみじみ ある恋の物語 の詩を読みました。

彼女を愛し、人生に光と喜びを得た

彼女を失い、全てをうしなった

あなたは わたしの 幸せの全て

あなたは 不幸の全て

神は なぜ妻を愛させ 妻を奪うのか

愛とか恋とかは若い人のもので、年を取るとそんなことからかけ離れてしまうと思いがちですが、ともに人生を生きてきて、子供も巣立つと、取り残されるのは夫婦二人だけです。その時、ともにいたわり合い、またともに生きてきた人生を、これほど共感を持って振り返れる相手は夫であり、妻であると思います。それが、この曲のように片方が欠けたとき、深い絶望に突き落とされることになっても、それまで一緒に懸命に生きれたら、その人生は幸せなのだと思います。。

白内障と言え、もはや珍しくもない目の疾病ですが、それというのも長寿社会になったせいだと思います。しかし昔はそれだけで失明の元になっていたのですから、有難い時代になりました。

私の白内障は相当早くから自覚症状があり、そのあと長く放置していたのでさすがの眼科の名医もてこずったようです。そのことから、何かの参考になればと書き始めました。

仕事を引退すれば、先ず一番に眼科へ行こうと決めておりました。見えてなかったからです。解ってて放置していたのですから、性質（たち）が悪い。しかし白内障の手術はもう二十数年前に義母が両眼受けておりましたから、大丈夫と高を括っておりました。それが素人の浅はかさでした。

YOU TUBEなんかでも白内障の手術は沢山投稿されており、すぐにでも見られますが、わたしの白内障はひどかったみたいで、口にこそ出ませんが、医者がぽつともう少し早くきていたら、とつぶやいておりました。と言いますのも光を斜めに当てて水晶体を映して見る検査で、私の水晶体は茶色くまでなっていたからです。白色を通り越し、茶色に変わった水晶体はもはやドリルーと主治医はいつておりましたが一超音波ドリルの振動で破碎するには硬くなりすぎていて、ドリルにだけ頼った手術をしたら眼球自体にダメージを与え、よくないのだそうです。たとえば水晶体をつつんでいる透明な膜を破ってしまう、ドリルの発熱でやけどさせてしまう、といったことになりかねません。そこで主治医は通常なら3mmほどの切開で行う手術を5mmほど切開し、ピンセットで水晶体をつまみ出す手法で行うといつておりました。素人にはそれがどんな方法化はわかりませんが、患者の状態に応じて手術法を変えられる医師に、信頼が増しました。

しかし医師にとって厄介なことがまだありました。眼球振盪という問題です。病名さえ読みにくいのですが、がんきゅうしんとう と読み、先天性の、眼球がふらふら不随意に動いてしまう状態をいいます。いかに確立された、安全な手術といっても、目がふらふら動いたのでは出来ません。わかりました、全身麻酔でやりましょう、ということになりました。全身麻酔なら眼振をとめられるそうです。この眼振は、六十年も前に、この病院で指摘されていたことです。知ってはいたのですが、それと白内障手術は結びついてなく、驚きでした。ところがその問題についての解決策もありました。全身麻酔をすることで眼振は止められるそうです。ただ全身麻酔は恐怖でした。なにも抗う

ことができず、ふっとあっちに連れて行かれるのですから。しかしそれも三十分ほどだといいます。心電計をつながれ、点滴をされ、エア・マスクをかぶされて導尿カテテルをいれられるのだろうか、と不意に思いました。医者にかかり、治療されるって恥ずかしいという気持ちをもってたら、なかなか出来ない、勇気のいることだと思い返しました。そんなこんなで、医師のにとって、はたはた迷惑な私の手術も無事成功し、手術後十日を迎えています。いまこのように厄介な疾病を抱えている方がいらっしゃったら、ご心配は要りません。医師はどんな問題も解決する手段をもっております。こんなことなど克服して行きましょう、ご同輩。

手術の後というには、日はまだ浅いのですが、早や二週間たちました。私自身、自信がなくて退院後すぐには外へゆかなかったのですが、先日わたしのしごとである 犬の散歩 に朝早く出かけてみました。

わたしは子供のときから近眼で、早くに眼鏡をかけました。ですから視界といえば眼鏡の枠で仕切られて見える部分がぜんぶだと思い、ごく自然にそうだときめこんで疑いもしておりませんでした。しかし、それが一種のかんどうをもってくつがえされたのです。手術の翌日、それも朝の診察の時、それまで貼り付けられていた固い眼帯がはずされました。まだ二十四時間も経っていないのにです。とはいいいながら、わたしも心配で、固い眼帯の隙間からのぞいてみてはいたのです。見えました。なぜか見たこともない視界が広がっております。とはいっても眼帯の端のすきまからですから、ちっぽけな視界でした。とはいえ、まず見えることに安心です。それでも、まる一日も経っていないのに目を見開いて生活していいと言われたことには驚きでした。私は医者に言われた防塵眼鏡をその日からかけ、他は普通に生活し始めました。片方はそれまで通り。もう片方は・・・、なんでしょう、裸眼でこんなに見えたことに感動です。視野のことには気づきませんでした。よく見えます。はっきりと見えるのではありませんが、今までのように眼鏡をかけてなくとも不自由なく行動できます。躓きもせずぶつかりもしないで歩けます。ちょっとした喜びです。ところが、また違う異変に気づきました。遠近感が違って見えます。ですから下を向いて歩いていますと、ふわふわとして酔いそう。そうです、めまいのような、車に酔うときのような、よろめくような、そんな気分させられました。あぶなくってうかうか歩いちゃおれません。壁をつたい、手すりをもって歩きました。しかしそれもほんの半日のことでおわり、いつの間にか慣れていました。手術したのが利き目の右だったからかもしれません。

しかし用心はしました。幸い個室に入院させられてましたので、人に気遣うことも必要なく、ひんがな一日ベッドに寝っ転がり、それに飽きたらテレビに合わせてラジオ体操をしたりしてすごしました。それしかありません。ぶつかってもいけない、こけてもいけないときづかうばかりです。その四泊五日の入院生活が終わると、手術日から一週間後の診察を言われて退院しました。たぶん白内障手術では一番用心したスケジュールだったとおもいます。

そして眼鏡をかけない日常生活が始まりました。まずまぶしい、そして防塵眼鏡が鬱陶しい、近眼のままの生活に慣れなくてはいけない、要するによく見えない。そんな生活を今もしております。だが、驚きがありました。人もいない、車もほとんど見かけない、そんな時間を選んで 犬の散歩 に出かけると、すこし黄みがかった防塵眼鏡を通して見ても外界が明るいのです。色彩が鮮やかで明るく、なにより今の季節の若葉のわかやいだ緑がやさしいのです。朝日もやわらかく、目にそう刺激を与えません。駅裏の、草のやわらいだ緑に、なにを思ってそんな大げさな連想をしたのかわかりませんが、印象派の絵画、それもモネの 日傘をさす夫人 を思い出しました。たぶん強い白内障の時は、あの沈鬱なヨーロッパ絵画のまんまの色彩感覚で外を見てい

たものと思います。ところが人口の眼内レンズに変えると、濁りのない、そのまんまの色彩を見ることができるようになりました。そして区切られていない視界です。そんなことが大げさに、日傘をさす夫人 を思い出させたのでしょう。

いまは防塵眼鏡をはずし、両眼を回り込むようにして被ってくれるサングラスをかけています。かつて日活映画などでは、悪者はみなサングラスをかけていました。裏返しの意味で、憧れめいたものを子供の時抱いたものです。それがいまサングラスをかけなければなりません。ちょっとくすぐったいきもちですが、用心のためと言い訳しながら、安久谷鵜のようにサングラスをかけて歩いています。ちょっと浮いてるかなあ。

手術の後というには、日はまだ浅いのですが、早や二週間たちました。私自身、自信がなくて退院後すぐには外へゆかなかったのですが、先日わたしのしごとである 犬の散歩 に朝早く出かけてみました。

わたしは子供のときから近眼で、早くに眼鏡をかけました。ですから視界といえば眼鏡の枠で仕切られて見える部分がぜんぶだと思い、ごく自然にそうだときめこんで疑いもしておりませんでした。しかし、それが一種のかんどうをもってくつがえされたのです。手術の翌日、それも朝の診察の時、それまで貼り付けられていた固い眼帯がはずされました。まだ二十四時間も経っていないのにです。とはいいいながら、わたしも心配で、固い眼帯の隙間からのぞいてみてはいたのです。見えました。なぜか見たこともない視界が広がっております。とはいっても眼帯の端のすきまからですから、ちっぽけな視界でした。とはいえ、まず見えることに安心です。それでも、まる一日も経っていないのに目を見開いて生活していいと言われたことには驚きでした。私は医者に言われた防塵眼鏡をその日からかけ、他は普通に生活し始めました。片方はそれまで通り。もう片方は・・・、なんでしょう、裸眼でこんなに見えたことに感動です。視野のことには気づきませんでした、よく見えます。はっきりと見えるのではありませんが、今までのように眼鏡をかけてなくとも不自由なく行動できます。躓きもせずぶつかりもしないで歩けます。ちょっとした喜びです。ところが、また違う異変に気づきました。遠近感が違って見えます。ですから下を向いて歩いていますと、ふわふわとして酔いそう。そうです、めまいのような、車に酔うときのような、よろめくような、そんな気分させられました。あぶなくってうかうか歩いちゃおれません。壁をつたい、手すりをもって歩きました。しかしそれもほんの半日のことでおわり、いつの間にか慣れていました。手術したのが利き目の右だったからかもしれません。

しかし用心はしました。幸い個室に入院させられてましたので、人に気遣うことも必要なく、ひんがな一日ベッドに寝っ転がり、それに飽きたらテレビに合わせてラジオ体操をしたりしてすごしました。それしかありません。ぶつかってもいけない、こけてもいけないときづかうばかりです。その四泊五日の入院生活が終わると、手術日から一週間後の診察を言われて退院しました。たぶん白内障手術では一番用心したスケジュールだったとおもいます。

そして眼鏡をかけない日常生活が始まりました。まずまぶしい、そして防塵眼鏡が鬱陶しい、近眼のままの生活に慣れなくてはいけない、要するによく見えない。そんな生活を今もしております。だが、驚きがありました。人もいない、車もほとんど見かけない、そんな時間を選んで

犬の散歩 に出かけると、すこし黄みがかった防塵眼鏡を通して見ても外界が明るいのです。色彩が鮮やかで明るく、なにより今の季節の若葉のわかやいだ緑がやさしいのです。朝日もやわらかく、目にそう刺激を与えません。駅裏の、草のやわらいだ緑に、なにを思ってそんな大げさな連想をしたのかわかりませんが、印象派の絵画、それもモネの 日傘をさす夫人 を思い出しました。たぶん強い白内障の時は、あの沈鬱なヨーロッパ絵画のまんまの色彩感覚で外を見ていたものと思います。ところが人口の眼内レンズに変えると、濁りのない、そのまんまの色彩を見ることができるようになりました。そして区切られていない視界です。そんなことが大げさに、日傘をさす夫人 を思い出させたのでしょう。

いまは防塵眼鏡をはずし、両眼を回り込むようにして被ってくれるサングラスをかけています。かつて日活映画などでは、悪者はみなサングラスをかけていました。裏返しの意味で、憧れめいたものを子供の時抱いたものです。それがいまサングラスをかけなければなりません。ちょっとくすぐったいきもちですが、用心のためと言い訳しながら、パンダのようにサングラスをかけて歩いています。ちょっと浮いてるかなあ。

白内障もそうなんです。なにが、と言われそうですがそうです。眼も結局老化で、一種の生活習慣病だと医師に言われました。血圧が高い、糖尿病、メタボ、そんなことと一緒に、生活習慣が眼に出てきたんだということです。そうでなくとも眼は口ほどにものを言い、口から入ってくるもので病気になっちゃいます。酷使したからかもしれません。強度の近視の人はもともとなりやすいとも言われました。そうかあ、と納得してもいけません。もともとメタボと言われ、気を付けてダイエットもしたのです。それに根が低血圧で、一度など血圧が低すぎると、献血を断られました。最高血圧が100以下はできないんだそうです。ところがその低血圧も白内障に結びつくのだそうです。血圧も低ければ低いほどいいというわけではないように、コレステロールも数値が低いとインフルエンザにはかかりやすくなるし、癌にもなりやすいそうですから、悪玉の張本人のように思われているコレステロールも認識を変えたほうがいいんじゃないかと思いました。テレビもそんな煽り方をして、何かの悪玉を作り出し、ことごとしくいいたてますが、健康番組も当てにはなりません。ニガリがいいといえ、それまで店頭に並んだこともないスーパーで争って買い求め、寒天が大増産して大量に供給できるようになった時にはもう買ってくれなくなったり、そんなことが今までも多々ありました。

ところがウオーキングはすたれていません。私も御多分にもれず、歩いています。それも朝5時から歩きます。そんな時間、人っ子一人いないだろう、いても新聞配達の人ぐらいだろうと思ってました。ところがどうでしょう、片道2キロで、何人もの人とすれ違います。歩いている人、ごみを出す人、外を掃く人、中には木の剪定、草刈をする人までいます。夏は昼間が暑いせいもあるのですが、年寄りも私を含めて、朝早くから目が覚めるんです。かけてくわえて、何かしようと思ひ込んで、つい、歩きだしてしまい、痛い膝を引きずってでも歩きます。それでいいのかなあと考えてしますが、そう思う私も歩きます。市民体育館で筋力トレーニングもしています。しかし、思い込んじゃいけないと考えてはいます。健康のためには命もいらななんて、随分逆説的な今の現状ではないかと思うからです。

芥川のアフォリズムは剃刀の切れ味で、肌を撫でていきます。あとに血の一筋が走ります。若い時、そんな思いで読んでおりました。

諸事雑感の一人話にも、書き落としたこと、書き切れなかったことが何時もありました。また、さほどまとまった文章にはなりそうにないこともありました。落ち葉を拾ってみます。

人という字は、人と人が支えあっているから 人 だと聞かされてきました。これを広めたのは金八先生ですね。もちろん金八先生の以前から言われていたことでもあったのですが、本当はこれは違うと、当の金八先生が言うておりました。あの字の元は、人が手を下げて歩いているところからきているとも、人が田んぼの地面から落穂を拾っている形からきているとも、あるラジオ番組でしらっと言うておりました。支えあっているのなら、いつも支えている人はしんどいばかりだと思っておりました。

あの ウッドストック にマイルスデイビス が出演していたとは。2時間余りの演奏をやったのけたそうです。ロックの勃興で、出ないほうがいいと言われていたのを蹴って、ロックばかりの演奏の中、最終日午後、まるで取りを取るように出演し、観客にまるで媚びず、観客を置いてけぼりにして演奏して終わりました。ロックは子供の頭のままの若者の音楽と思い知らせて、圧倒的な存在感を示して終わりました。たぶんそれほど完成されたジャズだったのでしょうか。そしてジャズは終わってしまいました。今も東京ジャズフェスティバルが行われていますが、もうピークは終わった音楽です。ジャズはマイルスデイビスを生んで、彼のために存在したジャンルだったと思っています。

歌の話の別な思いです。あんな 歌 はもう来ないのでしょうか。古い話です。日本中が一曲の歌を歌って、いまでも覚えており、歌おうと思えば歌えるなんて、かつてそんな曲が存在しました。

いきな くろべいえー みこしのまあつに

ひさしぶーりに てをひいて おやこであるける うれしいさあに

なけた なけた こらえきれずうに なけたあっけえ

挙げればきりなく出てきます。そういえばついこの前 ひさしぶーりに の人も亡くなったのでした。

そんな文化で育った者には、今何がはやっているのか解りません。子供でもいれば、子供が今の音楽を教えてくれたのですが、その子供さえそばを離れて家から出ましたから、日常の中に今はやりの歌を引き込んでくれるものはおりません。テレビに歌番組も無くなったし、そういえばラジオもNHKばかり聞いていると、新しい歌なんか流れていないですね。

歌を今のスタイルにしたのは誰でしょう。マドンナかなあと思っています。もちろん、プ

レスリー・イン・ラスベガスも、私たちの世代だったんでしょうか。しかし、あれを、つまりマドンナ や ガガ 、マイケル・ジャクソン を歌手と呼ぶのは抵抗ありませんが、彼らの歌 をなんとよんだらいいのでしょうか。踊って、ついでに歌ってですから、まるでショーです。ですから、歌えて踊れるエンターティナーを目指しますなんて聞いたことのある科白ですから、彼らはエンターティナーなんだと思います。その流れで日本の女性歌手たちも変化してきたのかと・・・、いらぬお世話ですが、思います。しかし、こんな感想を持つのも、美空ひばりを嫌ったサトーハチローの轍を踏んでいるのでしょうか。そんなことはありません。私は素朴に、今の人たちはかわいそうだと思っているだけです。美しい言葉と美しいメロディが無くなったと思うからです。悲しいから踊るんです、というCMがありました。CMですから、売り文句かと聞き流すほどのものかはしれませんが、引っかかりました。なにか、解るんですとしか言いようがないのですが、この言葉がふっと腑に落ちました。踊りと歌の違いはありますが、歌も踊りも頭にだけ響くものではなく、胸にこたえてくるものだと思ってました。いまと昔の状況は違いますので、求められるものが違って当然ですから、与えられるものも違ってきます。わたしにはそれが響いてこないというだけです。でも、今の人たちは 歌 から与えられるものがこんなにも貧困なもので、かわいそうだと思っています。

日記って、何でしょう。トルストイは日記を二冊持っていたそうです。彼はものすごい恐妻家で、妻に日記を読まれないように、というか、読まれても大丈夫な日記と読まれたくない日記を使い分けていたそうです。たぶんこれは有名な話なんだと思いますが、私は小林秀夫氏の文章から知りました。しかし彼、トルストイの晩年は悲慘だったのではと想像します。彼は日記二冊をもって、着の身着のままでロシアの大地に逃げ、鉄道沿いに歩いて逃避行を続けたとかで、旅先で風邪から肺炎を起こし、亡くなったと記憶してます。記憶違いであればお許しください。

しかし彼はなぜ日記を二冊かいていたのでしょうか。妻に読まれてはいけないほうと、読まれてもいいほうとをかき分けていたと考えるのは当然です。それで、読まれてはいけないほうは厳重に隠していたのでしょうか。だが死んでしまったら隠していたほうも見つかってしまうと思います。彼は両方とも見つかってしまうことを前提に日記を書いていたのではないのでしょうか。妻には隠しても、世の人々に読まれることのほうは意識していたと考えています。彼ほどの文豪ですから、自意識として日記も作品と思っていたでしょう。ドフトエフスキー氏もそうだったみたいです。じゃあ彼らの日記は本来の日記だったのでしょうか。作品とすれば、その日記には書き手によって手を加えられ、日記に書かれるべきことに取捨選択が行われていたのではと思ってしまいます。もっとも、普通の人も、まるっきりの事実のみをドキュメントのように書くとはかぎりません。しかし読む人を意識しているのでしょうか。多少は意識していると思います。日記は記録であり、残すものであるからです。ちょっと大きなことになってきました。

日記が記録であれば、ただの備忘録です。しかし日記は自分に起こった事実に基づいて、そこに自己を反映させながら書かれるものだと思います。そうして日記を書いて、自分が持ってるときは、その読者は自分だけ。しかし、残ってしまえば、そのまま捨てられるか、誰かが読むのでしょうか。それを思うと、うかうかとしたことは書けなくなってしまいます。しかし実際、そんなこと意識して日記を書くのでしょうか。思うさま書いて、あと自分も読まないなんてこともあるでしょう。でも書くと誰かの目を意識してしまう。日記文学なんてものもありますが、永井荷風氏とか高見淳氏のものを、読んだ覚えがあります。

実は私、自分では日記を書きません。学校で、日記をかけと言われましたが、なにか空恐ろしくて書いてきませんでした。三日坊主ということもありました。書けと言われての三日坊主は、罪悪感に悩まされます。しかし、一度、二ページほど書いた日記を読むと、その日の事がありありと思い出されました。その恐ろしさったら、ありませんでした、それ以来日記を書こうとは思わなくなりました。